

斎院の遺跡

北斎院地内

斎院鳥山

1994

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター

斎院の遺跡

キタ
北斎院地内
サ
ヤ
カラス
ヤマ
斎院鳥山



1994

松山市教育委員会
財團法人松山市生涯學習振興財團
埋蔵文化財センター



卷頭図版 斎院鳥山遺跡 SD I 出土品

序

本書は、昭和59年から平成4年度にかけて斎院地区で緊急調査しました3遺跡の発掘調査報告書であります。

松山平野の西端に位置する本遺跡群は、宮前川流域を中心とする巨大集落の一部であり、今日までに当地域の発掘調査は、地理的に低地であること、水の多い地帯であることなどの条件から、あまり報告されていないのが現状です。

今回報告の北斎院地内遺跡1・2次調査からは、中世末期から近世初頭の墓、溝状遺構、掘立柱建物、井戸などを検出し、松山平野では数少ない集落構造を持つ遺跡であることが判明しています。また、斎院鳥山遺跡は、弁天山丘陵において東方に舌状に突き出た小丘陵上に位置する環壕集落です。ここからは、弥生時代前期の土器や石器を多量に出土しており、県内では最も古い環壕集落のひとつと考えられています。

これらの調査結果は、当地域の遺跡群における未調査区域や未解明部分が山積するなかにあって、それらの基礎的資料となるものと思われます。今後一層の調査研究が期待されるところであります。

こうした成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位のお陰と感謝申し上げ、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げる次第であります。

終りに、本書が、埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成6年8月1日

財団法人 松山市生涯学習振興財团

理事長 田中誠一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会及び財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが昭和59年～平成4年の間に、松山市北斎院町内で実施した3遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 遺構の略号は、住居址：S B、土壤：S K、清：S D、自然流路：S R、樹列：S A、柱穴：S Pとし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
3. 遺構の測量は、調査担当者及び担当者の指示のもと補助員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製図は、梅木謙一の指示のもと、武正良浩、水口あをいを中心 に山下満佐子、松山桂子、三木和代、大西陽子、好光明日香、兵頭千恵、渡部美美他が行つた。なお、石器の実測は加島次郎が行つた。
5. 掲載の遺構図・遺物図は、各スケール下に縮尺を表記した。
6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行つた。
7. 本書の執筆は、梅木謙一、武正良浩、加島次郎が行い、西尾幸則氏の助言を得た。証書は、生鷹千代、平岡直美の協力を得た。
8. 編集は梅木謙一が担当し、編集・校正においては水口あをいの協力を得た。
9. 本報告書の作成にあたり、愛媛大学法文学部下條信行先生から御指導と助言を賜った。記して感謝申し上げます。
10. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

本文目次

第1章 はじめに	〔梅木・武正〕
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査・刊行組織	3
3. 環境	3
第2章 北斎院地内遺跡1次調査地	〔武正〕
1. 調査の経過	9
2. 層位	11
3. 遺構と遺物	12
4. 結び	26
第3章 北斎院地内遺跡2次調査地	〔武正〕
1. 調査の経過	37
2. 層位	40
3. 遺構と遺物	41
4. 結び	59
第4章 斎院鳥山遺跡	〔梅木・加島〕
1. 調査の経過	69
2. 立地と土層	71
3. 遺構と遺物	71
4. 結び	100
第5章 自然科学分析	〔古環境研究所〕 … 111
第6章 北斎院地内遺跡の中世集落	〔武正〕 … 124
第7章 調査の成果と課題	〔梅木〕 … 130

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第1図 松山平野北西部の主要遺跡（縮尺1/50,000）	2
第2図 廟院周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	5

第2章 北斎院地内遺跡1次調査地

第3図 調査地位置図（縮尺1/1,500）	10
第4図 調査区西壁土層図（縮尺1/20）	11
第5図 遺構配置図（縮尺1/250）	12・13
第6図 1号掘立柱建物址測量図（縮尺1/100）	15
第7図 S K 1・S K 31測量図（縮尺1/40）	17
第8図 S K 33・S K 38測量図（縮尺1/40）	18
第9図 S D・S K出土遺物実測図（縮尺1/3）	19
第10図 S P・包含層出土・遺物実測図（縮尺1/3）	20
第11図 木棺墓内出土遺物実測図（縮尺1/3）	21
第12図 1号・2号墓測量図（縮尺1/20）	22
第13図 1号井戸測量図（縮尺1/20）	24
第14図 包含層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）	25
第15図 包含層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）	26
第16図 出土古錢拓影（縮尺1/2）	27

第3章 北斎院地内遺跡2次調査地

第17図 調査地測量図（縮尺1/800）	38
第18図 遺構配置図（縮尺1/300）	39
第19図 調査区東壁土層図（縮尺1/40）	40
第20図 1号・2号掘立柱建物址測量図（縮尺1/80）	42
第21図 3号掘立柱建物址測量図（縮尺1/80）	43
第22図 4号・5号掘立柱建物址測量図（縮尺1/80）	44
第23図 S K 1・S K 2測量図（縮尺1/40）	45
第24図 S K 3・S K 4測量図（縮尺1/40）	46
第25図 S K 5～S K 8測量図（縮尺1/40）	47
第26図 S K 9・10・11測量図（縮尺1/40）	48
第27図 S D 1・S D 2測量図（縮尺1/80）	50

第28図	S D 1 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3)	51
第29図	S D 2 出土遺物実測図（1）（縮尺 1 / 3)	53
第30図	S D 2 出土遺物実測図（2）（縮尺 1 / 3)	54
第31図	1号・2号土壤墓測量図（縮尺 1 / 30)	55
第32図	S P・S D・S I 出土遺物実測図（縮尺 1 / 3)	56
第33図	S X・土壤墓内出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ・ 1 / 2)	57
第34図	出土地点不明遺物実測図(1)（縮尺 1 / 3)	58
第35図	出土地点不明遺物実測図(2)（縮尺 1 / 3)	60

第4章 斎院鳥山遺跡

第36図	調査区位置図（縮尺 1 / 1200)	70
第37図	S D 1 測量図（1 / 100)	72
第38図	S D 1 遺物出土状況（縮尺 1 / 60 ・ 1 / 8)	73・74
第39図	S D 1 出土遺物実測図（1）（縮尺 1 / 4)	75
第40図	S D 1 出土遺物実測図（2）（縮尺 1 / 4)	77
第41図	S D 1 出土遺物実測図（3）（縮尺 1 / 4)	78
第42図	S D 1 出土遺物実測図（4）（縮尺 1 / 4)	79
第43図	S D 1 出土遺物実測図（5）（縮尺 1 / 4)	80
第44図	S D 1 出土遺物実測図（6）（縮尺 1 / 4)	81
第45図	S D 1 出土遺物実測図（7）（縮尺 1 / 4)	82
第46図	S D 1 出土遺物実測図（8）（縮尺 1 / 4)	83
第47図	S D 1 出土遺物実測図（9）（縮尺 1 / 4)	84
第48図	S D 1 出土遺物実測図（10）（縮尺 1 / 4)	86
第49図	S D 1 出土遺物実測図（11）（縮尺 1 / 4)	87
第50図	S D 1 出土遺物実測図（12）（縮尺 1 / 4)	88
第51図	S D 1 出土遺物実測図（13）（縮尺 1 / 4)	89
第52図	S D 1 出土遺物実測図（14）（縮尺 1 / 4)	90
第53図	S D 1 出土遺物実測図（15）（縮尺 1 / 4)	92
第54図	S D 1 出土遺物実測図（16）（縮尺 1 / 4)	93
第55図	S D 1 出土遺物実測図（17）（縮尺 2 / 3)	96
第56図	S D 1 出土遺物実測図（18）（縮尺 2 / 3)	97
第57図	S D 1 出土遺物実測図（19）（縮尺 1 / 4)	98

第5章 自然科学分析

第58図 プラント・オパールの顕微鏡写真（1）	118
第59図 プラント・オパールの顕微鏡写真（2）	119
第60図 プラント・オパールの顕微鏡写真（3）	120
第61図 プラント・オパールの顕微鏡写真（4）	121
第62図 プラント・オパールの顕微鏡写真（5）	122
第63図 プラント・オパールの顕微鏡写真（6）	124

第6章 北斎院地内遺跡の中世集落

第64図 北斎院地内遺跡の中世集落（縮尺1／500）	125
第65図 北斎院地内遺跡の集落変遷図（縮尺1／1,000）	126
第66図 北斎院地内遺跡の中世土器（縮尺1／8）	128

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1 斎院烏山遺跡 S D 1 出土品

第2章 北斎院地内遺跡1次調査地

- 図版 1. 1 遺構検出状況(東区)(北より)
2 1号掘立柱建物跡(北西より)
- 図版 2. 1 遺構検出状況①(西区)(南より)
2 遺構検出状況②(西区)(南西より)
- 図版 3. 1 S D 1・2(西より)
2 3号墓①(南より)
- 図版 4. 1 3号墓②(東より)
2 1号墓(南西より)
- 図版 5. 1 1号井戸(南より)
2 1号井戸(南より)
- 図版 6. 1 S D 1 出土遺物(3・5) S D 2 出土遺物(6~8)
SK 1 出土遺物(11・12)
- 図版 7. 1 S P97出土遺物(14) S P251出土遺物(15・17) S P290出土遺物(18)
墓2出土遺物(24・25) 墓3出土遺物(21~23)
- 図版 8. 1 包含層出土遺物

第3章 北斎院地内遺跡2次調査地

- 図版 9. 1 南区遺構検出状況①(北より)
2 南区遺構確認状況②(北より)
- 図版 10. 1 東壁土層(西より)
2 西壁土層(東より)
- 図版 11. 1 S P279遺物出土状況(南より)
2 S D 1・S D 2 検出状況(南西より)
- 図版 12. 1 土壙墓1検出状況(南東より)
2 土壙墓2検出状況(南東より)
- 図版 13. 1 土壙墓1・2検出状況近景(南より)
2 土壙墓1・2検出状況遠景(南東より)
- 図版 14. 1 北区遺構検出状況(北より)
2 北区完掘状況(北より)

- 図版15. 1 1号掘立柱建物址（西より）
2 5号掘立柱建物址（南より）
- 図版16. 1 S D 1 出土遺物
2 S D 2 出土遺物
- 図版17. 1 S P 279出土遺物（19） S P 400出土遺物（20）
S P 427出土遺物（23） S I 1 出土遺物（26）
- 図版18. 1 S D 13出土遺物（24・25） S X 1 出土遺物（27・28）
墓1出土遺物（29）
- 図版19. 1 包含層出土遺物①
2 包含層出土遺物②

第4章 斎院鳥山遺跡

- 図版20. 1 S D 1（西より）
2 S D 1（南西より）
- 図版21. 1 S D 1断面土層①（西より）
2 S D 1断面土層②（西より）
- 図版22. 1 S D 1 遺物出土状況遠景①（西より）
2 S D 1 遺物出土状況遠景②（西より）
- 図版23. 1 S D 1 遺物出土状況近景①（西より）
2 S D 1 遺物出土状況近景②（東より）
- 図版24. 1 S D 1 遺物出土状況近景③（東より）
2 S D 1 遺物出土状況近景④（南西より）
- 図版25. 1 S D 1出土遺物①
- 図版26. 1 S D 1出土遺物②
- 図版27. 1 S D 1出土遺物③
- 図版28. 1 S D 1出土遺物④
- 図版29. 1 S D 1出土遺物⑤
- 図版30. 1 S D 1出土遺物⑥
- 図版31. 1 S D 1出土遺物⑦
- 図版32. 1 S D 1出土遺物⑧
- 図版33. 1 S D 1出土遺物⑨
- 図版34. 1 S D 1出土遺物⑩
- 図版35. 1 S D 1出土遺物⑪
- 図版36. 1 S D 1出土遺物⑫

表 目 次

第1章 はじめに

表1 調査地一覧	1
----------	---

第2章 北斎院地内遺跡1次調査地

表2 掘立柱建物址一覧	28
表3 溝一覧	
表4 土壙一覧	
表5 墓一覧	29
表6 井戸一覧	
表7 S D出土遺物觀察表（土製品）	30
表8 S K出土遺物觀察表（土製品）	31
表9 S P出土遺物觀察表（土製品）	
表10 墓出土遺物觀察表（土製品）	32
表11 包含層出土遺物觀察表（土製品）	
表12 出土遺物觀察表（貨銭）	34

第3章 北斎院地内遺跡2次調査地

表13 掘立柱建物址一覧	62
表14 土壙一覧	
表15 溝一覧	63
表16 井戸一覧	
表17 S D 1出土遺物觀察表（土製品）	64
表18 S D 2出土遺物觀察表（土製品）	65
表19 S P出土遺物觀察表（土製品）	
表20 S D・S I出土遺物觀察表（土製品）	
表21 S X出土遺物觀察表（土製品）	
表22 土壙墓出土遺物觀察表（土製品・銅錢）	66
表23 地点不明出土遺物觀察表（土製品）	

第4章 斎院鳥山遺跡

- 表24 S D 1 出土遺物観察表（土製品・石製品） 101

第5章 自然科学分析

- 表25 墓1の植物の珪酸体分析結果① 113
表26 主な分類群の植物体量の推定値
表27 墓1の植物珪酸体分析結果② 114
表28 墓2の植物珪酸体分析結果① 115
表29 主な分類群の植物体量の推定値
表30 墓2の植物珪酸体分析結果② 116
表31 植物珪酸体の顕微鏡写真一覧 117

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

松山市北斎院町1224—1他8筆（昭和59年）、松山市北斎院町215—2他2筆（昭和63年）、松山市北斎院町219—1他1筆（平成3年）における宅地開発に伴い、関係者より埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、「文化教育課」と記す）に提出された。

確認願いが申請された3地点は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「26 南斎院遺跡」と「29 北斎院遺跡包含地」内にあり、周知の遺跡地として知られている。

北斎院町は、松山平野北西部にある三津湾にそそぐ宮前川の中～下流域にある。宮前川流域は、古くは古墳遺跡、近年では宮前川斎院遺跡、宮前川別府遺跡、宮前川津田遺跡等弥生時代から古墳時代、さらには中世の集落遺構と多量の遺物が出土し、松山平野の主要な遺跡地帯であることが明らかとなってきた。

文化教育課では、確認願いが申請された3地点について埋蔵文化財の有無と、その遺跡の範囲や性格を確認するため、順次確認調査を実施した。

確認調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行った。発掘調査は、遺跡が消失する地域に対し、当該地の弥生時代～中世の集落域の確定及び集落構造の解明を主目的とし、文化教育課及び財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者各位の協力のもと昭和59年度、昭和63年度、平成4年度に実施した。

●表1 調査地一覧

遺跡名	所 在 (松山市)	面積(㎡)	調査期間
北斎院地内1次	北斎院町215—2, 216, 217	1,258.89	1988(昭和63)年8月3日～同年10月31日
北斎院地内2次	北斎院町219—1, 221—1の一部	1,149	1992(平成4)年11月16日～1993(平成5)年5月31日
斎院鳥山	北斎院町1224—1, 同—2, 同—3 1229—1, 同—2, 1234, 1237, 1238, 1243	1,803.41	1984(昭和59)年5月15日～同年6月4日

(註) 調査期間は、北斎院地内遺跡1次調査地と斎院鳥山遺跡調査は野外調査期を、北斎院地内遺跡2次調査地は野外・室内調査の期間を記入している。

なお、昭和59年度～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会文化教育課・松山市埋蔵文化財センターが主体となり調査を行い、平成3年10月1日以降は財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが調査主体となり、野外・室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

(梅木)



- | | | |
|-----------------|--------------------|---------------|
| 1. 斎院島山遺跡 | 2. 北斎院地内遺跡 1・2次調査地 | 3. 南江戸御日遺跡 |
| 4. 古照遺跡 | 5. 松坂古照遺跡 | 6. 辻町遺跡 |
| 7. 朝日谷2号墳 | 8. 朝美津遺跡 2次調査 | 9. 若草町遺跡 1・3次 |
| 10. 松山大学構内遺跡 3次 | 11. 船ヶ谷遺跡 | |

第1図 松山平野北西部の主要遺跡 (S = 1 : 50,000)

2. 刊行組織 〔平成6年8月1日現在〕

松山市教育委員会	教育長	池田 尚輝
生涯教育部	部長	渡辺 和彦
	次長	三好 俊彦
文化教育課	課長	松平 泰定
○松山市生涯学習振興財團	理事長	田中 誠一
	事務局長	一色 正士
埋蔵文化財センター	所長	河口 雄三
	次長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	担当	梅木 謙一 武正 良浩

3. 環境

（1）遺跡の立地

松山平野は、伊予灘と燧灘を二分するように北に突出した高縄半島の付け根部分に位置する。この半島の中央には、半島最高峰の東三方ヶ森、北三方ヶ森、伊之子山、高縄山が連なる高縄山系がある。高縄山系に源を発する河川により形成された沖積平野が松山平野である。

平野内には、数多くの遺跡が展開し、それ等は幾つかの地域にまとめられる。そのうち、平野の西北部、伊予灘に面する海岸線の北部に位置し、西に海が開ける地域は三津遺跡群と称されている。

この遺跡群と関係の深い石手川は、高縄山系に水源を発し、山麓部から平野部に出て、扇状地を形成している。そして下流域では宮前川などの小河川に分流している。三津遺跡群は、北東の岩子山、西の弁天山などで形成される低丘陵部と、宮前川の氾濫・堆積によって形成された氾濫原の低地部からなる。

（2）歴史的環境

本刊掲載の遺跡周辺には、数多くの遺跡が立地している。以下、これらの遺跡について時

代別に記述する。

縄文時代

本刊掲載の遺跡周辺では、これまで明確に縄文時代の遺跡は確認されていない。大峰ヶ台丘陵東裾部の朝美澤遺跡2次調査地からは後期の土器が数点出土し、古照遺跡では前期末～晩期の土器が「井堰」を被覆する砂疊層から出土している。ただし、遺構は未検出である。

弥生時代

弥生時代の遺跡は多数確認されている。

前期では、前述の朝美澤遺跡2次調査地から前期の土器が出土している（包含層中）。また、弁天山丘陵中央東麓の宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川別府遺跡からは前期末～中期初頭の土器や朝鮮系無文土器が出土している。

中期では、大峰ヶ台丘陵の山頂部に中葉段階の高地性集落である大峰台遺跡があり、同丘陵北東裾部の澤遺跡や東裾部の辻遺跡からも中葉の土器が出土している。

後期では、澤遺跡からは壺棺墓が検出され、同丘陵東麓の朝美町遺跡からは後期後半の土器とともに「ねずみ返し」や舟形状盆などの木製品が出土している。また、弁天山東麓緩斜面の津田鳥越遺跡からは後期後半～庄内段階終末の堅穴住居址群や土器窯などが検出され、それらの住居址からは土鍤・石鍤などの漁撈具と土器が多量に出土している。

古墳時代

古墳時代になると、低地部において集落遺跡の広がりがみられる。一方、大峰ヶ台丘陵や岩子山、弁天山など各丘陵には多数の古墳が存在している。

宮前川北斎院遺跡からは古墳時代初頭～前期の堅穴住居址群や壇堤状造構が検出されている。古照ゴウラ遺跡からは古墳時代の遺物が多量に出土し、辻町遺跡からは後期の祭祀関連遺物が出土している。大峰ヶ台丘陵東麓の緩斜面にある辻遺跡2次調査地からは掘立柱建物跡が検出されている。

古墳では、大峰ヶ台丘陵北西斜面に前期古墳の朝日谷2号墳があり、主体部内より2面の舶載鏡と30点を越える鋼鏡・鉄鏡のはか直刀・ガラス玉などが出土し、墳丘くびれ部からは壺形土器が出土している。同丘陵南西部には後期の客谷古墳群が確認されている。

古代・中世・近世

宮前川周辺には現在も条里的地割りが残っており、古代莊園制との関係が指摘されるところである。

松原古照遺跡や古照ゴウラ遺跡からは、11～13世紀にかけての生活関連遺構が検出され、多量の遺物が出土している。澤遺跡からは平安時代の掘立柱建物跡が検出され、南江戸闕門遺跡からは13世紀後半の土師器集積遺構が検出されている。



A 斎院山島遺跡 B 北齋院地内遺跡 1 次調査地 C 北齋院地内遺跡 2 次調査地 1. 伊弉諾越遺跡
 2. 前宮川別用道跡 3. 高宮前川北阪尾遺跡 4. 北齋院遺跡 5. 玉子山古墳群 6. 斋院茶臼山古墳 7. 御所町11号墳
 8. 朝雲現像山1号墳 9. 朝日草谷2号墳 10. 荒谷古墳群 11. 大峰山遺跡 12. 深瀬遺跡 13. 朝美澤遺跡 2 次調査地
 14. 朝美町遺跡 15. 追迹跡 16. 追迹跡 2 次 17. 町口遺跡 18. 大宝寺 19. 南江戸桑田遺跡 20. 南江戸門田追跡
 21. 古原跡跡跡跡調査 22. 松根古照應跡 23. 古照原ガウラ遺跡 24. 水塚古墳 25. 野津子山遺跡 26. 久万ノ台遺跡
 27. 久万ノ台遺跡

第2図 斎院周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

大峰ヶ台丘陵の南麓には大宝元年（701年）に創立された太宗寺がある。同寺の本堂は県下最古（鎌倉時代前期）の建造物として知られるところである。

朝美澤遺跡 2次調査地からは掘立柱建物跡、述遺跡 2次調査地からは土壙墓が検出されている。同丘陵東裾部の宮前川右岸に位置する南江戸桑田遺跡からは近世の桶棺墓が多数検出され、宮前川下流にある宮前川三本柳遺跡からは奈良時代の井戸や中世の烟、近世の井戸などが検出されている。
(武正)

〔参考文献〕

- 愛媛県史編さん委員会 1982 「愛媛県史—原始・古代Ⅰ—」
愛媛県教育委員会 1987 「愛媛県中世城館跡一分布調査報告一」
(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987 「松環古照遺跡及び大峰ヶ台遺跡現地説明会資料」
大瀧 雅嗣 1987 「宮前川遺跡」 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
古照遺跡調査本部・松山市教育委員会 1974 「古照遺跡」
松山市教育委員会 1977 「古照遺跡資料編」
松山市教育委員会 1980 「松山市の文化財」
松山市教育委員会 1987 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ」
松山市教育委員会 1989 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」
松山市教育委員会 松山市立埋蔵文化財センター 1991 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」
(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ」
松山市史料集編集委員会 1980 「松山市史料集第1巻—考古編—」
松山市史料集編集委員会 1987 「松山市史料集第2巻—考古編2—」
名本 二六雄 1975 「岩子山古墳」 松山市教育委員会
森 光晴・大山 正風 1976 「古照遺跡Ⅱ」 松山市教育委員会
森 光晴 1976 「御座所11号墳」 松山市教育委員会
内尾 幸則 1983 「斎院茶臼山古墳」 松山市教育委員会
上田 真 1991 「南江戸桑田遺跡」 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
梅木 謙一・宮内 健一 1992 「朝美澤遺跡・辻町遺跡」 (財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章

北斎院地内遺跡 —1次調査地—



第2章 北斎院地内遺跡—1次調査地—

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1988（昭和63）年1月、株式会社松井建設より松山市北斎院町215-2、216、217番地における宅地開発にあたって、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『29 北斎院遺物包含地』内にある。調査地の西には津田鳥越遺跡や宮前川遺跡、東には古照遺跡があり、北東には岩子山古墳や斎院茶臼山古墳などの多くの古墳を有する大峰ヶ台古墳群が所在する。

当該地は、周知の遺跡であることと、周辺地に重要な遺跡が存在することより、当該地における埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1988（昭和63）年1月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土師器、陶磁器を含む遺物包含層と遺構を検出し、当該地に古代～近世に亘る遺跡が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課と㈱松井建設二者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺跡について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古代から近世の当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、㈱松井建設の協力のもと、1988（昭和63）年8月3日開始した。

(2) 調査組織

調査地 松山市北斎院町215-2、216、217番地

遺跡名 北斎院地内遺跡 1次調査地

調査期間 野外調査 1988（昭和63）年8月3日～同年10月31日

調査面積 1,258.89m²

調査協力 株式会社 松井建設

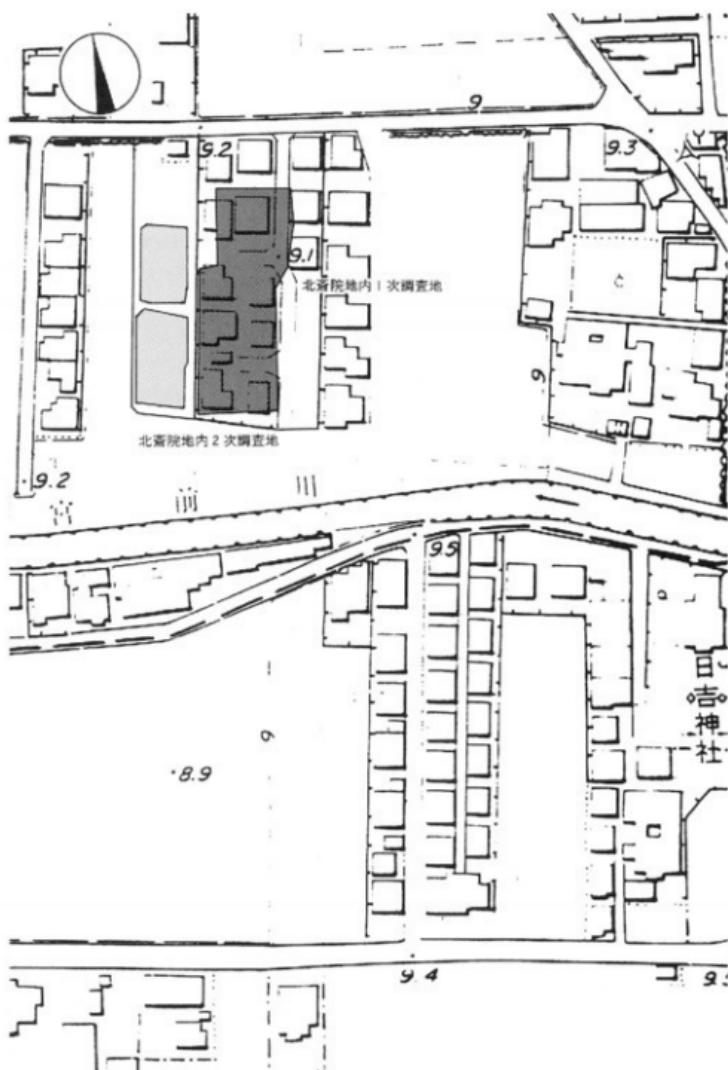
調査担当 調査員 宮崎 泰好（平成3年退職）

調査補助員 相原 浩二（現、㈱松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

河野 史知（現、㈱松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

調査作業員 武正 良浩、塙田 順也、藤田 伸治、副田 昌宏、戸田 貴久、佐藤 嘉宣、塙原 竜一、仲尾 智隆、長谷川徳明、盛山 守、小島 孝雄、松岡 明、倉貝 伸明、後藤 智博、武市 久、小野 道雄、沼田 崇宏、村田 淳、久保 浩二、中村 猛彦、笠松 誠悟、梅木 克志、平川 美徳、首藤 成吾、阿南 浩信、波多野恭久、国友 伸介、井上 純、安原 和則、羽田野修三、肌野 裕治、丹生谷道代、丹生谷康志、緑 尚美、藤井 宏枝、藤原利江子、村上みちこ、西原 圭二、酒井 直哉、後藤 公克

北齋院地内遺跡 1 次調査地



第3図 調査地位置図 (S = 1 : 1500)

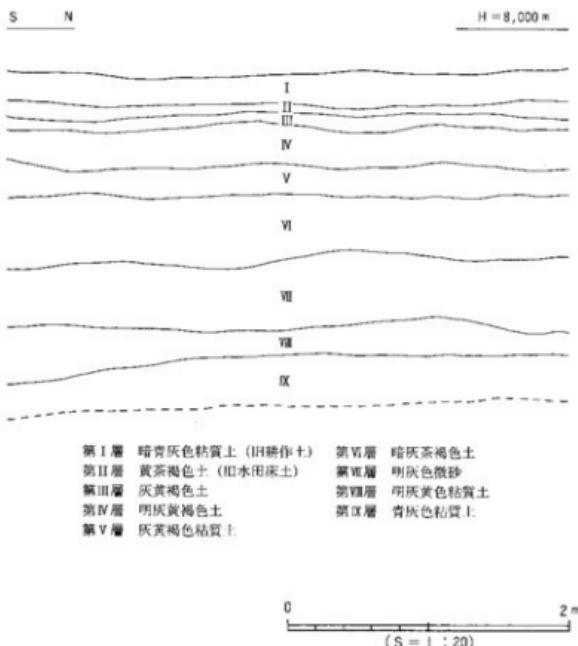
2. 層 位 (第4図)

調査地の基本層位は、第I層暗青灰色粘質土（旧耕作土）、第II層黄茶褐色土（旧水田床土）、第III層灰黃褐色土、第IV層明灰黃褐色土、第V層灰黃褐色粘質土、第VI層暗灰茶褐色土、第VII層明灰色微砂、第VIII層明灰黃色粘質土、第IX層青灰色粘質土である。

第I～IV層は、34～45cmの厚さとなる。第V～VII層は、45～60cmの厚さとなり、遺物包含層で古代～近世の遺物を含む。第VIII、IX層は無遺物層である。

検出した遺構は、掘立柱建物址1棟、溝5条、土壙24基、柱穴300基、土壙墓6基、井戸（石組み）2基である。遺構検出面は、第VI層上面及び、第VIII層上面である。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドにわけた。



第4図 調査区西壁土層図

3. 遺構と遺物

本調査地において確認した遺構は掘立柱建物址 1 塊、溝 5 条、土壙 24 基、柱穴 300 基（掘立柱建物柱穴含む）、土壙墓 6 基、井戸 2 基他である。

(1) 掘立柱建物址

本調査において確認した掘立柱建物址は 1 塊である。

1号掘立柱建物址（第 5・6 図、図版 1）

調査地中央部 H 6 ~ J 7 区に位置する。5 × 2 m の建物址である。桁行長 10.2 m、梁行長 5.2 m を測る南北棟で、ほぼ南北方向に主軸をとる。各柱穴は円形～楕円形を呈し、径 30 ~ 112 cm、深さ 17 ~ 47 cm を測る。出土遺物はなく、遺構埋土は暗灰茶褐色土である。

時期：遺構埋土や他の遺構との関係より 15~16 世紀と考える。

(2) 溝

本調査において確認された溝状遺構は 5 条である（第 5 図、図版 3）。

S D 1 （第 5・9 図、図版 3）

調査区南端を東西に流れる溝である。出土遺物は、第 9 図 1 ~ 5 である。1 ~ 3 は土師質の皿である。ともに底面は回転糸切り痕が看取される。4 は土師質の土蓋である。口縁端部に断面三角形状の隆帯が貼付される。5 は青磁碗である。高台は削り出しによる。内面見込みに割花模様がみられる。

時期：出土遺物より、15~16 世紀と考える。

S D 2 （第 5・9 図、図版 3）

調査区南端を東西に流れる溝である。出土遺物は、第 9 図 6 ~ 8 である。6・7 は土師質の皿、8 は杯である。6・7 は口縁端部を丸くおさめ、底面は回転糸切りである。8 は回転ヘラ切りである。

時期：出土遺物より、15~16 世紀と考える。

各溝に関する詳細は表 3 に記す。

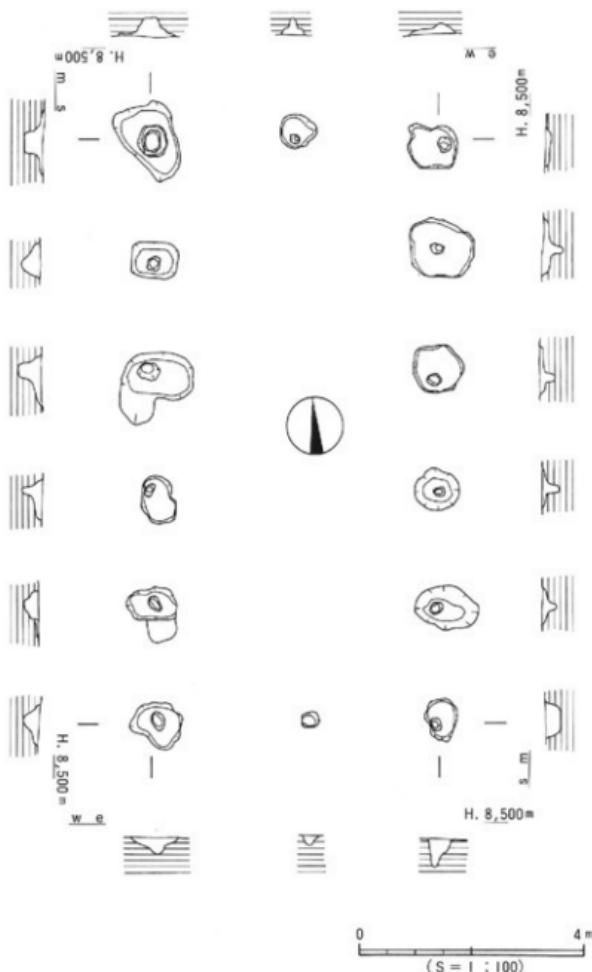
(3) 土壙（第 5 図）

本調査において確認された土壙は 24 基（土壙墓 6 基を除く）である。検出された土壙は、出土遺物が少ないとおり、言及できるものは数基である。



第5図 遺構配図

0 10m
(S = 1:250)



第6図 1号据立柱建物址測量図

S K I (第7・9図、図版6)

調査地L 4区に位置する。平面形態は隅丸長方形状を呈し、規模は長軸194cm、短軸123cm、深さ20.5cmを測る。出土遺物は、第9図11・12である。11は瓦質の羽釜の口縁部片である。直立する口縁の先端は丸く仕上げられる。ヨコナデによりわずかに短く外反する。12は三足付土釜の脚部である。接合部及び端部は破損のため不明である。

時期：出土遺物より、15～16世紀の遺構と思われる。

S K 3I (第7・9図)

調査地I 8区に位置する。平面形態は隅丸長方形状を呈し、規模は長軸140cm、短軸83cm、深さ18.3cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。出土遺物は、第9図9である。9は土師質の土釜である。口縁端部に貼付するやや下がり気味の断面三角形状の隆帯である。

時期：出土遺物より、15～16世紀の遺構と思われる。

S K 33 (第8・9図)

調査地G 8区に位置する。平面形態は不整橢円状を呈し、長軸131cm、短軸91cm、深さ20.6cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。出土遺物は、第9図10である。10は土師質の土釜の口縁部片である。口縁端部に断面三角形状の隆帯が付く。

時期：出土遺物より、15～16世紀の遺構と思われる。

(4) 柱穴

柱穴は300基を検出する。柱穴からの遺物の出土は少ないが、S P13、S P97、S P251、S P290出土の遺物は団化が可能であった（第10図、図版7）。柱穴は出土遺物、埋土、形態等より15～16世紀と考えられるものである。

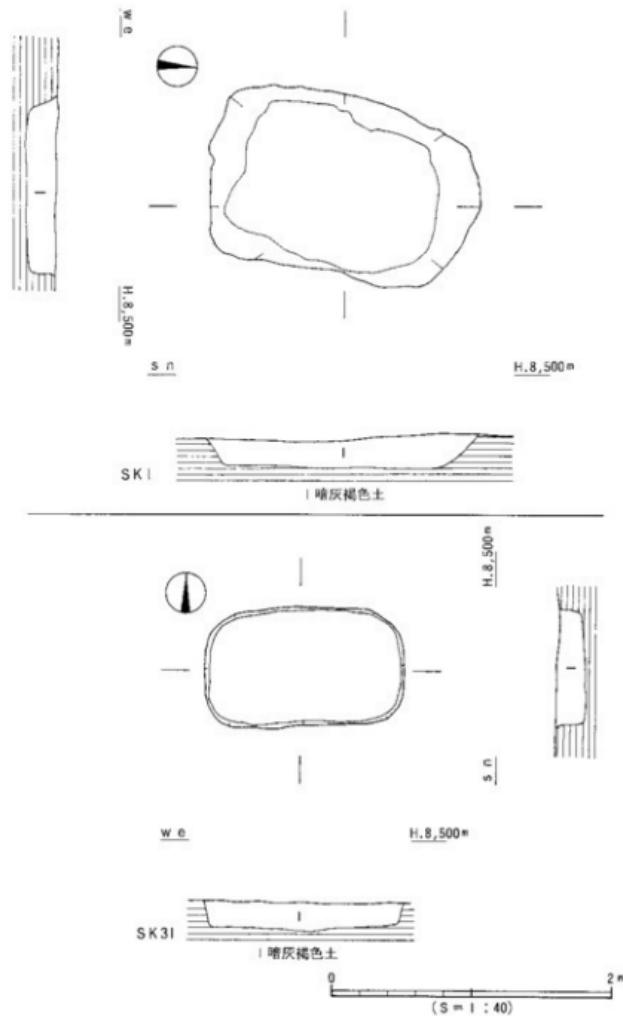
S P13出土品 19は備前焼の檻鉢である。内面にタテ方向の条線11本が看取される。

S P97出土品 14は土師質の羽釜である。口縁部は直線的にやや内傾する。肩部には穿孔がみられる。底部付近は、幾度かの二次焼成を受けたものと思われ、器壁はもろくなっている。煤の付着が強い。

S P251出土品 15、17は土師質の杯で、15は口縁部が欠損している。17は口縁端部が丸く仕上げられ、強いヨコナデにより端部がやや内傾する。16は小型壺の口縁部である。

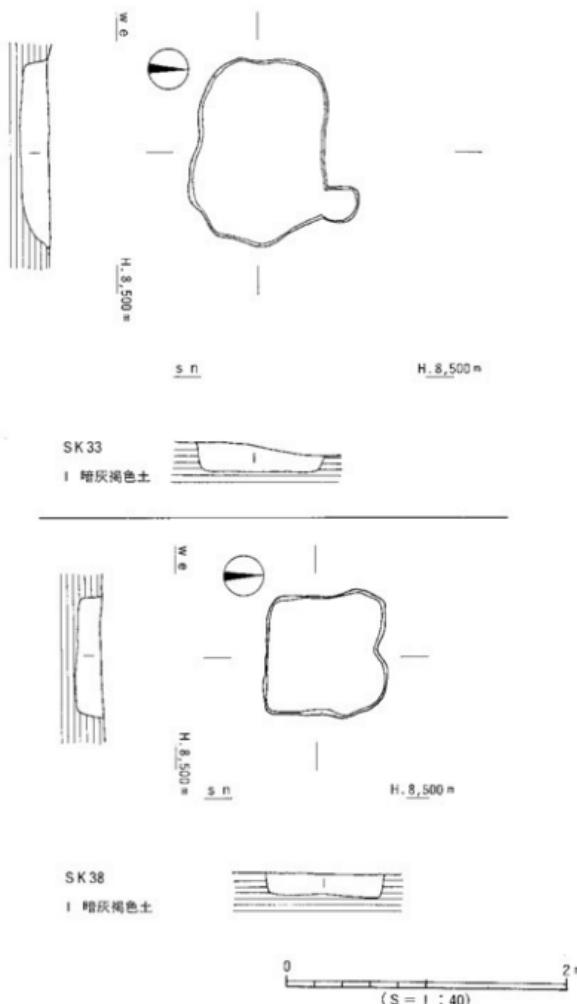
S P290出土品 18は土師質の皿である。底部は回転糸切り痕が看取される。

遺構と遺物



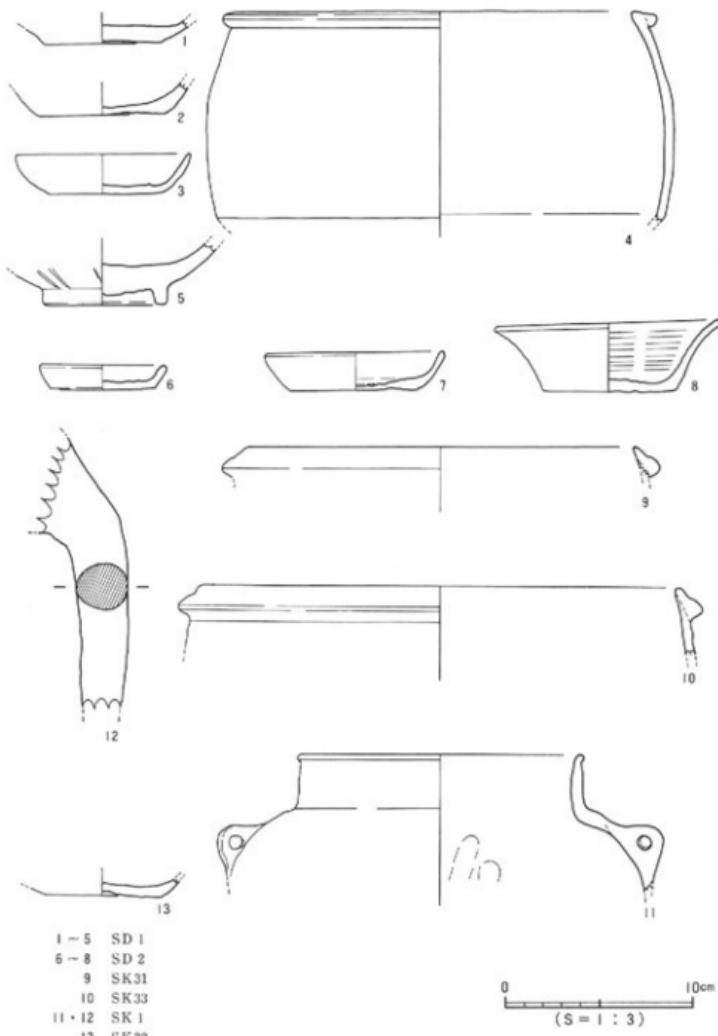
第7図 SK I・SK3I測量図

北京院地内遺跡1次調査地

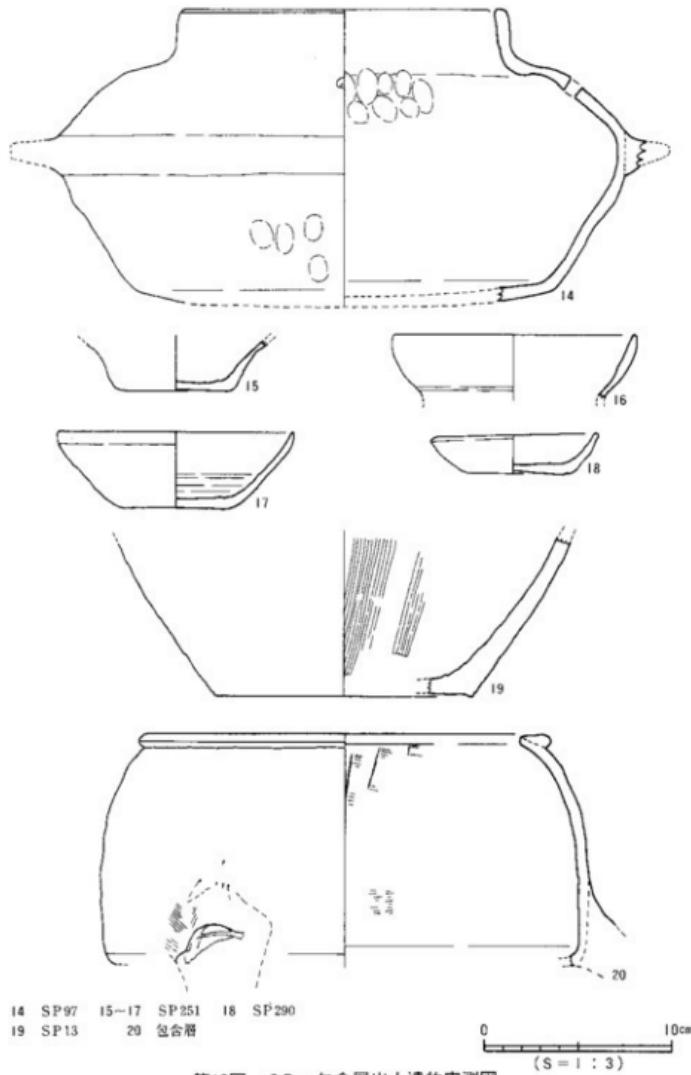


第8図 SK33・SK38測量図

遺構と遺物



第9図 SD・SK出土遺物実測図



第10図 SP・包含層出土遺物実測図

(5) 墓

本調査地において土塼墓ないし木棺墓が計6基検出された。以下、主要なものについて記す。1~3号墓は15~16世紀、4~6号墓は時期比定が困難なものである。

1号墓（土壤墓）（第12図、図版4） 調査区C 7~8区で検出した。長軸1.22m、短軸0.68m、深さ0.14mを測り、平面形は隅丸長方形を測る。人骨が1体出土したが、土圧によりかなり扁平化していた。西向き北枕で屈葬されたいた。

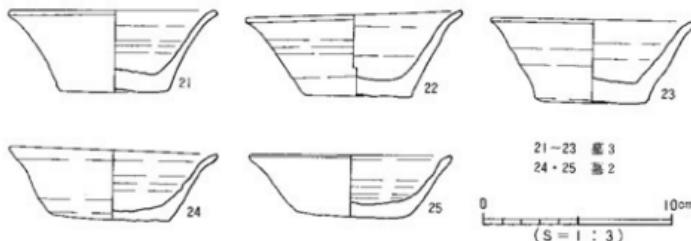
2号墓（木棺墓）（第11・12図、図版7） 調査区B 8区で検出した。長軸1.22m、短軸0.84m、深さ0.11mを測り、平面形は隅丸長方形を測る。人骨が1体出土した。西向き北枕で屈葬されていた。出土遺物は、第11図24・25である。24・25は2号墓からの一括資料である。口縁端部がヨコナデにより面をもつ。いずれも底面はへラ切りである。

3号墓（木棺墓）（第11図、図版3・4・7） 調査区B 5区で検出した。長軸0.79m、短軸0.43m、深さ0.03mを測り、平面形は長方形を測る。人骨が1体出土した。出土遺物は第11図21~23である。21~23は3号墓からの一括資料である。口縁端部を先綴り外反させながら、丸く仕上げる。

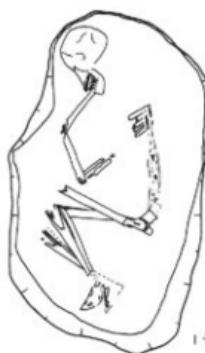
4号墓（土壤墓） 調査区D 10区で検出した。長軸0.75m、短軸0.65mを測る。上部が削平を受けており、ほとんど深さがなく、土圧によりかなり扁平化した人骨が1体出土したに限られる。

5号墓（土壤墓？） 調査区C 8区で検出した。検出範囲は長軸0.62m、短軸0.3mであった。人骨が出土している。

6号墓（土壤墓？） 調査区D 8区で検出した。検出範囲は長軸0.6m、短軸0.25mであった。上部の削平を受けており、掘り方は確認できなかった。人骨が出土している。



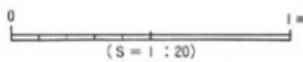
第11図 木棺墓内出土遺物実測図



1号土塚墓



2号土塚墓



第12図 1号・2号墓測量図

(6) 井戸

本調査地で確認された井戸は2基である。調査の工程上、1基に限り調査を行った。

SII (第13図、図版5)

調査区J5区にて検出された石組円形井戸である。20~40cm大の石を上下部ともに円形に小口積みしたものである。井戸側内からは土師質土器の細片が出土している。時期は、特定できない。

各井戸の詳細は表6に記す。

(7) 包含層出土遺物 (第14・15図、図版8)

包含層である第V~VII層からは古代~近世にいたる遺物が出土した。

第V層出土遺物 (26~31)

土師質土器類：26は土師器椀の底部である。底部回転ヘラ切りで円盤状高台のものである。27~31は土師質の杯である。27~30は、口縁端部を丸くおさめ、やや内反する。31の口縁端部はやや先細りする。

第VI層出土遺物 (32~49)

土師質土器類：32~37・39~41は土師質の杯である。32~37は器高が低く、口縁部がゆるやかに外反する。39~41は、口縁端部を丸くおさめ、やや内反する。38・42は土師質の皿である。口縁部がやや内反する。43・44は土師質の杯である。43の底面はやや上げ底を呈し、内面には強い回転ナデ調整が施される。

46は土師質の土釜である。口縁端部に断面方形状の隆帯が貼付される。水平に広がる底面より胴部がやや外方向に延び内窪する。脚部が下方に向かって延びる。

土製品：45は土製の土鍤である。焼成前の孔が穿たれる。約1/2の残存である。

貿易陶磁器：47~49は青磁碗である。47は口縁部で、内外面に緑灰色の釉がかかっており、外面に蓮弁文が描かれている。48は底部である。直立する削り出しの高台をもつ。

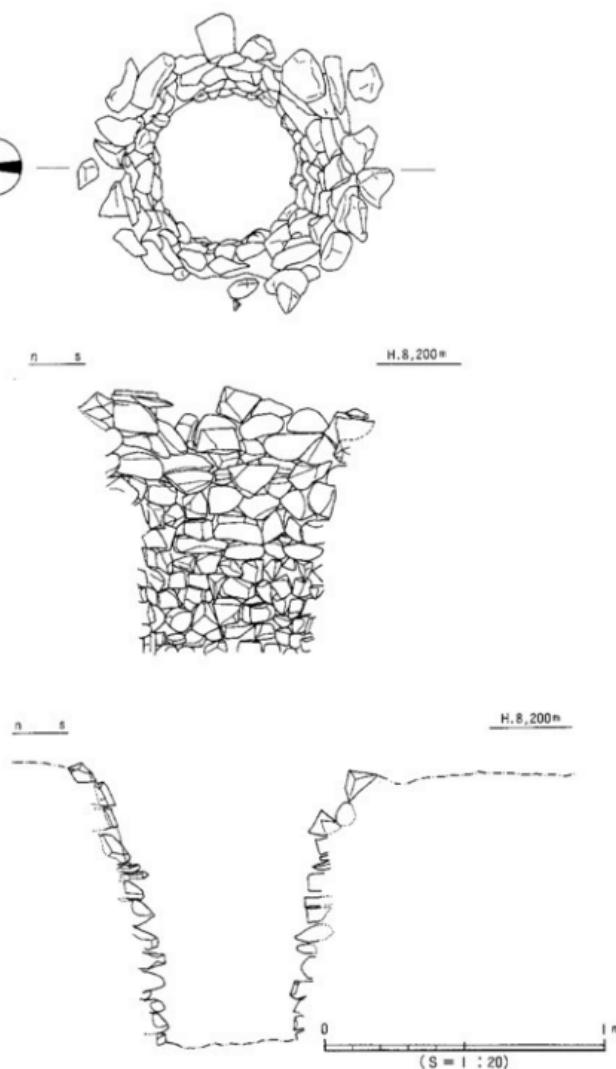
高台の内面は施釉されていない。49は底部である。高台は内外面を斜行するように短く削り出している。高台の内面と底部は施釉されない。外面にヘラ状工具によるタテ方向の沈線が看取できる。

第VII層出土遺物 (50~52)

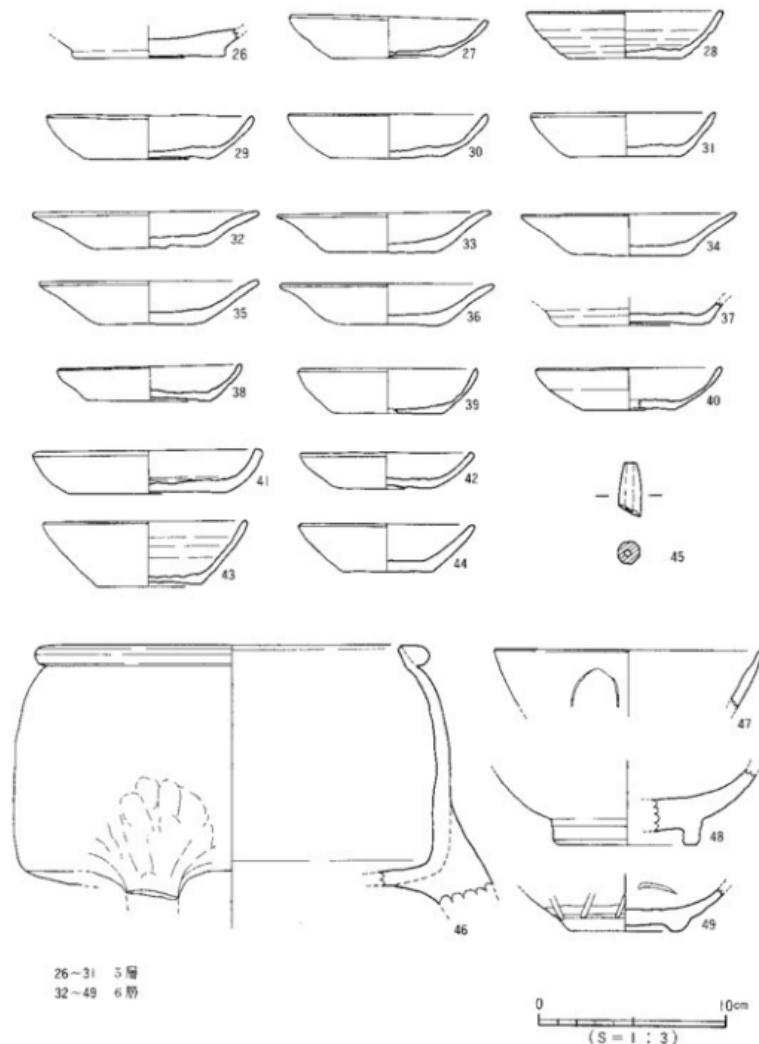
土師質土器：50・51は土師質の皿である。51は口縁端部を丸くおさめ、やや内反する。

52は土師質の土釜である。口縁端部に断面方形状の隆帯が貼付される。

北童院地内遺跡 1 次調査地

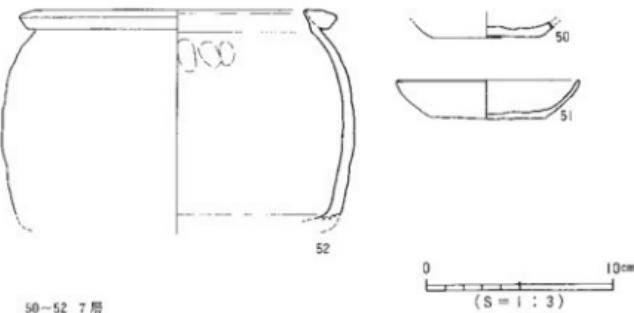


第13図 1号井戸測量図



26~31 5層
32~49 6層

第14 包含層出土遺物実測図(1)



第7図 包含層出土遺物実測図(2)

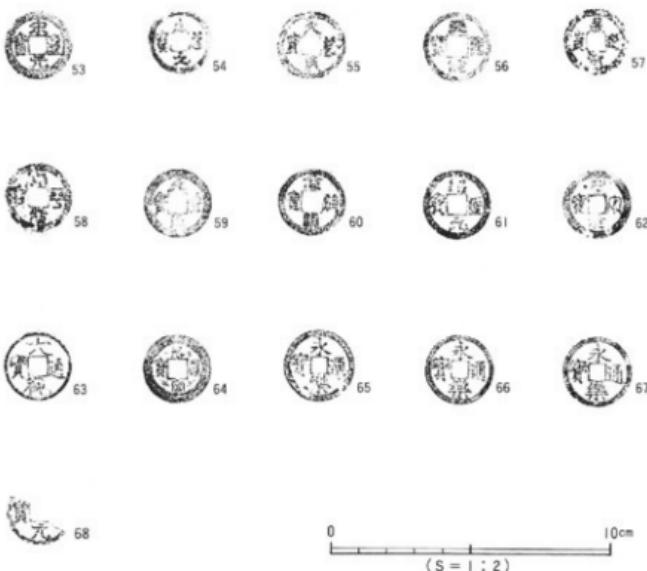
4. 小 結

今回の北斎院地内遺跡1次調査では、中近世の掘立柱建物、溝、土壙、墓、井戸など集落関連の遺構を検出した。

発掘調査時の悪天候や調査期間が農繁期と重なるなど、調査条件に恵まれず、加えて調査整理の不手際もあり、各遺構の時期決定や遺物の出土状況の把握などに課題が多く生じた。しかし、明確な時期の特定はできないにしても、15~16世紀にかけての遺跡であるということは明らかとなった。

松山平野における中近世遺跡としては樽味遺跡2次調査（田崎 博之 1993）、古照遺跡6次調査（栗田 正芳 1992）などがあげられる。樽味遺跡2次調査地は、松山平野を流れる重信川の支流である石手川がつくる扇状地の扇弁に立地し、14~16世紀の集落関連遺構が検出されている。一方、古照遺跡6次調査地は、松山平野を流れる宮前川によって形成された沖積地に立地し、生産遺構が検出されている。北斎院地内遺跡1次調査地は低地及び同じ流域（宮前川）にあるということから、古照遺跡群と深いかかわりがあると思われる。宮前川河口付近には三本柳遺跡（古代~中世の集落址）があり、よって宮前川は平野北西部の集落経営に大きな役割をなしていたことが分かる。

検出された遺構より集落構造について考えると、北斎院地内遺跡1次調査地は、狭い範囲（1,258m²）にもかかわらず、掘立柱建物、土壙、溝、墓、井戸など生活関連遺構が多数検出されている。現在松山平野においては15~16世紀の生活関連遺構についての類例は稀少であるため、検出の意義は大きいと考える。遺構内出土の遺物を見る限りでは、各遺構の時期差



第16図 出土古銭拓影

はさほど大きいものでないと思われる（15～16世紀であろう）。また、検出した比較的規模の大きい掘立柱建物と土壙墓は15～16世紀の集落構造（生活域と墓域）を考える上で非常に興味深い資料であると考えている。なお、集落構造については、第6章にて詳しく述べる。

【文 献】

田崎 博之 1993 「樽味遺跡II」 愛媛大学埋蔵文化財調査室

栗田 正芳 1992 「古照遺跡—第6次調査—」 松山市教育委員会・熱松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

北斎院地内遺跡 1 次調査地

●表2 挖立柱建物址一覧

掘立	規 模 (間)	方 位	桁 行		梁 行		床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	5×2	南北	1020(34)	7.4×6.0+7.0+6.2+6.9	520(17)	8.5+8.5	33.0m ²		

●表3 清一覧

清 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	D-E 5~10	舟形	20.50×1.90×0.32	暗灰褐色土 (砂粒を含む)	土師質土器 備前焼、陶罐器	15~16世紀	
2	C-D 5~10	舟形	20.32×1.20×0.56	暗灰茶褐色土	土師質土器 備前焼、陶罐器	15~16世紀	
7	N 4		1.32×0.28×0.018				
21	T 9		1.62×0.20×0.067				
22	G-H 9~10		14.35×0.90×0.122				

●表4 土壙一覧

(1)

土 壕 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	L 4	開丸長方形	逆 台 形	1.94×1.23×0.205		瓦質土器片(同質) 土師質土器(J.型)		
2	N 5	不整 極 四	逆 台 形	1.41×0.685×0.319				
3	J 7	長 方 四		2.61×0.74×0.062				
4	I 6	開丸長方形	直 状	2.08×0.69×0.071	粘土質茶褐色土			
6	I 5	極 四		1.28×0.98×0.198				
7	I 4	開丸長方形	逆 台 形 (側に削られた)					
8	J 4	開丸長方形	直 状	3.24×0.78×0.194	暗灰褐色砂質土			
9	H-I 7	不整 極 四	直 形	1.8×0.75×0.31	暗灰茶褐色土			
10	H 5	開丸長方形	逆 台 形	2.15×0.63×0.189	暗灰茶褐色土			
11	I 5	開丸長方形	逆 台 形	3.05×1.53×0.15	暗灰茶褐色土			
12	G 6	開丸長方形	逆 台 形	1.05×1.25×0.25	粘土質茶褐色土			
14	J 5	開丸長方形	逆 台 形	×1.16×0.16	粘土質茶褐色土			

造構一覧

土壤一覧

(2)

土 壤 (S K)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
30	J 9	正 方 形	逆 台 形	0.61×— ×0.177				
31	I 8	隅丸長方形	舟 形	1.40×0.83×0.183	暗灰褐色土	土師質土器片(土釜)		
32	B 8	隅丸長方形	皿 状	1.80×0.925×0.055	暗灰褐色土			
33	G 8	不整様円	長 方 形	1.31×0.91×0.206	暗灰褐色土	土師質土器片(土釜)		
34	G 8	長 方 形	長 方 形	1.175×0.78×0.194	暗灰褐色土			
35	F 8	椭 圆	舟 形	1.591×0.302×0.248	暗灰茶褐色土			
36	F 9	椭 圆	舟 形	0.98×0.66×0.145	暗灰茶褐色土			
37	B 10	椭 圆	皿 状	0.82×0.73×0.12	暗灰褐色土			
38	B 10	不整様円	逆 台 形	0.83×0.79×0.206	暗灰褐色土			
39	B 10	隅丸長方形	不 明	0.94×0.35×0.107				
40	E 8・9	隅丸長方形	皿 状	2.29×2.0×0.2	暗灰茶褐色土			
41	B 9	椭 圆	逆 台 形	1.40×1.064×0.252	暗灰褐色土			

●表5 墓一覧

墓	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	C 8・7	隅丸長方形		1.22×0.68×0.15				土唐草
2	B 8	隅丸長方形		1.22×0.84×0.11		「土師質土器(6) 2点	15~16世紀	木棺蓋1号
3	B 5	長 方 形		0.79×0.43×0.03		「土師質土器(6) 3点	15~16世紀	木棺蓋2号
4	D 10	長 方 形		0.75×0.55×—		「土師質土器(6) 1点	15~16世紀	6号人骨
5	C 8			0.62×0.3×—				人骨のみ
6	D 8			0.6×0.25×—				人骨のみ3a.3

●表6 井戸一覧

井 戸 (S I)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	J 5	円 形		0.95×0.85×1.03		土師質土器破片		石組み
2	I 9	円 形		2.19×2.03×0.347				

遺物観察表一凡例一（武正良浩）

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4) 多→「1～4 mmの大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表7 SD出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色模 (内面)	胎 土 焼 成	備考	回版
				外 面	内 面				
1	土師 皿	直径(6.2) 残高 1.2	底面……回転系切り。	マメツ	回転ナテ	茶褐色 茶褐色	長・石 ◎	SD1	
2	土師 皿	直径(6.5) 残高 1.6	底面……回転系切り。	回転ナテ	マメツ	乳白色 茶褐色	密 ◎	SD1	
3	土師 皿	口径 9.4 底径 5.9 高さ 2.1	底面……回転系切り。	回転ナテ	回転ナテ	茶褐色 茶褐色	密 ◎	SD1	6
4	土師 上巻	口径(20.3) 残高 11.2	口縁部の断面一角形状の 窓。	ナテ	ヨコハケ	茶褐色 茶褐色	長・石 ◎	SD1	
5	青磁 瓶	口径 6.9 残高 3.2	高青白。			青緑色 青緑色	水 ◎	SD1	6
6	土師 皿	口径 6.6 高さ 1.4 底径 5.6	底面……回転系切り瓶。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳白色 乳白色	石・長 ◎	SD2	5
7	土師 皿	口径 9.4 高さ 2.0 底径 6.8	底面……回転系切り瓶。	回転ナテ	回転ナテ	灰青色 灰黄色	石・火 ◎	SD2	6
8	土師 杯	口径 11.8 高さ 3.8 底径 7.1	底面……回転ヘラ切り。	回転ナテ	回転ナテ	灰黄色 灰黄色	密 ◎	SD2	6

出土遺物観察表

●表8 SK出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	土師 上巻	口径(20.4) 残高 1.6	口縁端部に貼付する断面二角形状の陶器。	ナゲ	ナゲ	黄褐色 黄褐色	石・灰 ◎	SK31	
10	土師 土釜	口径(25.2) 残高 3.3	口縁端部に断面三角形状の陶器。	ナゲ	ナゲ	黄褐色 黄褐色	石・灰 ◎	SK33	
11	瓦質 羽釜	口径(15.2) 残高 7.2	直立する口縁部。	ナゲ	ナゲ	乳白色 乳白色	石・灰 ◎	SK1	6
12	土師 上巻脚	残長 13.9		ナゲ	ナゲ	黄褐色 黄褐色	石・灰 ○	SK1	6
13	土師 皿	残高 0.9 底径(6.0)	底面……同軸系切り板。	ナゲ	ナゲ	乳白色 乳白色	灰 ◎	SK58	

●表9 SP出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	土師 上巻	口径(18.0) 底径(22.0) 残高 15.5	口縁部、やや内傾。	マメツ	マメツ	淡灰青 黄褐色	石・灰 ○	SP97	7
15	土師 杯	底径 6.0 残高 2.7	底面……同軸系切り板。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	赤褐色 乳白色	石・灰 ◎	SP251	7
16	土師 小皿	口径(12.8) 残高 3.3	小型の口縁部。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	乳黄色 赤褐色	石・灰 ◎	SP251	
17	土師 杯	口径 12.4 基高 4.0 底径 5.4	底面……同軸系切り板。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	乳褐色 乳白色	灰 ◎	SP251	7
18	土師 皿	口径 8.6 基高 2.3 底径 5.0	底面……同軸系切り板。	ナゲ	ナゲ	乳白色 乳白色	灰 ◎	SP290	7
19	簡易 檜桶	底径(15.8) 残高 8.4	ナゲ方向の11本の条線。	同軸ナゲ	ナゲ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・灰 ◎	SP13 SP29	
20	土師 土釜	口径(18.3) 残高 12.1	口縁端部に断面三角形状の陶器。	ナゲ	ナゲ	黄褐色 黄褐色	石・灰 ◎	C 8	

北齋院地内遺跡 1次調査地

●表10 墓出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	土師 杯	口径 11.1 基高 4.4 底径 6.0	底面……静止へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長・金 ◎	基 3	7
22	土師 杯	口径 11.4 基高 4.6 底径 5.7	底面……内輪へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		黄茶色 黄茶色	石・長 ◎	基 3	7
23	土師 杯	口径 10.9 基高 4.5 底径 6.0	底面……静止へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長 ◎	基 3	7
24	土師 杯	口径 11.1 基高 3.9 底径 6.2	底面……静止へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長 ◎	基 2	7
25	土師 杯	口径 10.8 基高 3.3 底径 5.8	底面……静止へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長 ◎	基 2	7

●表11 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
26	土師 杯	底径(8.2) 残高 1.4	底面……内輪系切り底。 ナテ	ナテ		乳白色 乳白色	石 ○	V層 F 7	
27	土師 杯	口径 10.6 基高 2.4 底径 5.8	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳灰白色 乳灰色	石・長 ◎	V層 M 4	8
28	土師 杯	口径(10.4) 基高 2.8 底径 5.8	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		褐色 乳白色	石・長 ◎	V層 J 5	
29	土師 杯	口径 10.8 基高 2.3 底径 6.7	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳白色 乳白色	石・長 ◎	V層 I 6	
30	土師 杯	口径 10.7 基高 2.3 底径 6.0	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳灰白色 乳灰白色	石・長・金 ◎	V層 I 6	
31	土師 杯	口径 9.8 基高 2.2 底径 5.9	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳白色 乳白色	石・長 ◎	V層 I 6	8
32	土師 杯	口径 11.9 基高 2.1 底径 6.0	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長 ◎	V層 D 7	
33	土師 杯	口径 11.4 基高 2.2 底径 6.4	底面……へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		灰黄色 灰黄色	石・長・金 ◎	V層 C 7	8
34	土師 杯	口径 11.3 基高 2.2 底径 6.0	底面……へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳白色 乳白色	石・長 ◎	V層 C 7	8
35	土師 杯	口径 11.7 基高 2.2 底径 5.0	底面……へラ切り。 内輪ナテ	内輪ナテ		乳白色 乳白色	石・長 ◎	V層 C 7	8

出土遺物観察表

(2)

包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外因) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
36	土師 杯	口径 11.5 高さ 2.2 底径 5.5	底面……へき切り底。 内面ナテ	内面ナテ	灰青色 灰黄色	石・長 ◎	V1層 D 7		
37	土師 杯	口径 7.6 高さ 1.2	底面……内輪系切り底。 ナテ	内輪ナテ	乳黄色 乳白色	密 ◎	V1層 L 4		
38	土師 盆	口径 9.9 高さ 2.0 底径 6.5	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	乳黄色 乳黄色	石・長 ◎	V1層 C 6		
39	土師 杯	口径(9.6) 高さ 2.4 底径(3.7)	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	乳白色 乳黄色	密 ◎	V1層 L 4		
40	土師 杯	口径 10.0 高さ 2.2 底径 5.0	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	灰青色 灰黄色	密 ◎	V1層 J 6		
41	土師 杯	口径(12.2) 高さ 2.2 底径(8.2)	底面……内輪系切り底。 ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄色 乳黄色	石・長 ◎	V1層 L 4		
42	土師 盆	口径 9.1 高さ 1.9 底径 4.9	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	乳白色 乳黄色	密 ◎	V1層 B 8		
43	土師 杯	口径 10.9 高さ 5.0 底径 5.6	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	灰青色 灰黄色	石・長・金 ◎	V1層 N 7		
44	土師 杯	口径(9.4) 高さ 2.5 底径(4.8)	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	灰青色 灰黄色	密 ◎	V1層 C 7		
45	土師 盆	高さ 2.7	4mmの焼成痕穿孔。			淡灰黃	石・長 ◎	V1層 I 4	
46	土師 杯	口径(17.8) 高さ 13.6	山積層部に断面方形状の焼 痕。	ナテ	ナテ	灰青色 灰黄色	石・長 ◎	V1層	
47	陶磁器 棺	口径(14.2) 高さ 3.1	縦付文らしき文様。			淡緑色 淡綠色	密 ◎	V1層 F 9	
48	陶磁器 棺	底径(7.8) 高さ 4.0	高台付。	施釉	施釉	淡青緑 淡青緑	密 ◎	V1層 F 6	
49	陶磁器 棺	底径(5.8) 高さ 2.5	高台付。	施釉	施釉	淡灰色 淡灰色	密 ◎	V1層 L 6	
50	土師 盆	底径 5.7 高さ 0.9	底面……内輪系切り底。 ナテ	内輪ナテ	乳茶色 乳黄色	石・長 ◎	V1層 C 8		
51	土師 盆	口径 9.9 高さ 2.1 底径 6.1	底面……内輪系切り底。 内輪ナテ	内輪ナテ	淡黄灰 淡灰灰	密 ◎	V1層 E 7		
52	土師 1型	口径(13.4) 高さ 10.1	山積層部に断面方形状の焼 痕。	ヨコナテ	ナテ	黃褐色 黃褐色	石・長・金 ◎	V1層 D 9	

●表12 出土遺物観察表 貨錢

番号	銘 貨名	枚 数	初 摺 年	王 朝	銘 僧 (mm)		重 目 (g)	備 考
					外 径	内 径		
53	宋通元寶	1	968	北宋	24.6	5.3	5.805	楷誌、行書体 2 枚
54	至道元寶	1	995	北宋	22.9	6.3	1.602	楷誌、行書体
55	天禧通寶	1	1018	北宋	24.3	6.1	3.026	楷誌、行書体
56	天聖元寶	1	1033	北宋	24.4	6.8	3.905	楷誌、篆書体
57	皇宋通寶	1	1059	北宋	23.4	6.2	2.489	楷誌、行書体
58	治平元寶	1	1064	北宋	24.3	6.5	2.784	楷誌、行書体
59	元豐通寶	1	1078	北宋	24.7	6.6	3.418	楷誌、行書体
60	元祐元寶	1	1093	北宋	24.2	7.1	2.645	楷誌、行書体
61	绍聖元寶	1	1094	北宋	24.5	6.5	2.907	楷誌、行書体
62	聖宋元寶	1	1101	北宋	24.8	6.0	2.710	楷誌、篆書体
63	大觀通寶	1	1107	北宋	24.5	6.3	2.543	楷誌、行書体
64	崇寧元寶	1	1108	北宋	24.6	6.2	3.002	楷誌、行書体
65	永樂通寶	1	1408	明	24.7	5.3	3.170	楷誌、行書体
66	永樂通寶	1	1408	明	24.9	5.3	3.929	楷誌、行書体
67	永樂通寶	1	1408	明	25.3	5.6	4.923	楷誌、行書体
68	○元○宝	1					1.054	真書体

第3章

北斎院地内遺跡 —2次調査地—



第3章 北斎院地内遺跡—2次調査地—

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1991（平成3）年10月21日、宮崎 順氏より松山市北斎院町219—1地内における宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の「29 北斎院遺物包含地」内にあたる。当地がある北斎院町内ではこれまでにも発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。今までに同包蔵地内では北斎院地内遺跡1次調査（昭和63年8月3日～同10月31日、当地の東隣接地）などの発掘調査が行われており、中世から近世にかけての集落が存在していたことが明らかになりつつある。

これらのことから、文化教育課は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1991（平成3）年12月2～4日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺物包含層（中・近世の土器、陶磁器）と遺構を検出し、当該地に中世から近世に至る遺跡が存在することが明らかになった。この結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は中世～近世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、徳松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり申請者の協力を得て1992（平成4）年11月16日に開始した。なお、平成4年6月4日に申請者より開発面積拡張の申し入れがあり、153m²の追加があったことを追記しておく。

(2) 調査組織

調査地 松山市北斎院町219—1及び221—1の一部

遺跡名 北斎院地内遺跡2次調査地

調査期間 野外調査 1992（平成4）年11月16日～1993（平成5）年2月8日

室内調査 1993（平成5）年2月9日～同年5月31日

調査面積 1,149m²

調査委託 宮崎 順、一色 市郎

調査協力 （株）ワンカラー不動産

調査担当 梅木 謙一、武正 良浩

調査作業員 西原 聖二、中島 宏、石田真佐夫、小笠原聖二、黒田 正機、林 亨

山口 裕二、神 直哉、大久保美昭、岡田 久子、岡田 弥生、乗松 和枝

常廣 一恵、白形 安子、藤田 潤子、横田三都子

(3) 経過

調査地はJR松山駅の西、約2kmに位置する。大峰ヶ台丘陵の南を流れる宮前川流域にあり、宮前川の氾濫により形成された砂層上、標高9mに立地する。調査以前は耕地整備された田畠であった。調査は排土置き場確保の必要から、調査地を南・北の2地区に分け実施した。以下、調査工程を略記する。

1992(平成4)年11月16日 重機による表土の剥ぎ取り作業を開始した。作業は、試掘報告と深掘りにより土層を確認した後、地表下40~70cm程度までの剥ぎ取りを行った。掘削作業に3日間を費やした。その後、調査地内に調査事務所を設置し、作業用具等を搬入した。

11月26日 作業員を増員し本格的な発掘調査を開始する。

12月2日 遺物包含層の掘り下げと遺構・遺物の検出を行う。

12月15日 第VI層上面にて遺構検出を行い溝状遺構や柱穴等、数多くの遺構を検出する。

12月17日 柱穴及び溝状遺構の掘り下げと測量を中心に行う。

1993(平成5)年1月9日 南区の調査が完了する。

1月13日 重機による南区の埋め戻し及び北区の表土剥ぎ取り作業を開始した。

1月21日 包含層の掘り下げをし、遺構・遺物の検出を行う。

1月25日 第VI層上面にて遺構検出を行い、土壌状遺構や柱穴等、数多くの遺構を検出。

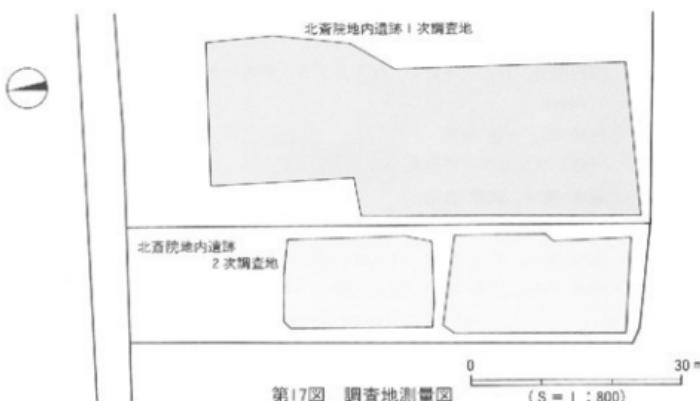
1月26日 遺構の掘り下げを開始し、同時に遺物の検出も行う。

2月3日 遺構の測量がすべて完了する。

2月8日 出土遺物・調査用具等を撤去する(野外調査終了)。

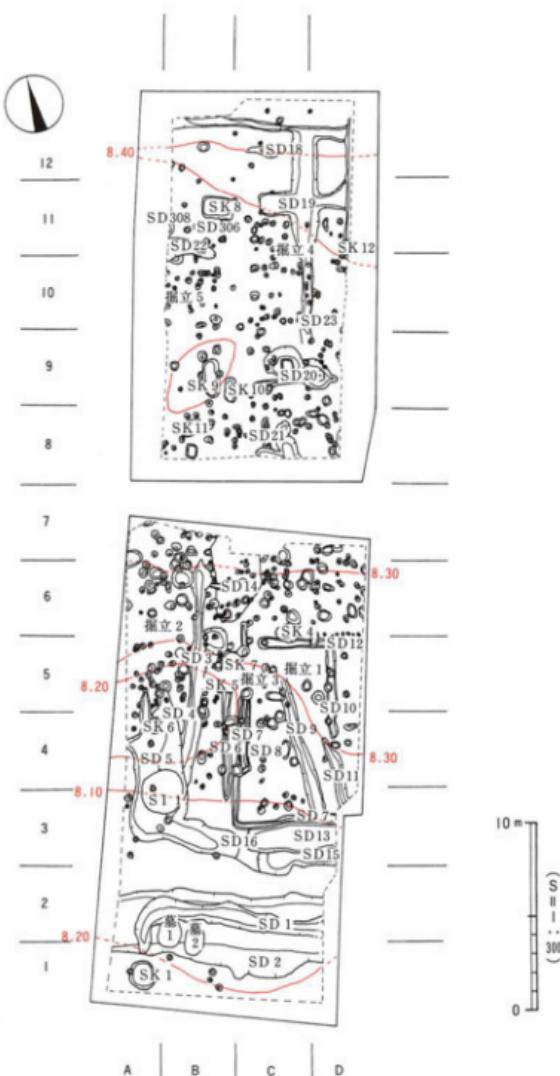
2月9日 松山市立埋蔵文化財センターにて出土物と測量図の整理作業を行う。

5月31日 室内調査を終了する。



第17図 調査地測量図

経 過



第18図 遺構配置図

2. 層位 (第19図、図版10)

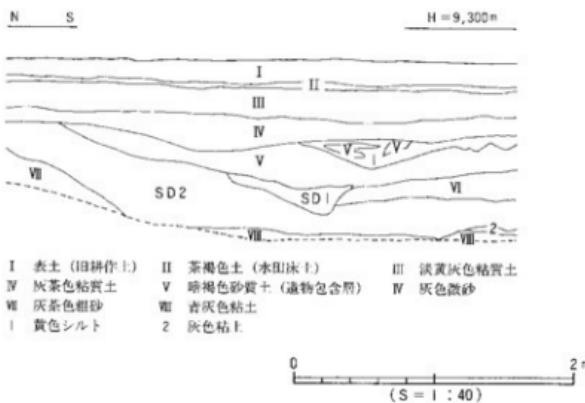
本調査地の基本層位は第I層表土(旧耕作土)、第II層茶褐色土(水田床土)、第III層淡黄灰色粘質土、第IV層灰茶色粘質土、第V層暗褐色砂質土、第VI層灰色微砂、第VII層灰茶色粗砂、第VIII層青灰色粘土で第19図に示すとおりである。

第I層及び第II層は水田耕作に伴う耕作土で、地表下24~40cmまで開発が行われている。第III層及び第IV層は調査区ほぼ全域で見られ、北東から南西に向けて緩傾斜の堆積をなし、北東部で厚さ24cm、南西部で厚さ46cmを測る。第V層は遺物包含層である。調査区のほぼ全域で見られ、厚さ6~30cmの堆積で縄文土器(1点)・土師器・須恵器・陶磁器が混在して包含される。第VI層上面は造構検出面である。第VII~VIII層は無遺物層である。

遺構は主に第VI層上面での検出であり(第19図)、掘立柱建物址5棟、土塙12店、溝23条、柱穴441基(掘立柱柱穴を含む)、性格不明遺構1基他である。但し、遺構の深さなどから考えると、本来は第V層以上の層から堀り込まれた可能性の高いものが多い。また、遺構の埋土はそのほとんどが第V層、及びこれに酷似する。

遺物は、遺構及び包含層から縄文土器(後期)、土師器、須恵器、陶磁器が出土している。これらのことから、第V層は古代~中世までの間に堆積したものと考えられる。

尚、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。グリットは、西から東へA・B・C・D、南から北へ1・2・3~として、A1・A2・...・D11・D12といったグリット名を付した(第18図)。



第19図 調査区東壁土層図

3. 遺構と遺物

今回の調査において確認した遺構は掘立柱建物址5棟、土壙12基、溝23条、墓2基、井戸1基、柱穴441基（掘立柱建物柱穴含む）、性格不明遺構1基他である。

（1）掘立柱建物址（第5・20～22図）

本調査において確認した掘立柱建物址は5棟である。いずれも第VI層上面での検出であるが、柱穴の深さなどから本来は第V層以上から掘り込まれた可能性の高いものである。

1号掘立柱建物址（第20図、図版15）

調査区南東部C4～D5区に位置する。1×2間の建物址で、桁行長4.5m、梁行長3.15mを測る。南北棟で、ほぼ南北方向に主軸をとる。各柱穴は円形～楕円形を呈し、径25～39cm、深さ4.2～7.5cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色砂質土である。

時期：遺物が僅かであるため、時期の判定は難しいが、柱穴埋土等から中世の建物址と考える。

2号掘立柱建物址（第20図）

調査区西中央部A5～B6区に位置する。2×3間の建物址で、主軸は1号掘立柱建物址に較べてやや西に偏している。規模は桁行長5.55m、梁行長3.67mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し径34～48cm、深さ19～23cm（検出面下）を測る。柱穴埋土は暗灰褐色砂質土である。

時期：遺物が極めて細片であるため、時期の判定は難しいが、柱穴埋土等から中世の建物址と考える。

3号掘立柱建物址（第21図）

調査区西中央部A4～C6区に位置する。2×3間以上の建物址で、調査区西方へ続くものと考えられる。桁行長7.2m、梁行長6.15mを測る。方位は東西棟で、ほぼ東西方向に主軸をとる。各柱穴は円形～楕円形を呈し、径23～63cm、深さ6.5～12.9cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色砂質土である。

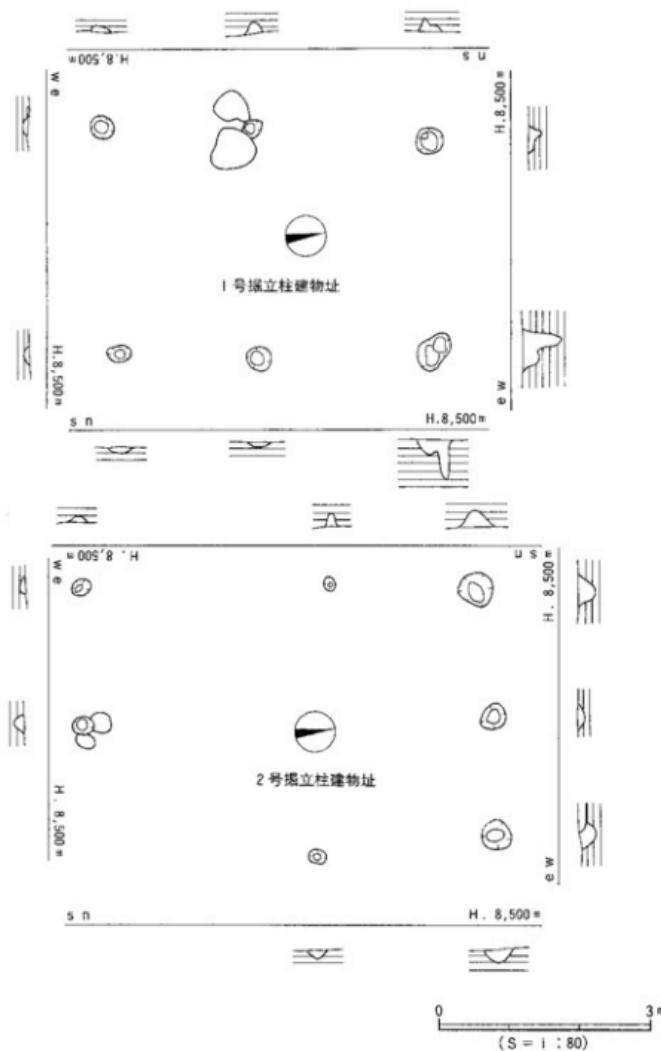
時期：遺物がないため、時期の判定は難しいが、柱穴埋土等から中世の建物址と考える。

4号掘立柱建物址（第22図）

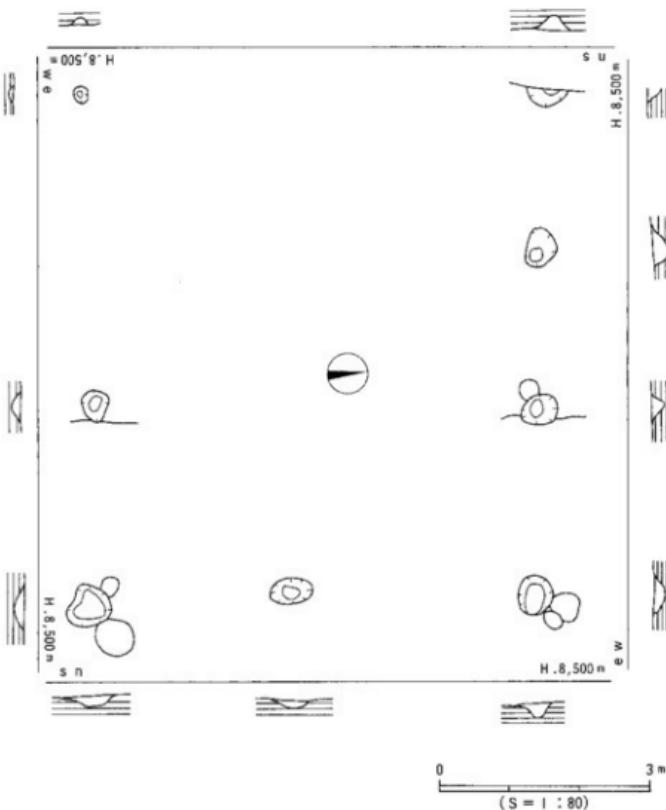
調査区北側中央部C10・11区に位置する。2×2間の建物址で、桁行長2.45m、梁行長1.8mを測る。方位は南北棟で、ほぼ南北方向に主軸をとる。各柱穴は円形～楕円形を呈し、径22～35cm、深さ12.4～28.7cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色砂質土である。

時期：遺物がないため、時期の判定は難しいが、柱穴埋土等から中世の建物址と考える。

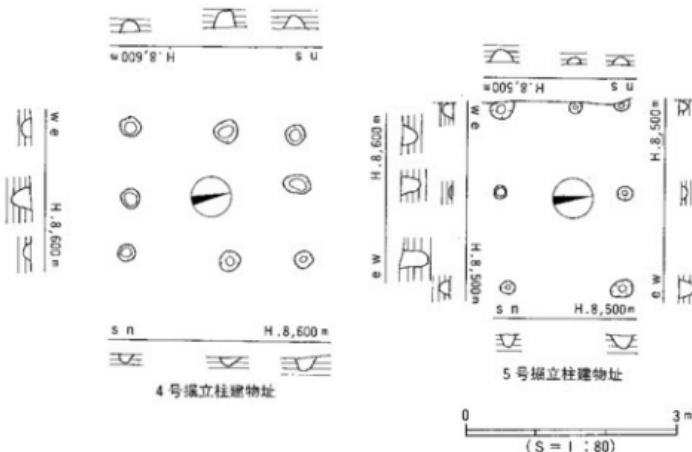
北斎院地内道路 2 次調査地



第20図 I号・2号 据立柱建物址測量図



第21図 3号掘立柱建物址測量図



第22図 4号・5号掘立柱建物址測量図

5号掘立柱建物址（第22図、図版15）

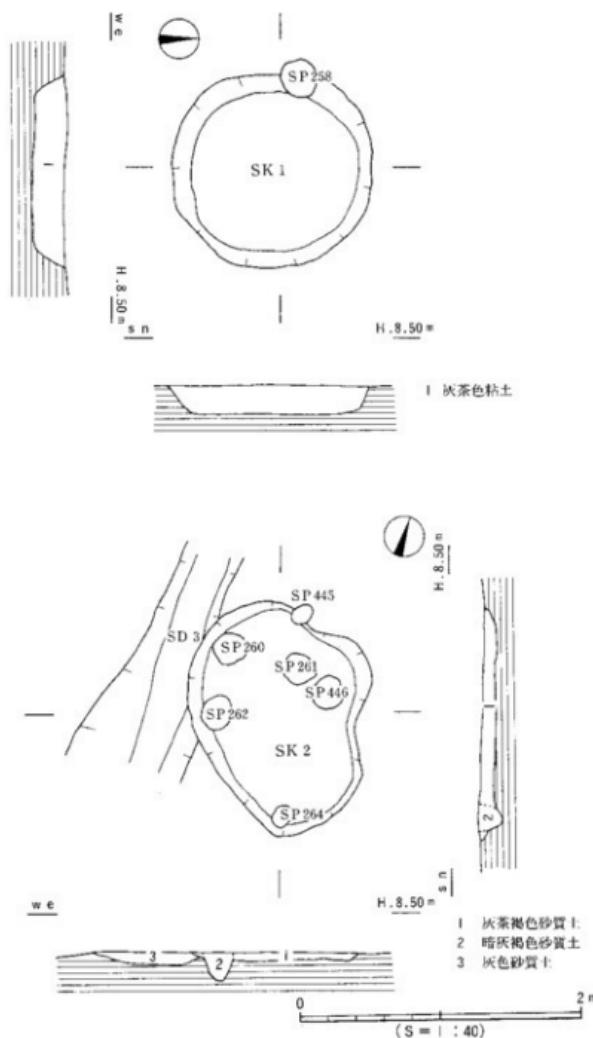
調査区北側西部B10区に位置する。1×2間以上の建物址で、調査区西方へ続くものと考えられる。桁行長2.05m、梁行長1.6mを測る。方位は東西棟で、ほぼ東西方向に主軸をとる。各柱穴は円形～楕円形を呈し、径16~30cm、深さ4~20cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色砂質土である。

時期：遺物が極めて細片であるため、時期の判定は難しいが、柱穴埋土等から中世の建物址と考える。

（2）土 壤（第23~26図）

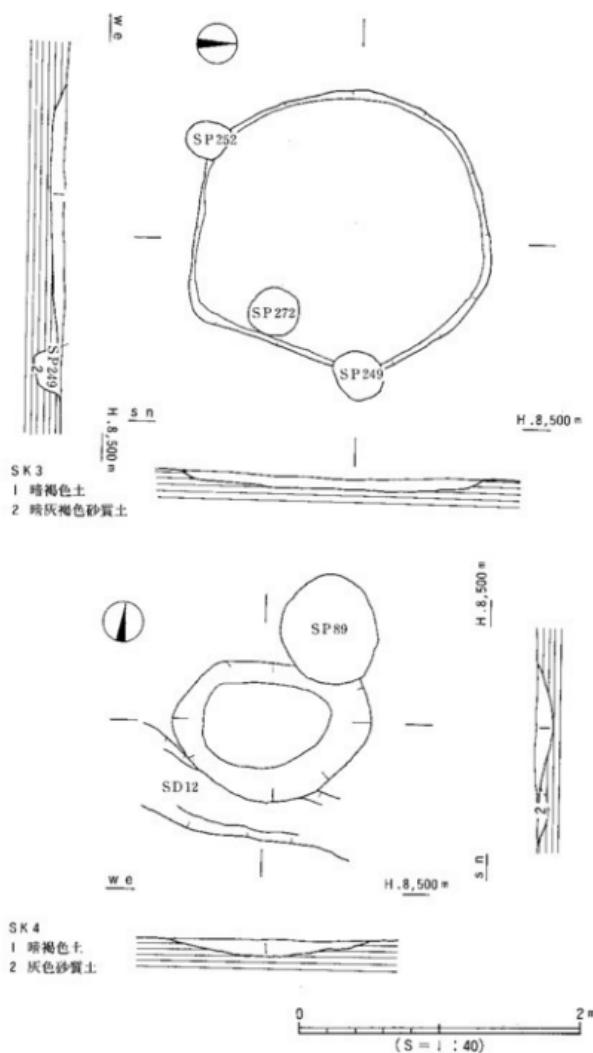
本調査において確認された土壤状遺構は10基である（土壤墓2基を除く）。すべて第VI層上面での検出である。出土遺物が少ない（しかも細片が多い）ことより、これらの土壤の性格は不明である。

平面形は大きく3種類に分類できSK1は円形、SK4・6は楕円形、他のものは長方形～隅丸長方形である。各土壤は時期を知り得るものは少ないが、埋土等から中～近世の遺構であると考える。

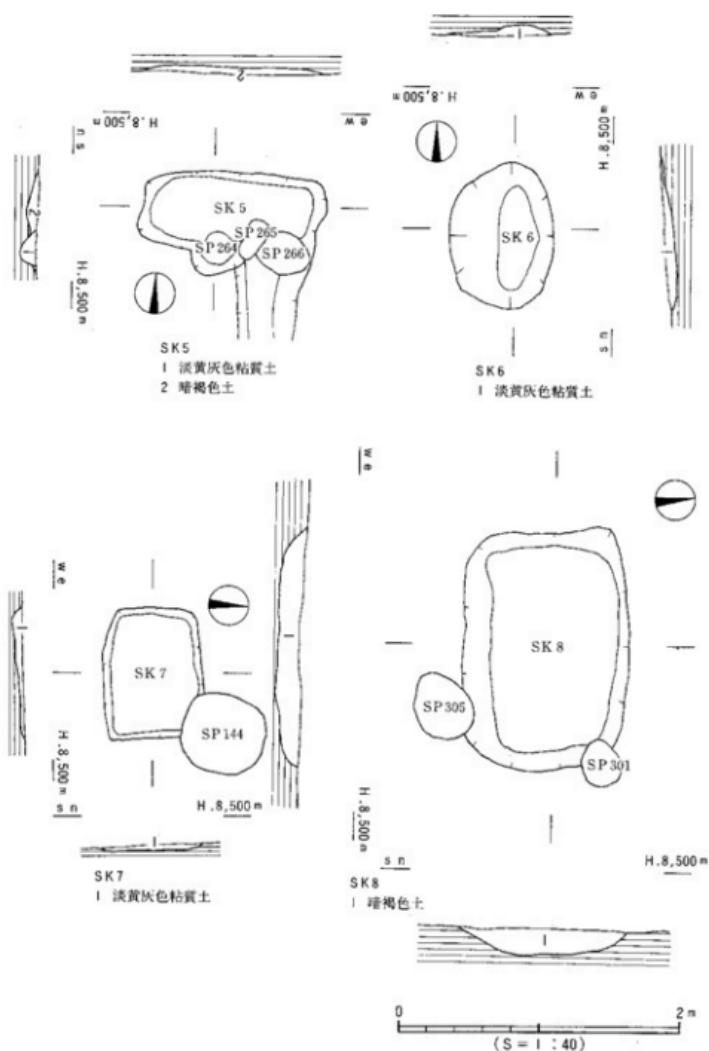


第23図 SK1・SK2 測量図

北斎院地内遺跡 2 次調査地

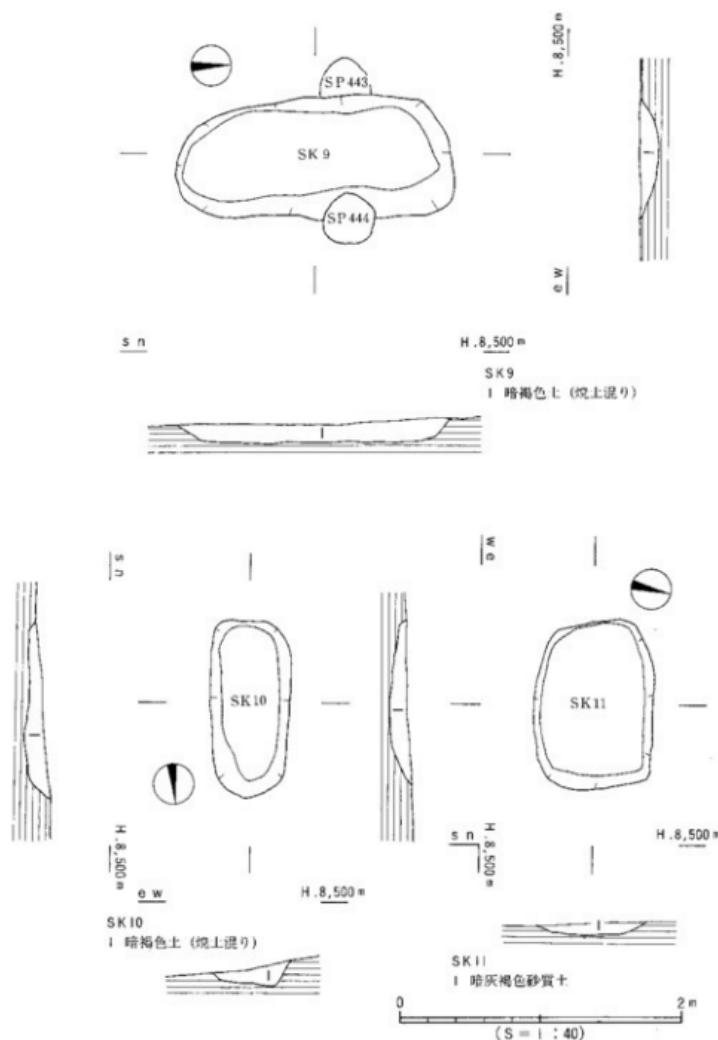


第24図 SK3・SK4測量図



第25図 SK5～SK8測量図

北斎院地内道路 2 次調査地



第26図 SK9・10・11測量図

(3) 溝

本調査において確認された溝状造構は23条である。いずれも第VI層上面での検出である。なお、遺存状況が良く、出土遺物があり、時代が特定できるものを主に記述する。各溝状造構の詳細は表15に記す。

S D 1 (第27・28図、図版16)

調査区南端を東西に流れる溝で、西側で南方へカーブしながら先細りしていく、東側は調査区東壁へ続く。断面形はレンズ状で、埋土は灰茶色粘土でSK 1の埋土と同じである。またSD 1内北側には、東西に並ぶ拳大の礫石の列がみられた。出土遺物には、土師質土器片と備前焼の土器片がある。いずれも、それらの出土状況より流れ込みと思われる。

土師器類 1は土師器皿、2・3は土師器杯である。内外面共に回転ナデ調整が施されており、底部は回転糸切りである。底部から口縁部にかけ肩曲部が明確である。

土釜 4～6は土釜である。4は口径18cmを測る。内弯する口縁に接して断面方形状の隆帶を貼付けており、断面中央がナデによりやや窪む。口縁部外面に細い割目が施されている。5は口径18cmを測る。やや内弯する口縁に接して下がり気味の断面三角形状の隆帶を貼付けている。6は上釜の脚部である。最大胴径25.5cmを測る。器体は水平に広がる底面よりやや内弯する。脚部が下方向に延びる。

鉢 7は土師器の鉢の口縁部である。外弯する口縁に接して断面方形状の隆帶を貼付けている。

擂鉢 8は土師器の擂鉢の底部である。平底の底部よりややくびれて外方向へ立ち上がる。内面にはヘラ状工具による条線が7本看取できた。

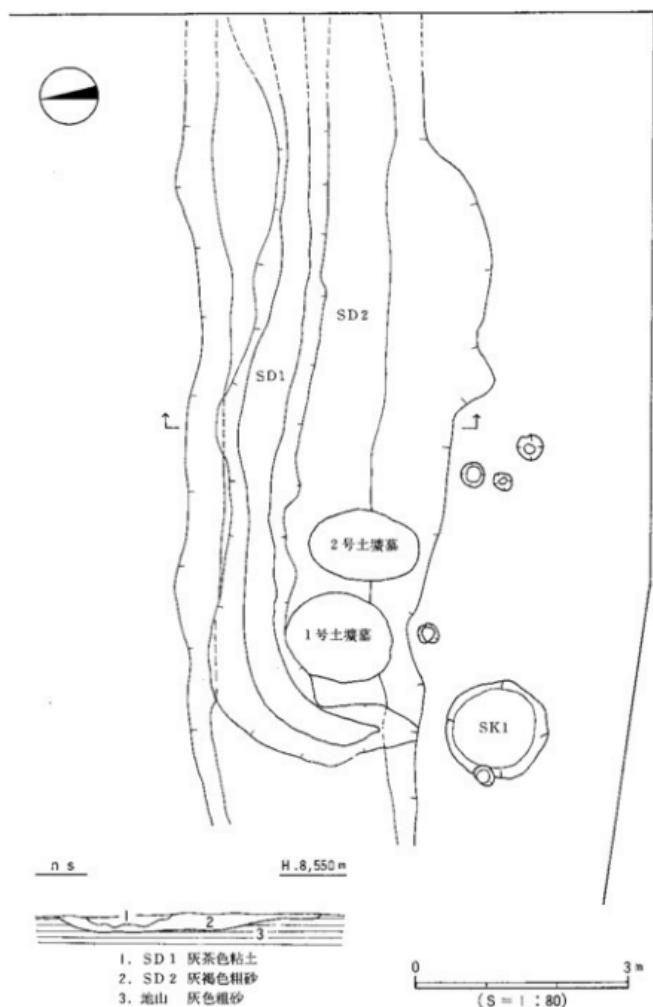
備前焼 9は大甕の底部である。平底の底面より緩く外方向に立ち上がる。10は擂鉢の底部である。底部よりやや内弯気味に立ち上がる。ナデによる稜を持つ。

時期：SD 2より後出することより、近世以降に掘削されたものであろう。

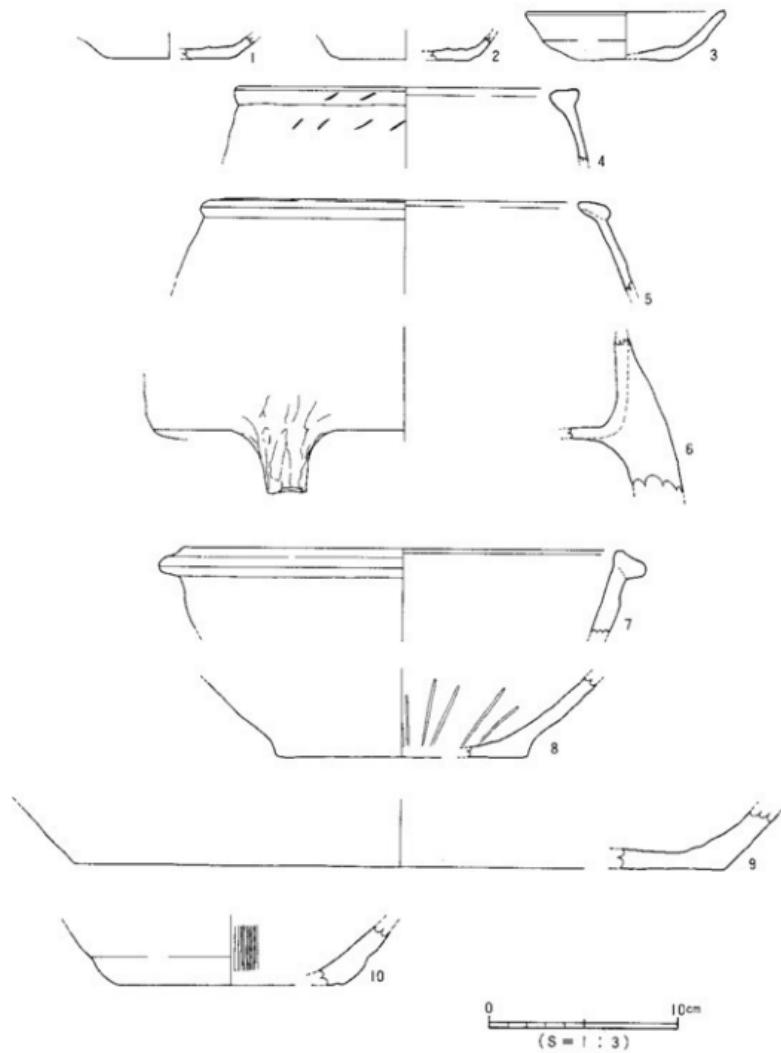
S D 2 (第27・29・30図、図版16)

調査区南端において検出された。SD 1と土壤墓1・2に先行する。溝底は東から西に向けて緩傾斜をなす。埋土は灰褐色粗砂である。出土遺物には、土師質土器片と瓦質土器片、備前焼の土器片がある。いずれも、それらの出土状況より流れ込みと思われる。

土師器類 11～14は土釜である。11は口径18.4cmを測る。内弯する口縁に接して断面方形状の隆帶を貼付けており、ナデ調整により端面がへこむ。11、12共に内面ハケ調整を施す。13は口径17.6cmを測る。断面三角形状の隆帶を口縁に貼付け、内弯する。14は上釜の脚部である。最大胴径32cmを測る。器体は水平に広がる底面より直立する。15は鉢である。外反する口縁に下垂れの断面三角形状の隆帶が貼付けてある。



第27図 SD1・SD2 測量図



第28図 SD I 出土遺物実測図

瓦質土釜 16は瓦質の土釜である。胴部最大径は25.3cmを測る。鉢部は丁寧なヨコナデで仕上げられる。

備前焼 17は擂鉢の胴部である。内面に櫛描き条線が放射状に7本施されている。18は甕の底部片である。内面に指頭圧痕が看取される。

時期：出土遺物・埋土等から中近世以降に掘削されたものであろう。

SD 7

調査地南区中央部において検出された。南北に6.8m、南西に5.5mのL字状になる溝状遺構である。深さは5~10cmと浅い検出であった。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は、実測不可能な土師質土器細片と須恵器細片である。

SD 13（第32図、図版18）

調査地南区中央部やや南側で検出された。検出長は、長さ4.6m、幅1.5m、深さ18cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は、土師質土器片と瓦質土器片がある。

土釜 24は瓦質の土釜である。口縁端部下に断面三角形状の隆帯が貼付けられる。調整は内外面共にナデ調整である。25は土師質の土釜である。断面三角形状の隆帯が口縁端部に貼付けられる。内面に指頭圧痕が看取される。

（4）土壙墓

本調査において、土壙墓2基が確認された。双方共に検出レベル、埋葬状況、頭位・土壤埋土等が類似している。これらのことより同一時期に埋葬された可能性が高い。なお、植物性の供獻品の有無を確認するために2基の土壙墓について土壤分析を行った（第5章）。

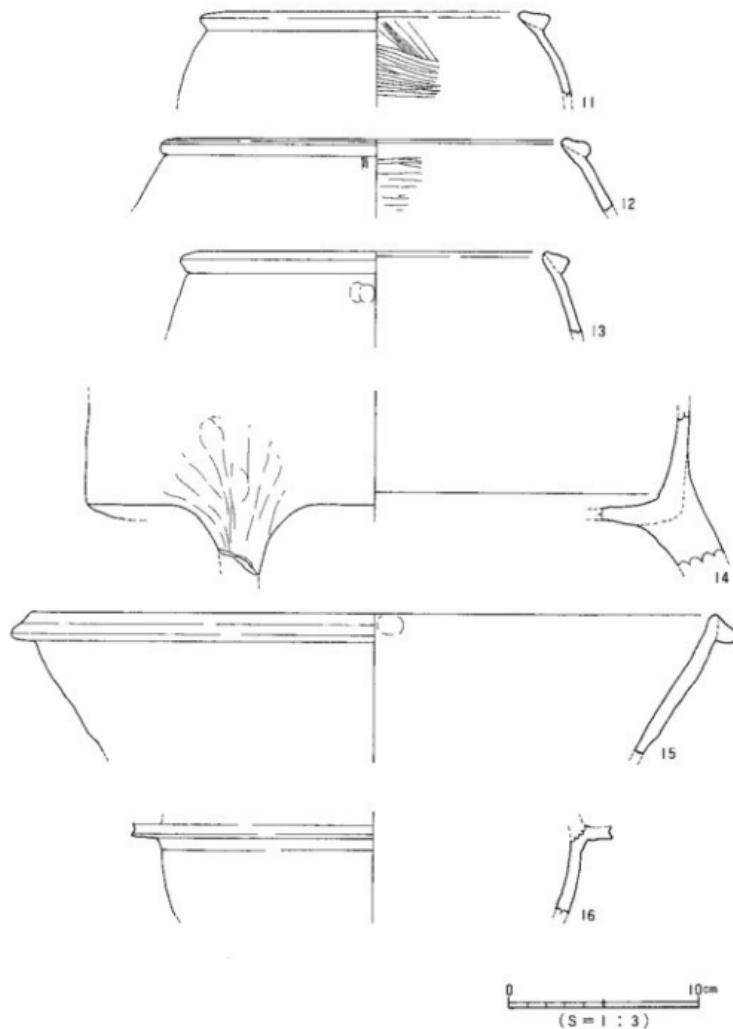
土壙墓1（第31・33図、図版18）

調査区南B1・2区での検出であり、SD1に先行し、SD2よりも後出する。SD1を堀り切った時点での検出である。平面形は橢円形を呈する。規模は南北1.48m、東西1m、深さ10cmを測る。断面は皿状で、床面は平坦である。埋土は、暗灰褐色粗砂である。人骨の頭位は北向きで、正面は西である。体位は膝を折り曲げた屈葬である。骨の遺存状況は悪く、非常にもろいものであった。供獻遺物は、後頭部付近から土師質の杯（1点）、宋銭（1点）が検出された。29は土師質の杯である。口縁端部はやや細くなりながら外反する。内面は回転ナデ、外表面はナデが施される。底面は静止ヘラ切り後ナデが施される。

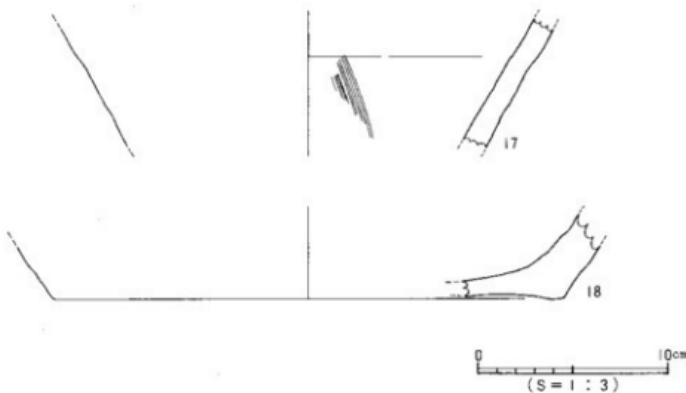
時期：出土遺物より、15~16世紀と考える。

土壙墓2（第31図）

調査区南B1・2区での検出であり、SD1に先行し、SD2よりも後出する。平面形は橢円形を呈する。規模は南北1.4m、南西1.1m、深さ10cmを測る。断面は皿状で、床面は平坦である。埋土は暗灰褐色粗砂である。人骨の頭位は北向きで、正面は西である。土壤



第29図 SD2 出土遺物実測図(1)



第30図 SD2 出土遺物実測図(2)

墓1との相違は、供献遺物がみられなかった点である。

時期：規模や頭位等土壙墓1と同形態を呈することより、15～16世紀と考える。

(5) 井 戸 (第32図、図版17)

S I 1

本調査区A3～B4区において円形の礫石配列を検出した。直径は1.40～1.55mを測る。石の大きさは人頭大～拳大である。出土遺物は少量がある。26は土師質の土釜である。口縁端部に断面方形状で下影れの隆帯が貼付く。調整は内外面共にナデである。

時期：出土遺物より15～16世紀と考える。

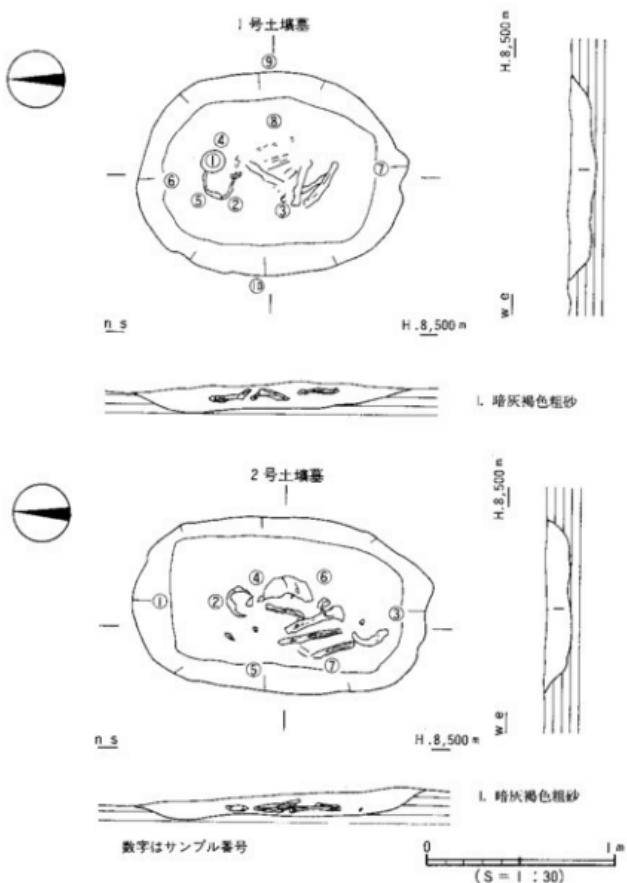
(6) 柱 穴 (第32図、図版17)

本調査において確認された柱穴は441基（掘立柱建物柱穴を含む）である。埋土は暗灰褐色砂質土、暗褐色土、淡黄灰色砂質土、暗褐色土（焼土混）の4種類があり、各々の正確な年代付けは判断しがたい。S P279の柱痕から完形の土師皿1点（19）が出土している。

20はS P400、21はS P417、22・23はS P427からの出土である。19は柱痕を埋めるように受部を上向きにして検出された。

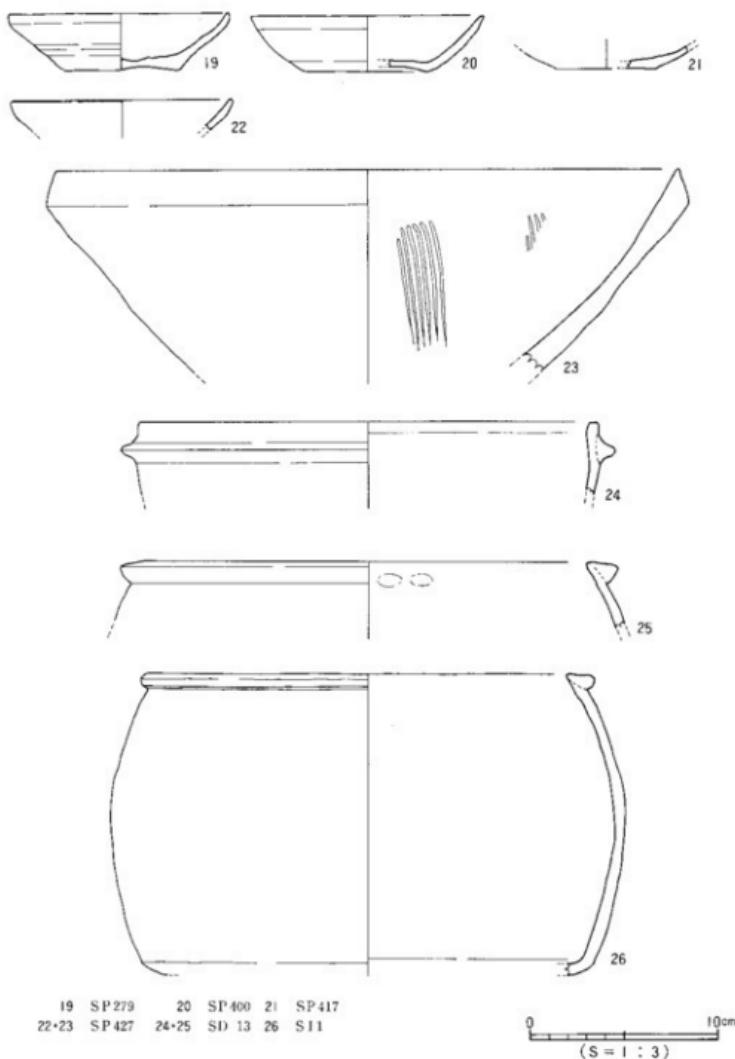
塔 19～22は塔である。19～21はすべて底部回転糸切りである。19、22は口縁端部をつまみ上げに内弯させる。20は口縁端部を先細りさせながら丸く仕上げる。

備前焼 23は擂鉢である。内面に柳描き条線がタテ方向に6本施されている。



第31図 1号・2号 土壤墓測量図

北南院地内遺跡 2 次調査地



第32図 SP・SD・SI 出土遺物実測図

(7) 性格不明遺構 (第33図、図版18)

S X 1

調査区南区北側中央部にて舌状の遺構 S X 1 が検出されたが、その性格はわからない。出土遺物が少量ある。

貿易陶磁器 27は青磁碗の口縁部で、口径16.1cmを測る。内窵した胴部より口縁端部が外反しており、内外面共に施釉されている。

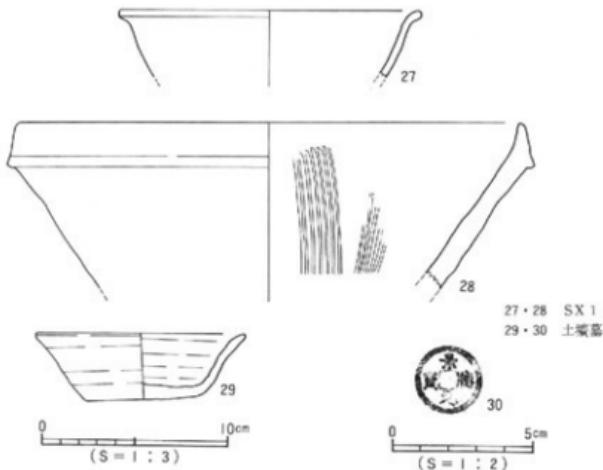
備前焼 28は播鉢である。口径26.6cmを測る。内面にタテ方向の7本の条線をもつ。

時期：出土遺物より16世紀と思われる。

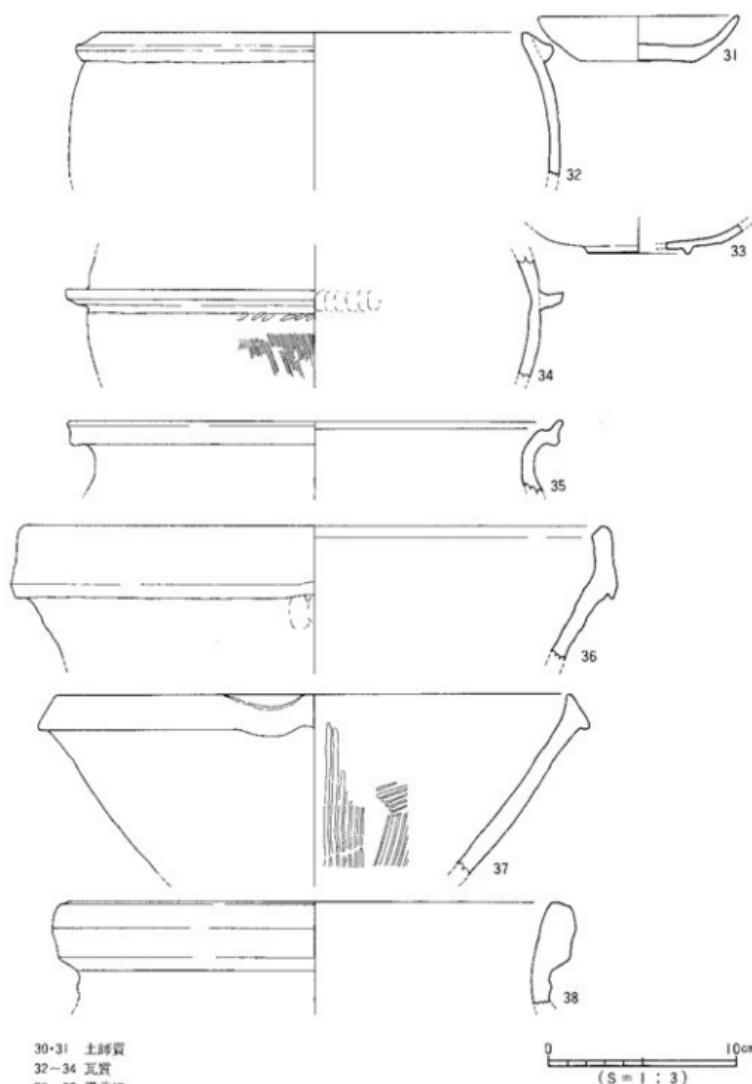
(8) その他の遺物 (第34・35図、図版19)

31～45は出土地点不明の遺物である。

31は土師器杯で、口縁端部を先細りさせる。底部は回転糸切りである。32は土師器の土釜である。口縁端部に断面三角形状の隆帯を貼付ける。外面には煤が強く付着している。



第33図 SP 土壌墓内出土遺物実測図



第34図 出土地点不明遺物実測図(I)

33は瓦器碗の底部である。断面逆台形状の高台がつく。内外面共に横ナデ調整が施されている。34は羽釜の口縁部である。胴部から口縁部にかけ内窓している。貼付けられている鉢は外方向に大きく、やや上向に延びる。35は東播系須恵器の甕の口縁部である。口縁部を大きく外弯させ、口縁端部を上下につまみ出して肥大化させている。

36、37は備前焼擂鉢である。36は口縁は平坦面を幅広く作っており、やや内傾する。37は注口部をもち、内面にタテ7本、ヨコ6本の条線が看取される。備前焼編年Ⅳ期のものである。38は備前焼甕である。折曲げ口縁をもち、口縁端部はナデにより面が形成される。

39は土師質の皿である。口縁端部は丸く仕上げられる。底部は回転糸切りによるものである。40は土釜である。口縁端部に断面三角形状の隆帯を貼付ける。41は鉢である。42は須恵質の甕の頸部片である。肩部にハケ状工具によるヨコハケが施される。

43、44は備前焼の甕の口縁部である。折曲げ口縁は断面長方形状を呈す。45は備前焼の擂鉢である。内側に7本の条線を看取できる。

4. 小 結

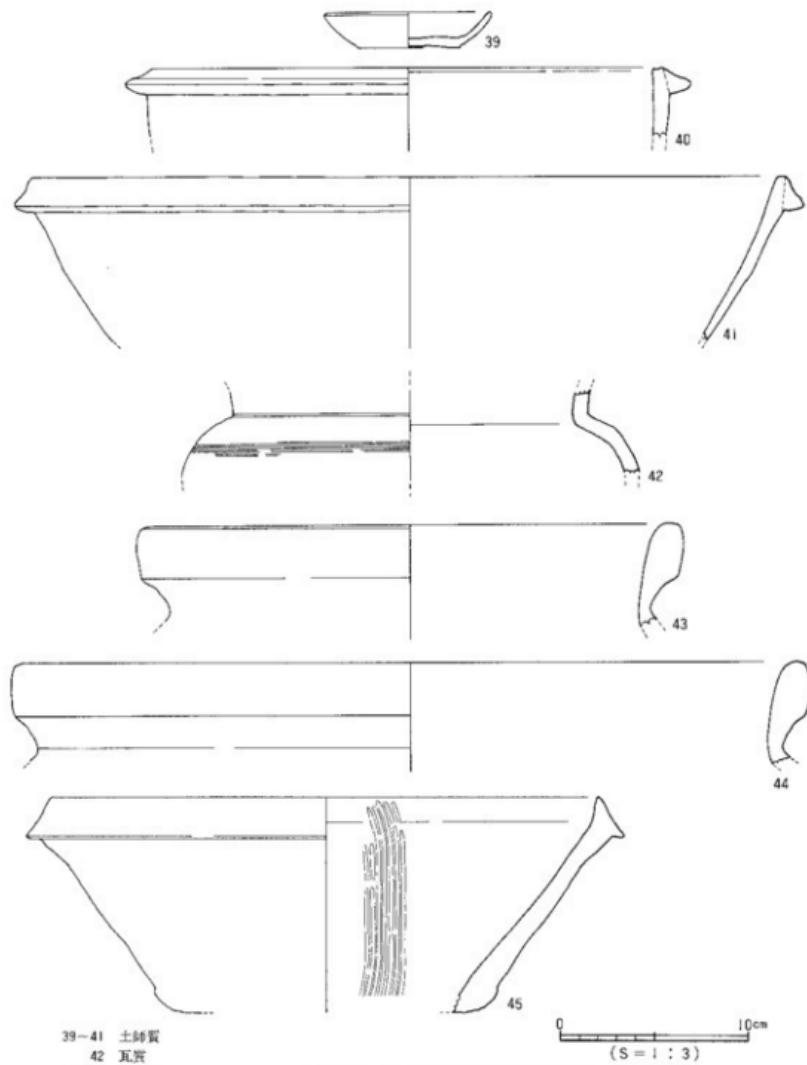
今回の北斎院地内遺跡2次調査では、中世から近世までの遺構と遺物を確認することができた。遺物は、主に第V層からの出土である。出土遺物から第V層は、遅くとも17世紀までには堆積していたことになる。以下、今回の成果を4つにまとめて記述する。

第一にSD2、土壙墓群、SD1の上下関係が今回の調査において明確になったことである。切り合い関係は古い順にSD2→土壙墓1・2→SD1である。松山平野における中世土器の編年が確立していないこともあり、確定な時期比定は避けが、出土遺物は15~16世紀のものと思われる（註1）。前回の北斎院地内遺跡1次調査においても同様の遺構は検出されてはいたが、上下関係の判別が困難を極めた。しかしながら今回の調査結果により、第1次調査における資料分析は充実するものと思われる。

第二に今回の調査においては東西南北に走る溝状遺構が多数検出されたことがあげられる。特にSD7においては、明確なコーナーが検出され、合わせてその内側に掘立柱建物址も検出された。これは、中・近世の集落形態を示す貴重な資料となるものである。

類似の遺構は樽味遺跡II（田崎 博之 1993）や古照遺跡6次調査地（栗田 正芳 1992）において検出されている。樽味遺跡IIでは14~16世紀の集落関連遺構が検出され、古照遺跡6次調査地においても同時期の集落関連遺構が確認されている。ただし、これ等の遺跡には集落立地に違いがみられ、樽味遺跡IIは扇状地上のおよそ30mにあり、古照遺跡6次調査地は今回の北斎院地内遺跡と同じ沖積低地に立地する。これ等の資料は、多少の時期差はあると思うが、松山平野の中近世の集落形態を考える上で好資料となるものであろう。

第三に掘立柱建物址、井戸、溝状遺構などの生活関連遺構と土壙墓の検出があげられる。



第35図 出土地点不明出物実測図(2)

これらは前回の1次調査にても同様な検出をみており、北斎院地内遺跡における中・近世集落が東西に広がることを示唆しているものである。生活関連域と墓域の選地という視点で今後集落分析を重ねていかなければならないものと考える。

第四に今回の調査では土壤墓内部の土壤分析を行ったことがあげられる。分析結果から、遺体の上下からは多量のイネに関するプラントオバールが検出された。この結果は、当時遺体を納める際にワラを敷きつめていた可能性が考えられる資料となるものであり、今後継続的に調査分析を進めなければならぬものであろう。

〔註〕

(1) 鈴木康之氏(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所)と栗田正芳氏の御教示による。

【文 献】

田崎 博之 1993 「枕味遺跡II」 愛媛大学埋蔵文化財調査室

栗田 正芳 1992 「古照寺跡- 第6次調査-」 松山市教育委員会、松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

●表13 据立柱建物址一覧

据立	規 模 (間)	方 位	柵 行		梁 行		床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	1×2	南北	450(15)	8.3×6.7	315(10.5)	10.5	14.2		
2	2×2	南北	555(18.5)	7.3×6×5.2	367(12.2)	6×6.2	20.4		
3	2×(3+α)	東西	720+α (24+α)	9+7.3+7.7	616(20.5)	9+11.5	44.3+α		
4	2×2	南北	245(8.5)	3.3×4.5	180(6)	3.3×2.7	4.4		
5	2×(3+α)	東西	205+α (6.8+α)	4.3×2.5	160(5.3)	5.3	3.3+α		

●表14 土 塚 一 覧

土 塚 (SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	A 2	円	透 台 形	1.38×1.4×0.2	灰黑色粘土			
2	B 1・2	椭 圆	皿 状	1.48×1.0×0.1	粉灰色砂質土	土器底・朱鏡		基 1
3	B 1・2	椭 圆	皿 状	1.4×1.1×0.1	暗灰色砂質土			基 2
4	C 5・6	椭 圆	皿 状	1.4×1.0×0.05	暗褐色土			
5	B 5	長 方	皿 状	1.3×0.73×0.08	暗褐色破質土			
6	A 4	椭 圆	皿 状	1.3×0.73×0.05	淡黃褐色粘質土			
7	B・C 5	長 方	皿 状	0.92×0.7×0.05	暗灰褐色砂質土			
8	B・C 11	長 方	皿 状	1.69×1.14×0.14	暗褐色土			
9	B 9	椭 圆	皿 状	1.95×0.87×0.11	棕褐色土(燒土混)			
10	B・C 9	椭 圆	皿 状	1.26×0.56×0.59	粉褐色土			
11	B 6	長 方	皿 状	1.18×0.83×0.07	暗灰褐色砂質土			
12	D10・11	不整圓	舟 盆 状	0.95×0.55×	暗褐色土			

道構一覧

●表15 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	A・B・C2	レンズ状	9.8×1.2×0.2	暗茶色粘土			
2	A・B・C2	皿 状	11×4.3×0.21	暗褐色粗砂			
3	B 4・5・6・7	皿 状	12×1×0.05	暗灰褐色砂質土			
4	A・B 2・5	皿 状	7.9×3×0.07	淡黃褐色粘質土			
5	A 4・5	皿 状	13×6.5×0.06	淡黃褐色粘質土			
6	B 3・4	皿 状	5.6×4.5×0.07	暗灰褐色砂質土			
7	B4, C3~5, D3	皿 状	12.8×6.5×0.09	暗灰褐色砂質土			
8							消滅
9	C 3~5, D 4	皿 状	7.9×0.8×0.023	淡黃褐色粘質土			
10	D 4・5	皿 状	4.8×0.6×0.032	暗灰褐色砂質土			
11	C 3・4	皿 状	3.5×0.7×0.13	暗灰褐色砂質土			
12	C・D 5	皿 状	5.5×0.5×0.03	暗褐色土			
13	C 3	皿 状	4.6×1.5×0.18	暗灰褐色砂質土			
14	B・C 6	皿 状	1.66×0.36×0.15	暗灰褐色砂質土			
15							消滅
16							消滅
17	B・C 12	皿 状	3.35×0.42×0.12	暗灰褐色砂質土			
18	C 12	皿 状	1.87×0.54×0.05	暗灰褐色砂質土			
19	C・D 10~12	皿 状	4.79×0.82×0.02	暗灰褐色砂質土			
20	C 9	皿 状	2.65×0.26×0.04	暗灰褐色砂質土			
21	C 8	皿 状	1.55×0.46×0.12	暗灰褐色砂質土			
22	E 10・11	皿 状	2.51×1.25×0.21	淡黃灰色粘質土			
23	C 9~11	皿 状	4.85×0.54×0.01	暗灰褐色砂質土			

●表16 井戸一覧

井 戸 (S I)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	A4, B4 A3, B3	円	?	2.2×2.15×(0.15×α)	暗褐色砂質土			

遺物観察表—凡例一（武正良浩）

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4) 多→「1～4 mm大の石英・長石を多く含む」
である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表17 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土瓶 盆	底径(6.2) 残高 1.2	口縁部がやや外反か。 内面に凹凸がある。	底面……凹板条切り 側面……凹板ナテ	凹板ナテ	乳白色 乳白色	良 ○		
2	土瓶 杯	残高 1.2 底径(7.0)	口縁部がやや内傾か。 内面に凹凸がある。	側面……凹板ヨコナテ 底面……凹板水切り	凹板ナテ	乳白色 乳白色	良 ○		16
3	土瓶 杯	口径(10.0) 残高 2.5 底径(5.1)	内面裏方に強いナテ。口縁部がやや外反。 内面に凹凸がある。	側面……凹板ヨコナテ 底面……凹板水切り	凹板ナテ	乳白色 乳白色	良 ○		16
4	土瓶 瓶型	口径(18.2) 残高 5.0	口縁部外面に斜線の刻目。 内面裏方に凹凸がある。	ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰茶色 淡灰茶色	良・石 ○		16
5	土瓶 上巻	口径(16.2) 残高 4.6	口縁部に凹板二角形状の陽 基。	口縁端部……ヨコナテ 側面……ナテ	ナテ	赤褐色 乳茶色	良・石 ○		16
6	土瓶 上巻	最大直径(25.5) 残高 8.4	外面に爆付部。 脚部複合部。	ナテ	ナテ	灰褐色 灰褐色	良・石 ○		16
7	土瓶 脚	口径(22.2) 残高 4.3	外溝する口縁に接して断面 方形形状の隆帶。	口縁端部……ヨコナテ 側面……ナテ	口縁端部……ヨコナテ 側面……ナテ	暗褐色 黄褐色	良・石 ○		16
8	土瓶 直 脚付	残高 4.4 底径(13.2)	柔軟な單腹で放射状。	マメツの點不明	7本の豪文	黄褐色 乳茶色	良 ○		16
9	僅前 大甕	残高 3.1 底径(34.4)	底盤が「く」字形に大きく 外反。		ヨコナテ	暗褐色 赤茶色	良 ○		
10	指鉢	残高 3.1 底径(11.8)	内面に7本の豪文。	マメツ	マメツ	赤茶色 赤茶色	良・石 ○		

出土遺物観察表

●表18 SD 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
11	土器 土釜	口径(18.4) 底高 4.6	口縁部に断面方形状の隆 起。	ヨコナデ	ハケ	茶褐色 茶褐色	長・石 ○	楕円形	16
12	土器 土釜	口径(19.6) 底高 4.3	口縁部に断面四形状で下 膨らみの隆起。	ナテ	ハケ	淡茶褐色 茶褐色	長・石 ○		16
13	土器 土釜	口径(17.6) 底高 5.2	口縁部に断面三角形状の 隆起。	ナテ	ハケ	暗黄褐色 淡黄褐色	長・石・金 ○		16
14	土器 鉢	口径(32.0) 底高 8.2	水平に広がる底面。	マメツ	ナテ	茶褐色 褐色	長・石 ○		16
15	土器 鉢	口径(36.0) 底高 8.4	外反する口縁に下膨れの 断面三角形状の隆起。	楕円形	口縁部……ヨコナデ 側面……ナテ	暗灰褐色 茶褐色	長・石・金 ○	楕円形	16
16	瓦器土器 土釜	口径 17.2 底高 5.0	外面……肩下部に少々楕円 形。	ナテ	ナテ	乳灰白 乳白色	長・石 ○		
17	棺鉢	底高 6.6	内面に 2 本の条痕。	回転ナテ	回転ナテ	黄灰色 黄褐色	密 ○		
18	棺鉢	底高 4.5 底径(27.0)	内面に梢頭压痕。	ナテ	ナテ	暗褐色 暗褐色	密 ○		

●表19 SP 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	土器 杯	口径 11.8 底高 3.0 底径 6.2	底部……回転系切り瓶。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 灰褐色	密(点・4) ○	SP225 完形	17
20	土器 杯	口径(12.3) 底高 2.93	底部……回転系切り瓶。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 乳白色	長・石・金 ○	SP409	17
21	土器 杯	底高 1.2 底径(5.8)	底部……回転系切り瓶。	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	黄褐色 灰褐色	密(全) ○	SP417	
22	土器 杯	口径(11.7) 底高 1.6	口縁部がやや内縮。	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	灰褐色 灰褐色	密 ○	SP427	
23	棺鉢	口径(33.4) 底高 10.7	6 本の条痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰茶褐色	長・石・金 ○	SP427	17

●表20 SD・SI 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
24	瓦質 羽皿	口径(24.3) 底高 3.86	口縁下部に断面二角形状。	ナテ	ナテ	乳黃褐色 乳灰	石・長 ○	SD13	18
25	土器 土釜	口径(33.2) 底高 3.5	口縁部に断面二角形状の 隆起。	ヨコナデ	ナテ	茶褐色 淡茶褐色	石・長・金 ○	SD13	18
26	土器 土釜	口径(24.0) 底高 15.9	口縁に兼て断面力形狀で 下膨れの隆起。	ナテ	ヨコナデ	褐色 褐色	長・石 ○	S I I	17

●表21 SX 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
27	陶器 碗	口径(16.1) 底高 3.55	口縁部は丸く、短く外反 する。	緑釉	緑釉	綠灰色 綠灰色	密 ○	S X I	18
28	棺廟 鉢	口径(26.6) 底高 8.85	ナテ方向に 7 本の条痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石 ○	S X I	18

●表22 土器墓出土遺物觀察表 土製品・銅錢

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
29	土師 杯	口径 11.2 基高 3.8 底径 6.1	端部は丸く無くなり底く外 反。 ヨコナデ		同軸ナデ	灰褐色 灰白色	長・石・全 セ	泰 1 完形	18
30	銅錢	外径 24.7mm 内径 6.3mm 基高 6.24mm	貴徳元寶、順統、貞倅等、 北宋1095年。					泰 1	

●表23 地点不明出土遺物觀察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	土師 杯	口径(11.0) 基高 2.3 底径(6.3)	直側……回軸名切り底。	回軸ナデ	同軸ナデ	黄褐色 乳黃茶色	青(全) セ	C 11	19
32	土師 土釜	口径(22.0) 底高 7.75	口縁に断面三角形状の隆起 を残す付け。	マメツ	ヨコナデ	灰褐色 乳灰褐色		標付着	
33	瓦器類	底径(5.2) 基高 1.55		ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	青 セ	D 6	19
34	瓦質 土釜	底高 6.3	脚下に板状工具による刺突、 その下にタテハケ。	ヨコナデ	ナデ	淡灰褐色 乳黃色	青 ○	C 3	19
35	須恵質 鏡	口径(26.0) 底高 4.2	口縁部はつまみ上げによ り先端にし、底く外反。	同軸ナデ	同軸ナデ	淡青色 淡青色	青 セ	C 2	19
36	須前 鉢	口径(31.0) 底高 7.1	口縁上部がや内上方向に 拡張。内外両先に横ナデ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶褐色 黃褐色	長・全 セ	B 6	19
37	須前 楕円	口径 28.6 底高 11.5	内面にタテナ本、ヨコも本 の赤錆。	ヨコナデ	ヨコナデ	桃褐色 桃灰褐色	石・長 セ	C 8	19
38	須前 鉢	口径(38.2) 底高 5.4	口縁部を外に折り曲げた形 西方形狀の複合装飾。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	長・石 セ	C 5	19
39	土師 皿	口径(9.0) 底径 5.5 基高 1.9	底部……回軸名切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 乳黃色	青 セ		19
40	土師 土釜	口径(36.0) 底高 3.7	口縁底部に断面三角形状の 隆起。	ナデ	ナデ	茶色 茶色	長・石 ○		19
41	土師 鉢	口径(40.0) 底高 8.8	口縁底部に断面三角形状の 隆起。	ナデ	ナデ	褐色 黑灰褐色	石・長 ○		19
42	瓦質 壺	底高 4.5	肩部にヨコハケ。	ヨコナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 ○		19
43	須前 鏡	口径(23.4) 底高 4.3	折り曲げ口縁。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒茶色 暗褐色	石・長 セ		19
44	須前 大甌	口径(39.0) 底高 5.6	折り曲げ口縁。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶色 暗茶色	青・全 セ		19
45	須前 壺鉢	口径(29.6) 底高 11.35	7本の条線。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長・全 ○		19

第4章

サ　　ヤ　　カラス　　ヤマ

斎院烏山遺跡



第4章 斎院烏山遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

昭和59年5月7日、美津和ビルディング株式会社より、松山市北斎院町1224-1他の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化教育課に提出された。当該地は、松山市の指定する『24弁天山古墳群・タイ崎遺物包含地』、『26南斎院遺跡』、『27津田古墳群・津田弥生遺跡』に隣接し、豊富な遺跡地帯であることが古くから知れている。よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために同年5月11日に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかになった。この結果を受け、宅地開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存を行うため、文化教育課を主体とし、三津和ビルディング株式会社の協力のもと、昭和59年5月～同年6月の間、本格的な調査を実施した。なお、調査は遺構が維存する東側部分に対して実施した。

(2) 調査組織

調査地 松山市北斎院町1224-1、1224-2、1224-3、1229-1、1229-2、1234、1237、1238、1243

遺跡名 斎院烏山遺跡（註1）

調査期間 昭和59年5月15日～同年6月4日

調査面積 1803.41m²（うち、300m²を調査）

調査協力 三津和ビルディング株式会社

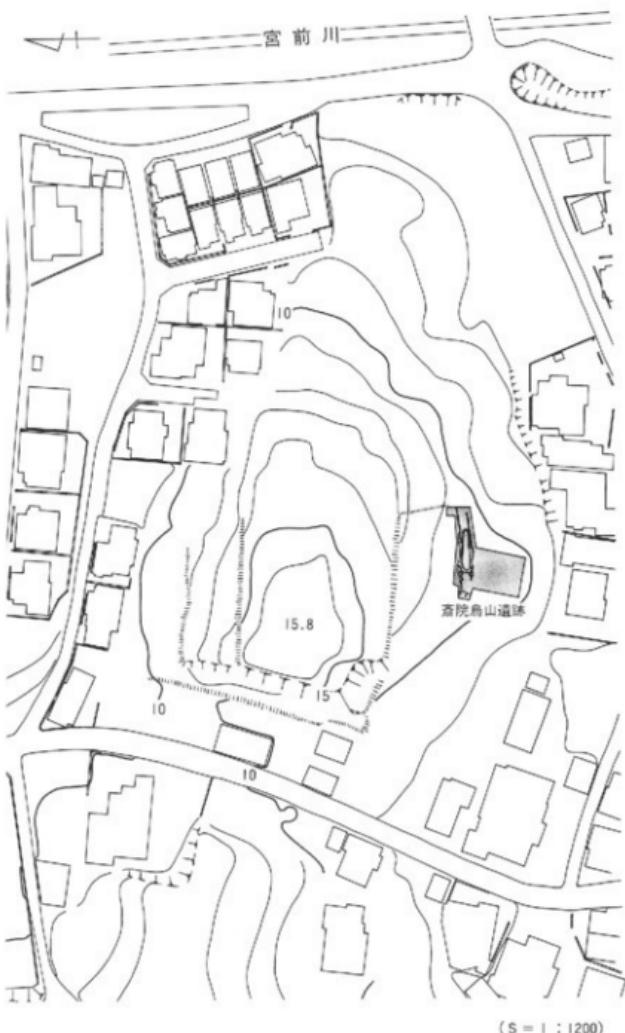
調査担当 西尾幸則（現、鈴松山市生涯教育振興財團埋蔵文化財センター学芸係長）

栗田茂敏（現、鈴松山市生涯教育振興財團埋蔵文化財センター調査係）

池田 学（現、鈴松山市生涯教育振興財團埋蔵文化財センター調査係）

松村 淳（現、鈴松山市生涯教育振興財團埋蔵文化財センター調査係）他

（註1） 当遺跡については、松山市教育委員会が1987年に刊行した『松山市埋蔵文化財調査年報I』「昭和46～59年度、発掘調査遺跡一覧表（II）」において、81・南斎院遺跡として表記されている。ただし、その後の資料紹介等では「斎院烏山遺跡」として掲載され、多くの人が知るところである。よって、本報告に際しては、本調査地の遺跡名については「斎院烏山遺跡」として報告するものである。



第36図 調査区位置図

2. 立地と土層

(1) 立地

斎院鳥山遺跡は、松山平野の西部に位置する。遺跡は、伊予灘を目前とする弁天山丘陵中（東側）の低丘陵上に立地する。標高は10.8mを測り、眼下には宮前川があり、視界には平野南西部（松前町～伊予市）が広く見渡せる。

(2) 土層

調査地は、既に昭和の前半期に造成工事が行われていた土地である。現状は、みかん山となっており、20～30cmを測る表土下は基盤土（地山）となる。

検出遺構は、調査対象地の東部域にて、弥生時代前期末の溝（SD1）を1条検出したにとどまる。

遺物は、SD1出土の土器・石器の他、SD1上にある表土中より少量の土器・石器が出士している。この他には、近現代の資料がわずかに表採されている。

よって、本調査により確認した遺構・遺物はSD1に関するものに限られるといえる。

3. 遺構と遺物

前述のごとく、本調査により得られた考古資料はSD1に関するものに限られる。

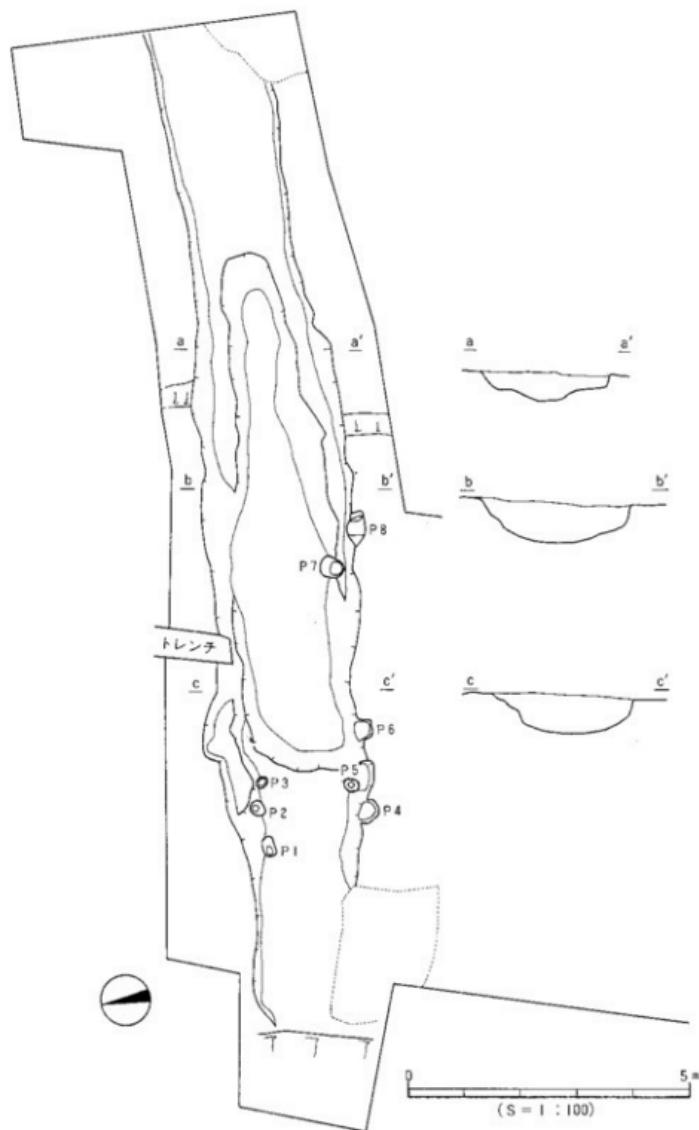
SD1（第37～57図、図版20～36）

SD1は、小丘陵の南西中腹部で、標高10mの等高線とほぼ並行する状況（東西方向）で検出された。検出長15.5m、幅2.5～3m、深さ0.8～1.0mが測られた。断面は、ゆるやかな「U」字状を呈し、南側では約幅30cmのテラス状の平坦部分をもつ。東及び西は、溝の深度が浅くなり、溝が消失する様相を呈している。これは、上部が削平された結果、このように消失した形で検出されたが、本末は丘陵を回周するものと考えられるものである。本調査の検出部分は、溝の基底部であり、かつ掘り込みが深い部分を検出したものと考えられる。

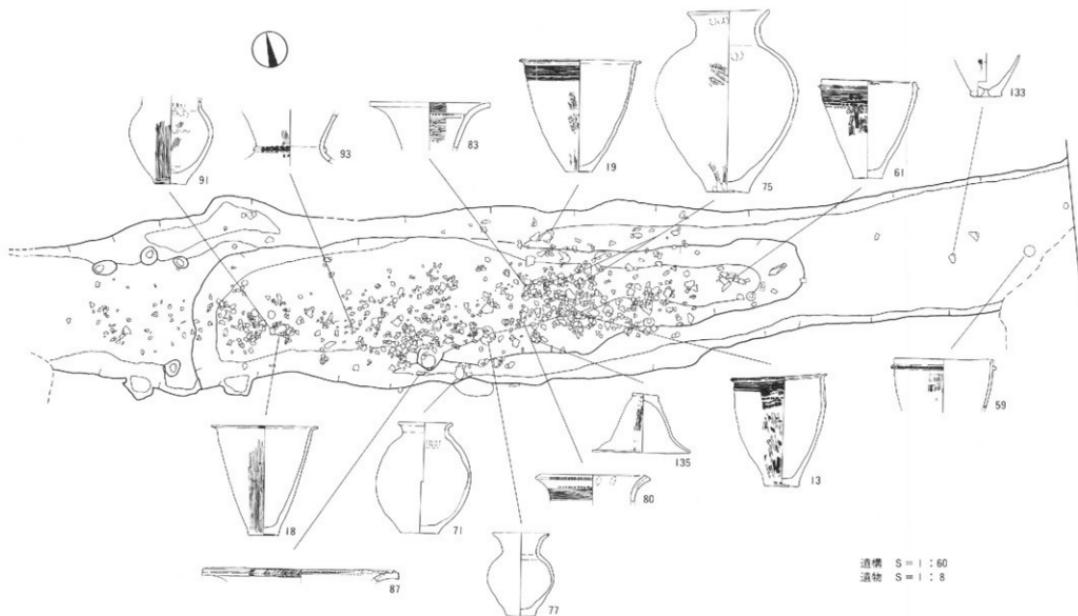
埋土は、地山である黄褐色土が部分的に混入するが、総体としては黒灰～明褐色土となる。

遺物は、完形品を含む多くの土器と石器が埋土の中～下部で出土している。弱干の埋土差はあるものの、上下または1～2m離れた土器片が接合できる状況にもあり、ほとんど時期差のない土器群であると思われる。

以下、出土遺物を器種ごとに記述する。



第37図 SDI 測量図



第38図 SD I 遺物出土状況

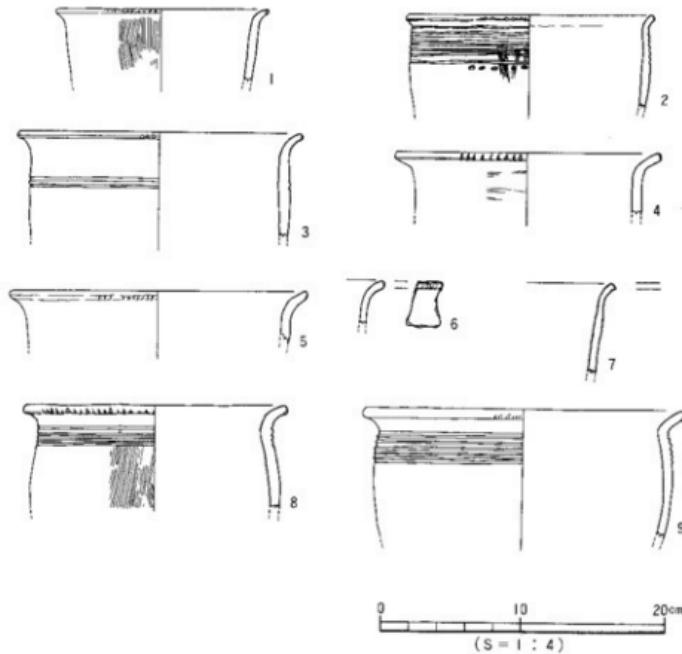
(1) 麗形土器

麗形土器には、口縁部形態に大きく三つのものがある。

1) 折り曲げによる口縁部を形成するものである(第39~43図)。口径による法量差がみられ、15cm前後の小型品、17~24cmの中型品、24~30cmで中型品でもやや大きいもの、30cmを超える大型品がある。

小型品(口径15cm前後、1・2) 1は胴部の張りが弱く、口縁端面に刻目を施す。2は口縁下半部に刻目、胴部に9条のヘラ描き沈線文と刺突文を施す。

中型品(口径17~24cm、3~25) 3~7は、胴部の張りがやや弱く、口縁部の折り曲げもゆるやかなものである。古い様相をとどめる器形である。3~6の口縁端面には刻目が施されている。7は小片にて、口縁端面に刻目が施されていたか判断できないものである。



第39図 SD I 出土遺物実測図(I)

3の胴部には、ヘラ描き沈線文が2条施されている。8~25は胴部に張りがみられるもので、8・9は口縁部がやや長いもの、10~25はやや短いものである。8・9は、口縁の屈曲部が繋り、胴部の張りが強く感じられるものである。口縁部直下にヘラ描き沈線文を4~6条施す。10~17は、口径と胴部最大径が等しい値を示すものである。口縁部は、極めて短い折り曲げであるものがみられる(10・11・16)。口縁端面には、刻目を施すもの10~14・16と施さないもの15・17がある。胴部には、ヘラ描き沈線文を2~10条施し、さらに沈線文帯下位に刺突文を施すもの15~17もある。18~25は、胴部最大径が口縁屈曲部にあるもので、長軸傾向を示すものである。口縁端面には刻目を施すもの18~22と施さないもの23~25がある。胴部にはヘラ描き沈線文を2~10条を施すものがあるが、無文のものが多い傾向をもつ。さらに無文のものは、口縁部が強く折り曲げられ逆「L」字状を呈すものがみられる。

中型品(口径24~30cm、26~32) 26~32は、胴部にやや張りをもち、口縁部の折り曲げが強いものである。口縁端面には、刻目を施すもの27~31と施さないもの26・32がある。胴部には無文のもの26と、ヘラ描き沈線文と刺突文を施すもの27~32がある。なお、30~32は沈線文帯の間に刺突文が施される。

大型品(口径30cm以上、33~35) 33~35は、口径が30cm以上の大型品で、器壁がやや薄い感がある。口縁端面には刻目を施す。胴部にはヘラ描き沈線文5~10条や刺突文を施すものがある。

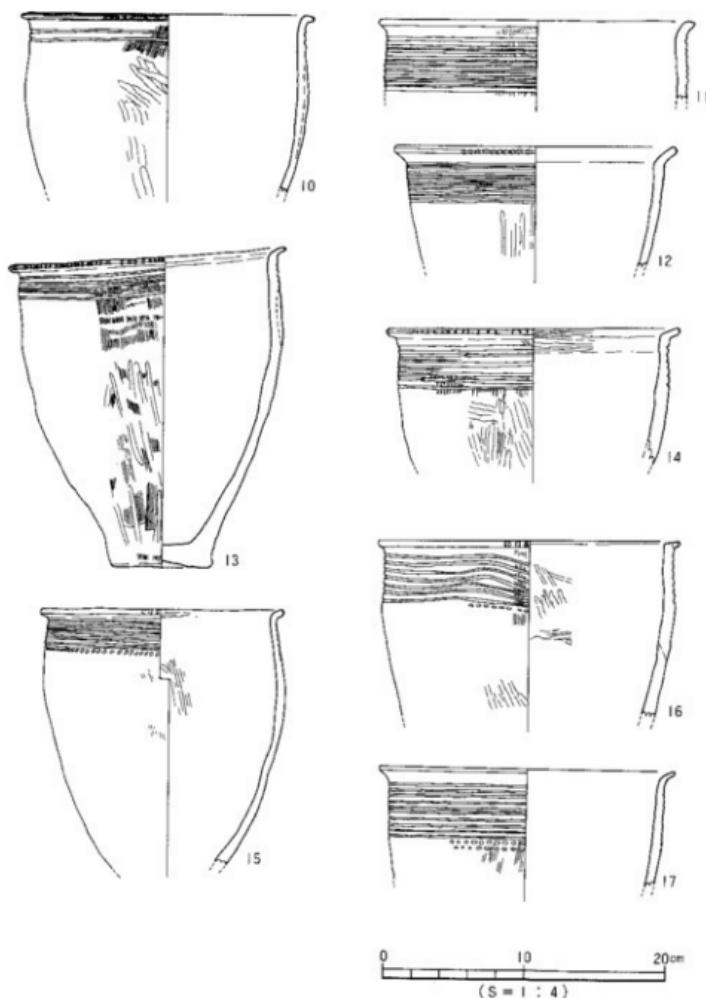
2) 貼り付けにより口縁部を形成するものである(第44~47図)。

中型品(口径17~24cm、36~44) 36~42は、断面三角形の粘土紐を貼り付け口縁部形成するものである。胴部には張りをもち、直口縁を呈している。36・37は口縁端部を欠損しており、他のものは口縁端面には刻目を施さないことを共通とする。43と44は口縁部の形状が異なるものである。43は、丸みのある方形を呈する粘土紐により口縁部が形成される。胴部にはヘラ描き沈線文が3条施され、口縁端面は刻目を施さない。44は、器形にヒズミがみられるものである。口縁部は丸みのある扁平な粘土紐で成形される。胴部のヘラ描き沈線文(7条)も堆である。一般的でない器形である。

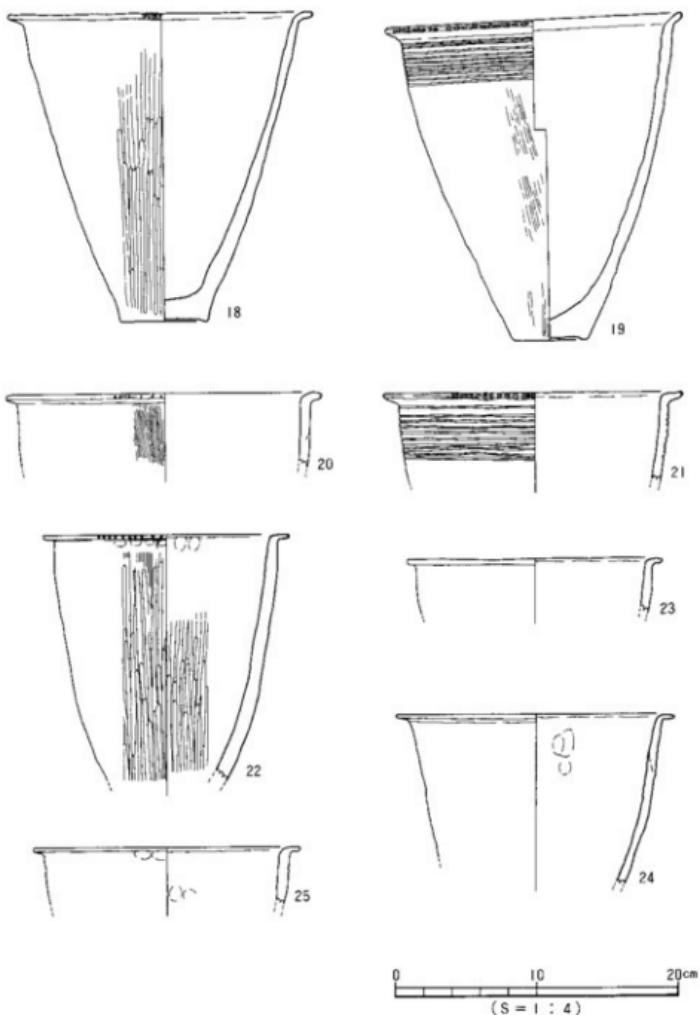
中型品(口径25~30cm未満、45~51) 45・47~51は断面三角形、46はやや方形ぎみの口縁部となるものである。47~51は胴部に5~8条のヘラ描き沈線文をもち、51は2条1組の工具による山形文と竹管文を施す。

大型品(口径30cm以上、52~54) 52~54はやや方形に近い断面形態を呈するものである。52・53は、口縁端面に刻目を施し、胴部にもヘラ描き沈線文1~6条と刺突文を施す。53では、口縁部上面に2条1組の工具による山形文が施される。なお、53の胴部に一部ではあるがタテ方向のヘラ描き沈線文が3条看取される。これは、加飾として用いられたものであるかは判断しがたいものである。54は無文で、中型品46に形態、調整とも類似するものである。

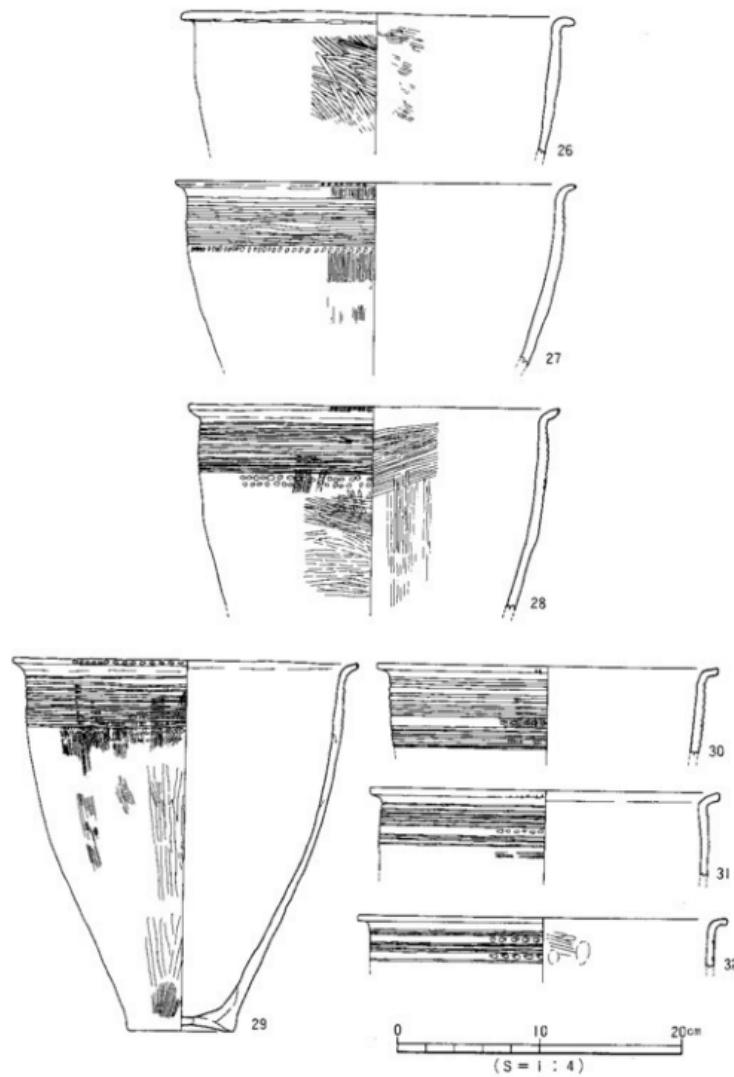
その他(小破片、55~57) 55~57は小破片にて、口径が推定しがたいものである。いず



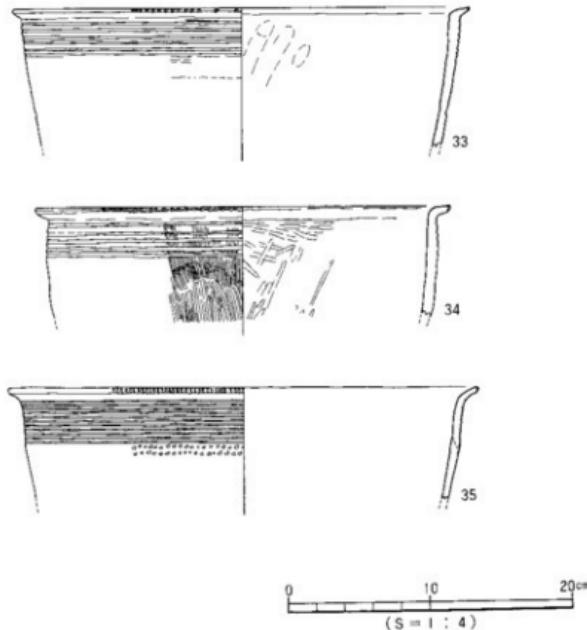
第40図 S D I 出土遺物実測図(2)



第41図 SDI 出土遺物実測図(3)



第42図 SDI 出土遺物実測図(4)

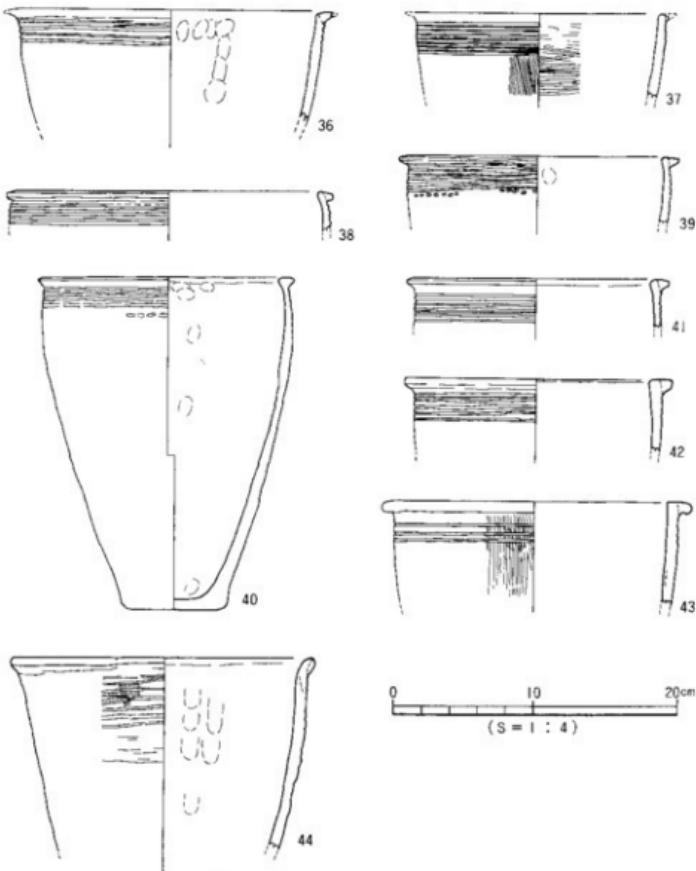


第43図 SDI 出土遺物実測図(5)

れも中型品以上の口径をもつものと考えられる。55は沈線文が5条施される。56は大きな粘土紐を用いるもので、口縁部上面の傾斜が強い。57は無文で、口縁下部は指押しの痕が顯著に残る。

3) 直口口縁部の下位に粘土紐を貼り付けるものである（第47図）。

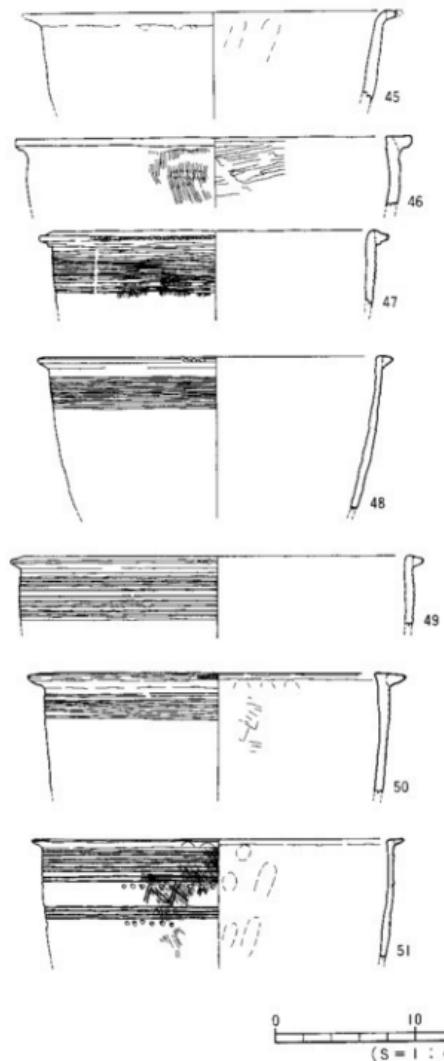
58～61は、膨らみのある胴部をもつものである。58～60は凸帶上に刻目を施す。61は磨滅しているが、顯著な刻目は看取されない。胴部は、58・59は無文で、60・61はヘラ描き沈線文と刺突文を施す。58～61は、口径に対し器高がやや低い器形態を呈するようである。62・63は小破片である。62は、扁平で小さい凸帶を貼り付けたものである。63は、わずかに外反する口縁部に、扁平な凸帶を貼り付けるもので、凸帶上には大きい刻目を施す。63は、古い形態を呈するものである。



第44図 SDI 出土遺物実測図(6)

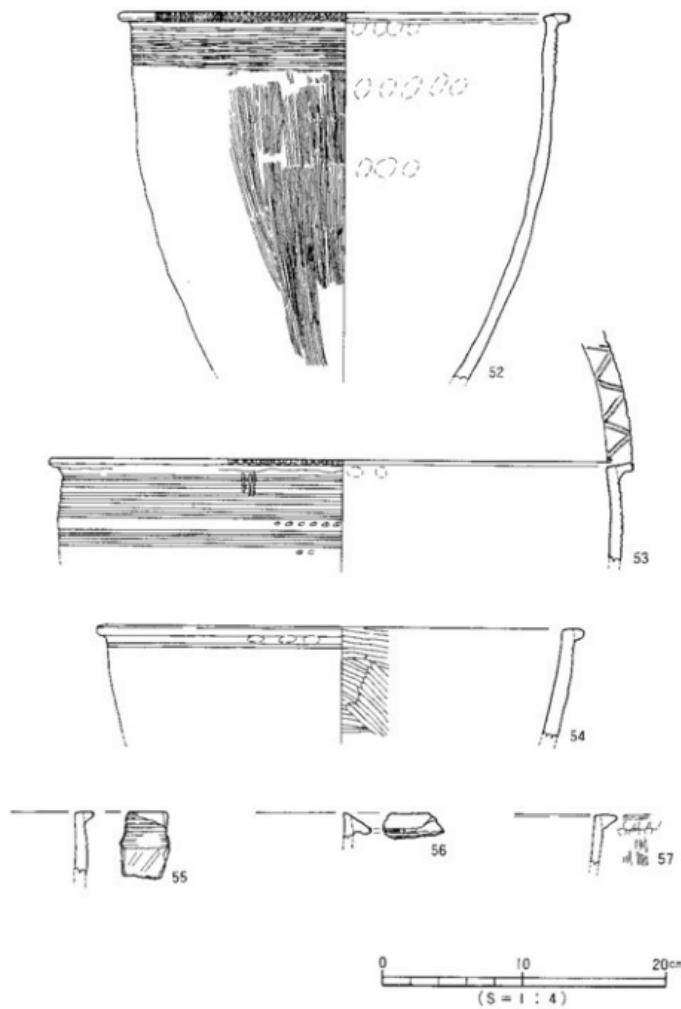
胸部 (64) 64は小破片である。有段となる胸部形態を呈するもので、段上部に刻目を施す。古い形態のものである。

底部 (65~70) 65~67は底平ないしわざかに上がる底部となるものである。出土品の多くのものがこの形態をもつ。68~70は出土数が極めて少ないので、68は厚い底部、69は半円形に凹む底部、70は上げ底となるものである。70はやや新しい形態を呈するものである。

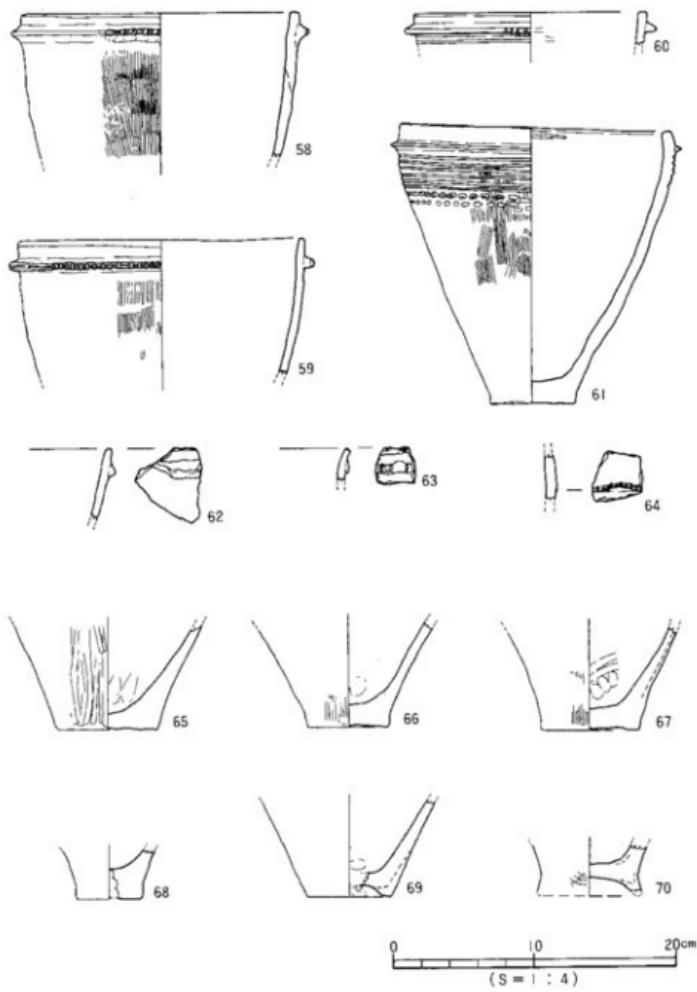


0 10 20cm
(S = 1 : 4)

第45図 SDI 出土遺物実測図(7)



第46図 SDI 出土遺物実測図(8)



第47図 SDI 出土遺物実測図(9)

(3) 壺形土器 (71~120)

壺形土器は、口頸部の形状により分類される。

1) 短い口頸部をもつものである (第48図、71~73)。

71は完形品である。球形の胴部に、大きく厚い底部をもつ。短い頸部は、内側では直立する。72は器壁の厚い口頸部で、口縁端面に刻目を施す。73は口径及び胴部径が広いものである。肩部が張るものと思われる。

2) 筒状で、やや長い頸部をもつものである (第48図、74~79)。

74・75は内傾する頸部をもつものである。75は完形品で、厚い大きい底部に、肩部の張る胴部をもつ。76~79は、直立ないし外傾する頸部をもつものである。77は口縁端部はわずかに欠損し、磨減が著しい光存品である。厚く大きい平底に、肩部がやや張る胴部をもつものである。78・79は口縁端面に1条の沈線文と、78は端面全面に刻目、79は下半部に刻目を施すものである。

3) 長頸で、上外法に大きく開く口頸部をもつものである (第49図、80~88)。

81~84・86・87は、口縁内面に貼り付け凸帯をもつものである。81は口縁端部を欠損する。頸部中位にヘラ描き沈線文を2条施す。82は小破片である。口縁端部に刻目をもつ。83は凸帯上に刻目を施す。84は口縁上端部を欠損する。端面下半には沈線文1条が施される。内面凸帯は幅広で、ナデにより凹みをもつ。85は小破片である。口縁上端部と下端部は刻目が施される。87は口縁端面にヨコ沈線文の後、羽状文を施す。

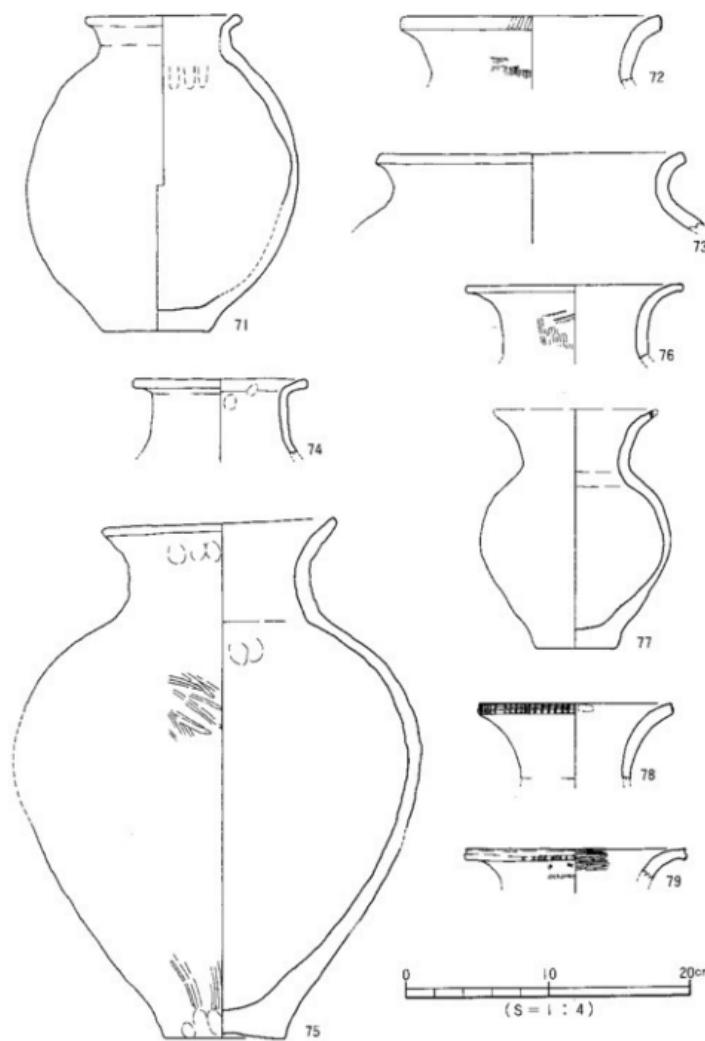
80・88は異形品で、80は口縁端部の器壁がやや厚く、下端部に刻目を施す。頸部にはヘラ描き沈線文と平面形が三角形となる刺突文を施す。88は広口の口縁となるもので、器形は不明である。

4) 無頸ないし直口壺 (第49図、89・90)

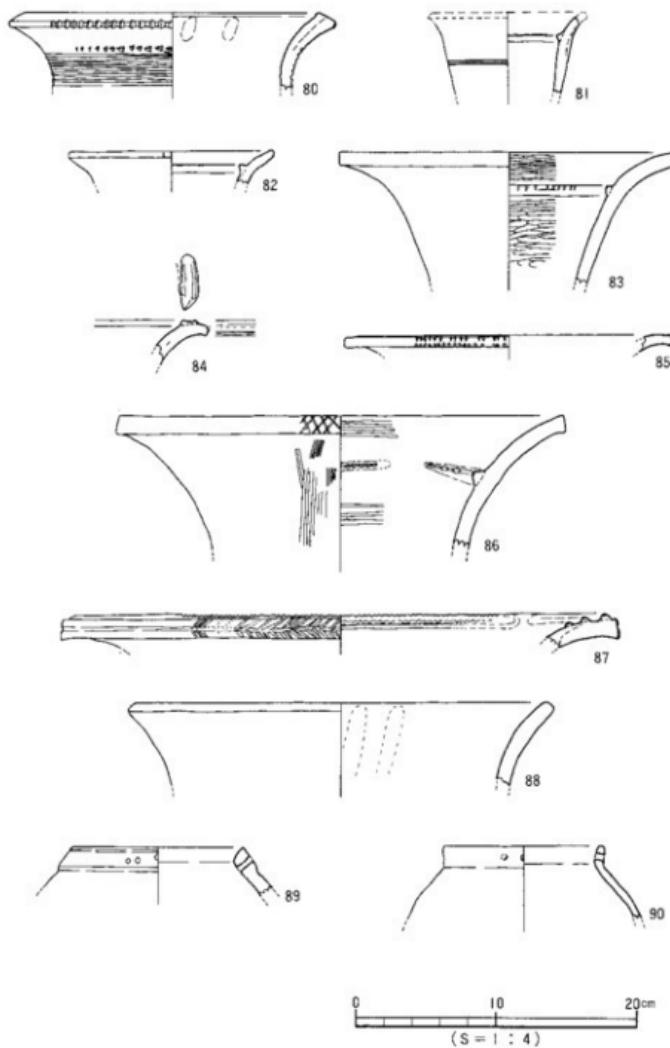
89は無頸壺である。器壁が厚く、焼成前の円孔をもつ。90は直口口縁壺である。口縁部には焼成前の円孔をもつ。

壺形土器胴部片 (第50・51図、91~106)

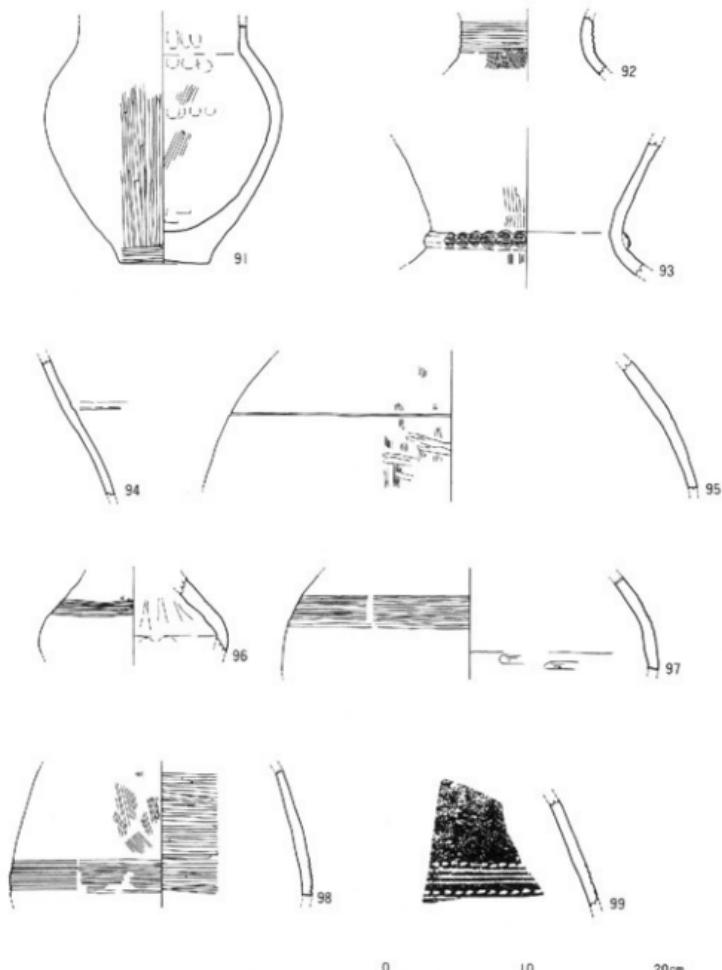
91は小型品で、口頸部を欠損する。直立する頸部下半に、肩部が張る胴部、厚く大きい平底をもつ。92は頸部片で、ヘラ描き沈線文を6条以上施す。93は外傾する長い頸部をもつものである。頸胴部境に凸帯をもつ。凸帯上には指頭押圧が施され、かつ押圧文中に上下二段の刺突文を施す。94は段状の沈線文を肩部にもつ。95は球形の胴部で、肩部に1条の細い沈線文をもつ。96は小型品で、胴中位は強く張る。肩部には4条のヘラ描き沈線文をもつ。97は肩部に8条のヘラ描き沈線文を施す。98は長胴のもので、最大径部にヘラ描き沈線文を8条施す。99は、98と同形態を呈するもので、ヘラ描き沈線文帶の上下に刺突文を施す。



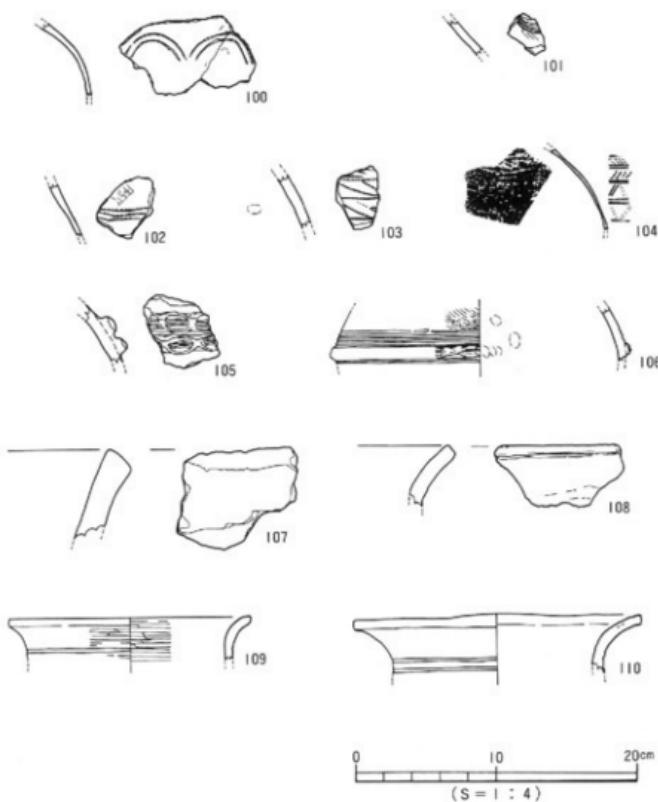
第48図 SD I 出土遺物実測図(10)



第49図 SD I 出土遺物実測図(ii)



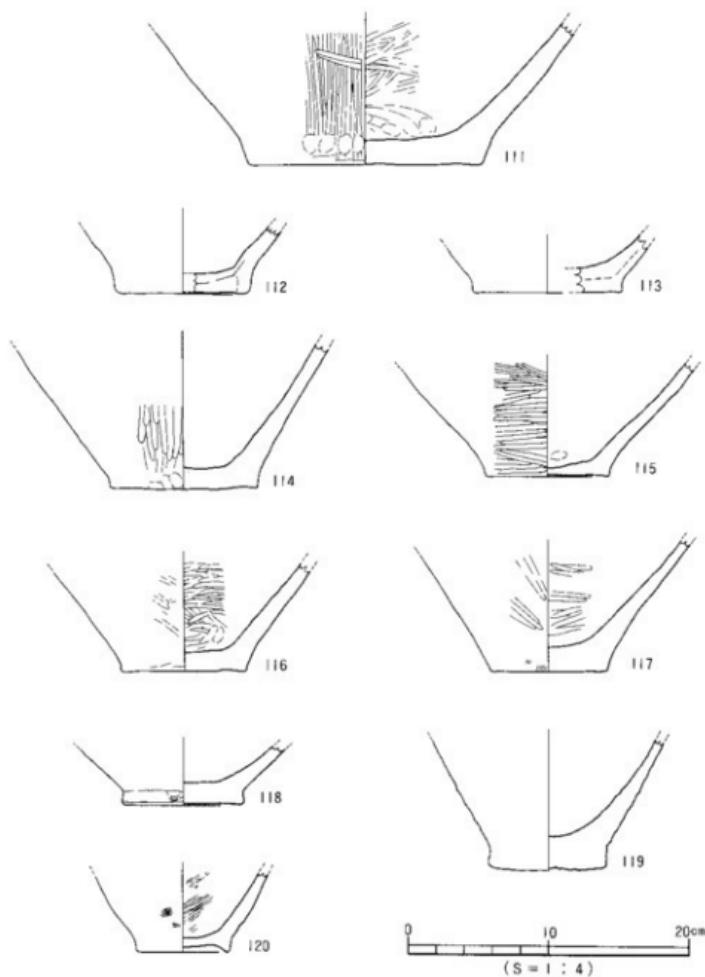
第50図 SD I 出土遺物実測図(2)



第51図 SDI 出土遺物実測図(3)

100～106は小破片である。100はヘラ搔きの弧文が2条1組となり施される。101は3条の弧文が施される。104は貝殻腹縁により、ヨコ方向の5条の直線文を施した後に、同じく貝殻腹縁により「ノ」の字状文と山形文が施される。

105・106は貼り付け凸帯に、指頭押圧後に刺突文を施すものである。105は凸帯が2条であるのか、幅広い1条の凸帯であるのかが判断しがたいものである。106は凸帯上下にヘラ搔き沈線文を施す。



第52図 SDI 出土遺物実測図(14)

107～110は古い形態のものである。107・108は大型品の口縁部片である。107は器壁が厚く、108は薄い。109・110は中型品の口縁部片である。109は磨きが丁寧で、ヘラ描き沈線文を1条以上施す。110はヘラ描き沈線文を2条以上施すものである。

底部（第52図、111～120）

111は大型品、112～119は中型品、120は小型品の底部片である。大きく、やや厚い平底のものがほとんどである。118や119のように、立ち上がりが「ハ」の字状を見するものは稀である。さらに120のように顕著な上げ底のものは1点に限られる。

（4）鉢形土器（第53図、121～131）

折り曲げ口縁のもの（121～123）と直口口縁のもの（124～129）がある。折り曲げのものは中・大型品がみられ、胴部の張りが弱いものである。121には、細いヘラ描き沈線文が1条ある。直口口縁のものは小型品にみられる。口縁端部が面となるもの（124～126）と、丸みをもつものの（127）がある。128・129は、焼成前の円孔が2ヶ1組で施されるものである。130・131は鉢形土器の底部と思われるものである。厚い平底で、131では大きな底部となる。

（5）所謂「コシキ」用の土器（第53図、132～134）

132・133は壺型土器の底部片と思われるものを、焼成後に穿孔したものである。134は蓋形土器からの転用品である。

（6）蓋形土器（第54図、135～140）

135・136・138は、慶用の蓋形土器と思われる。135は完形品である。天上は高く、やや膨らみをもつ体部である。138は、体部上半の膨らみより慶用の蓋形土器のつまみ部と考えたものである。

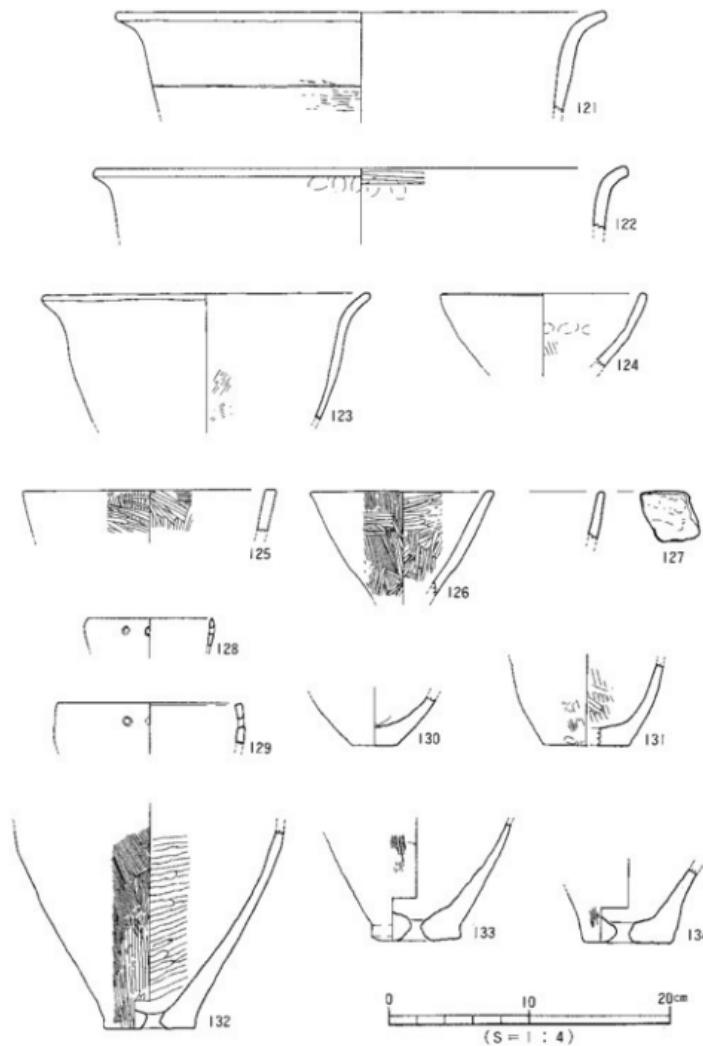
135～138は、壺ないし鉢用の蓋形土器である。137は器壁が厚く、煤の付着がなく、135や138とは器形・調整が異なる蓋形土器である。

139・140は形態状、蓋形土器の小型品を考えたものである。天上部は厚く、ゆるやかに開く体部をもつ。140はミニチュア的要素がうかがえるものである。

（7）小型品（第54図、141～143）

141～143はミニチュア品である。141は底部小片で、小さい平底をもつものである。142は、壺ないし壺のミニチュア品が考えられる。143はくびれの上げ底である。くびれの上げ底を呈する器形はこの時期存在しない。よって、ミニチュア独自の器形か。

（8）その他（第54図、144）

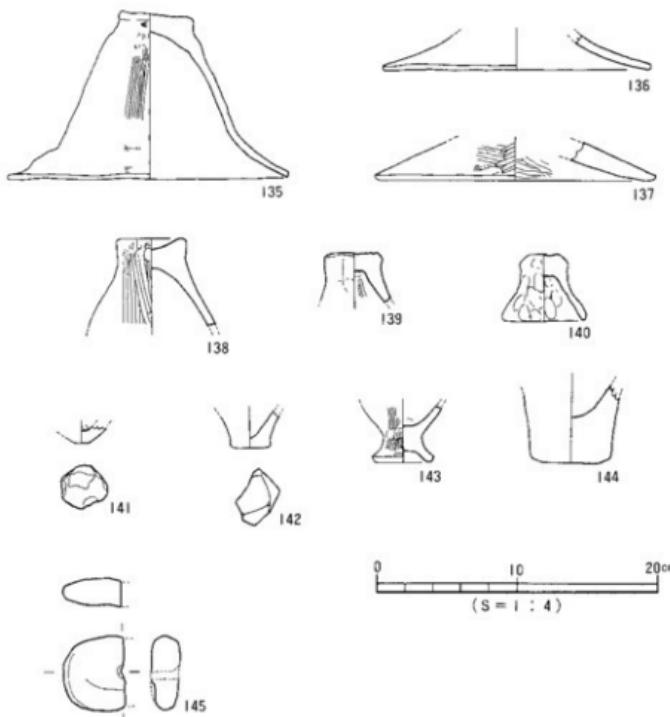


第53図 SD I 出土遺物実測図(15)

144は、器壁が著しく厚い平底の底部片である。器種は判断できない。焼成を受け、胎土も他の土器とは異なり、黒色で光る鉱物を含む。

(9) 土錘 (第54図、145)

145は半完存の土錘である。隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形は球形を呈さず、扁平なものとなる。焼成前の孔がある。4.2×5.3cm、重さ51.85gをはかる。



第54図 SD I 出土遺物実測図(6)

(10) 石 器

本遺跡からは弥生時代前期後半に時期比定される石器群が出土した。これらの石器は剥片石器と石核石器に大別できる。さらに、部門に応じてみると、狩獵具・収穫具・木工用斧・石器製作具等がみられる。狩獵具には打製石鎌・投弾・収穫具にはスクレイバー・石庖丁、木工用斧には伐採斧・加工斧が出土している。多器種にわたるこれらの石器の材質は、剥片石器にはサヌカイト・流紋岩質安山岩、石核石器には結晶片岩・安山岩・凝灰岩等である。

製品以外には未製品・石器素材・剥片が出土しており、これらの遺物は当地域における弥生時代前期の石器生産を考える上での基準資料となるものである。

(1) 石鎌（第55図 146・147、図版33）

2点出土した。いずれもサヌカイト製の打製品である。小形品と大形品が存在する。146は小形品で、片脚が破損する。平面形態が正三角形を呈す。基部の抉りはやや浅く、初剥離面は両面に残置している。長さ2.1cm、重量0.7gである。147は大形品で、先端が大きく破損している。平面形態は二等辺三角形を呈すると考えられる。基部の抉りは浅く、初剥離面が両面に残置し、とくにb面に広く認められる。破損品ながら重量2.1gをはかる。

(2) スクレイバー（第55図 148～150、図版33）

3点出土した。サヌカイト製と流紋岩質安山岩製が存在し、前者は小形品、後者は大形品である。148は小形品である。両側部を欠く破損品である。比較的厚みのある横長剥片を素材とし、両面調整によりやや内湾する刃部を作出する。149・150は大形品である。149は横長剥片を素材とする。刃部は片面調整により作出され、やや不整形を呈す。b面の刃部に使用による刃こぼれ状の剥離が部分的ではあるが認められる。本資料で注目されるのは、刃部の両面にコーングロスが顕著に認められることである。a面は細部調整上端の上に幅3～8mm内でコーングロスが付着する。150は右半分を大きく欠く破損品である。a面には自然面を残置し、上端には階段状剥離が施されプランティング加工を認めることができる。両面調整による刃部は大きく破損するが外湾するものと考えられる。

(3) 石庖丁（第56図 151・152、図版33）

製品と未製品が出土した。151は緑色片岩を素材とする製品である。右半分を大きく欠く破損品である。研磨は両面ともに丁寧になされている。平面形態は杏仁形あるいは直線刃半月形であると考えられる。遺存部には穿孔や穿孔のための敲打は認められない。152は赤麻石英片岩を素材とする未製品である。敲打段階で製作が中断されたものである。a面には自然面が、b面には素材面が広く残置していることから、自然礫を素材とし片面の自然面を除去した後、敲打に移行して形態をおおまかに整えていることが理解される。遺存形態から直線刃を指向していたことが想定される。

(4) 太型蛤刃石斧（第56図 153、図版34）

1点出土した。基部は破損しており、遺存部の裏面は剥落している。図の右側には敲打痕

と研磨痕が顕著に観察され、敲打後に研磨が施されている。下部には不明瞭ながら鏽が観察されることから、本資料は製作終了（完成）後、使用している段階で破損し、廃棄されたものと考えられる。

(5) 扇平片刃石斧（第56図 154・155、図版34）

製品と未製品が出土した。154は白色凝灰岩を素材とする製品である。下半部を大きく破損するため刀部形態は不明である。基部は弱円錐状を呈している。研磨は比較的丁寧におこなわれているものの身彫れ状を呈しており、とりわけ両側面に認められる。155は片岩を素材とする未製品である。板状の自然礫が採用されている。刃部に研磨がわずかに認められるものの、鏽は明瞭ではない。

(6) 投擲（第57図 156～162、図版35）

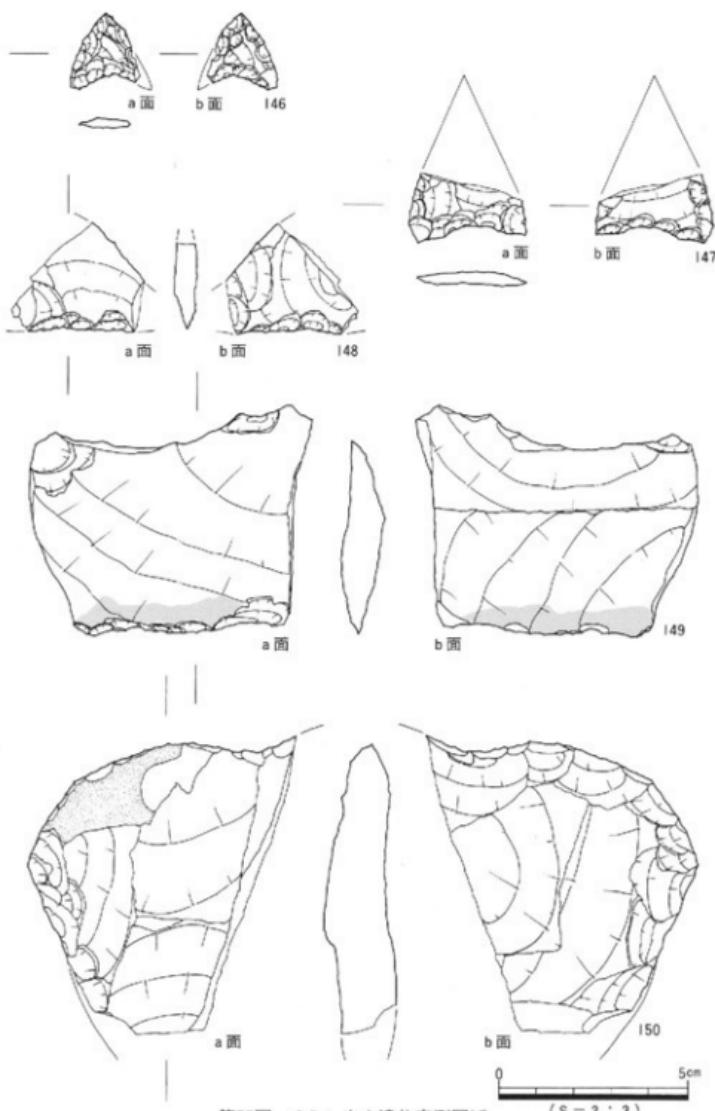
7点出土した。平面形態が楕円形、横断面形態が楕円形を呈する自然礫を素材として用いている。小形品と大形品が存在する。159のみが砂岩で他は安山岩系である。156～160は小形品である。重量は24～45gに分布しており、比較的まとまっている。161・162は大形品である。重量はいずれも200gをこえる。大形品と小形品との重量差が顕著であることは、この器種が個体毎に使用されたと仮定すれば、重量によって使い分けがなされた可能性がある。すなわち、重量と機能が密接に関係していることが推察されるのである。

(7) 敲石（第57図 163～165、図版35）

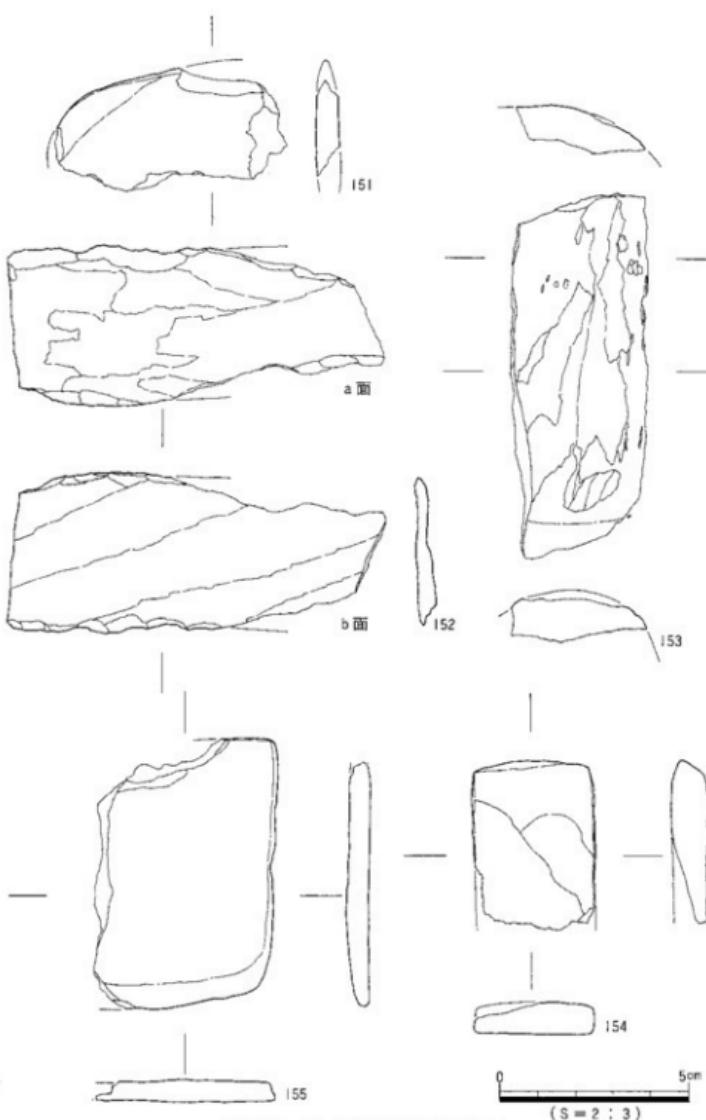
3点出土した。163・164は棒状を呈する完成品である。小形品で大形品が存在する。163は両側面と下端面を機能面として使用している。器面の凹凸が顕著であることから、使用頻度の高さが窺える。法量は、長さ8.5cm、幅2.7cm、厚さ2.0cm、重量69.6gである。164は両端面を機能面として使用している。両端面には長さ1～2cmの剥落（敲打痕）が観察される。そしてその使用痕は端面前面には及ばず、a面側に片寄って認められる。これは、本資料の使用法を推定する材料となろう。165は上半部を大きく欠く破損品である。横断面形態は楕円形を呈し、平面形態はラグビーボール状を呈するものと考えられる。使用痕としてやや大きな剥落が認められる。受熱により部分的に赤化、黒化している。なお、本資料と同一個体と思われる石器が出土しているものの、接合はできない。これら3点の石器は石器製作、すなわち粗削・打裂・敲打のいずれかの工程で用いられたものであると考えられる。

(8) 台石（第57図 166～168、図版36）

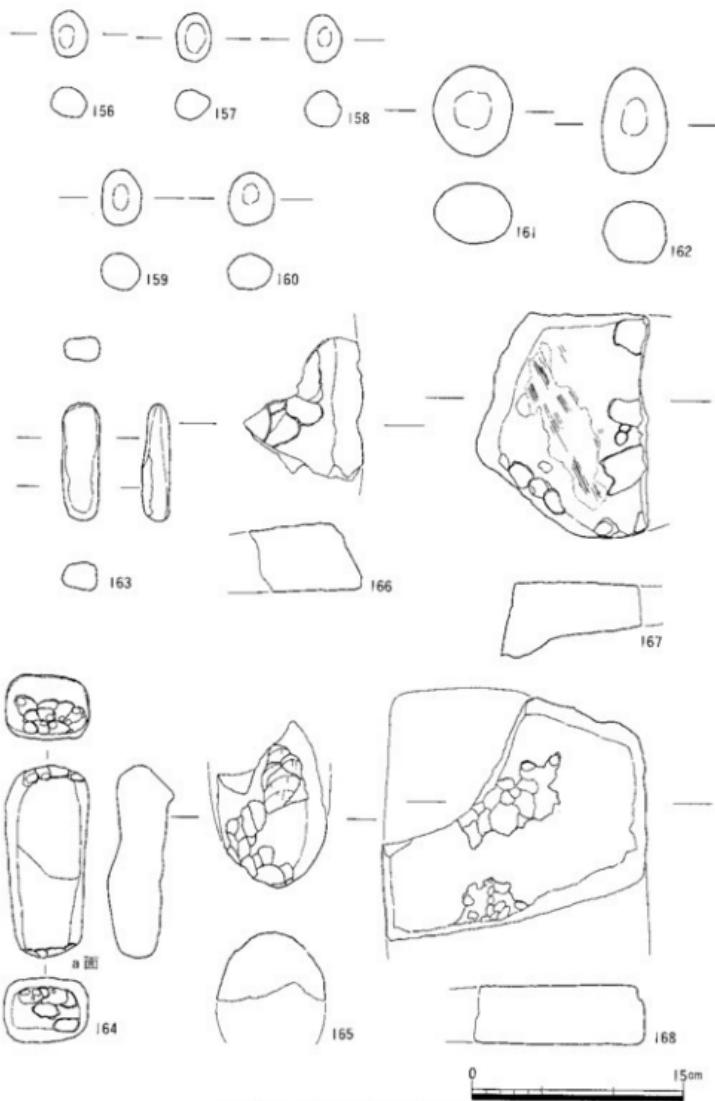
3点出土した。いずれも破損しており本来の形態をとどめていない。ただし、167・168は残存形態から隅丸長方形を呈していたと思われる。166は角閃安山岩製。器面には大きな剝離が認められる。167は角閃安山岩製。器面に敲打痕・擦痕が認められ、後者は器面中央に、前者がその周囲に認められる。これらの使用痕の観察より、本資料は器面中央では磨くような行為が、その周囲では敲く行為が行われたことが推定される。168は黒雲母安山岩製。片面に敲打痕とみられる凹凸部が観察される。この使用痕は片面全面に及ばず、器面中央に二箇所



第55図 SD I 出土遺物実測図(1)



第56図 SDI 出土遺物実測図(8)



第57図 SD I 出土遺物実測図(1)

(S = 1 : 4)

みられ、いずれもその使用痕が認められる部分で破損している。

(9) その他の石製品

サヌカイト製の剥片・碎片が出土している。自然面の残置するものが存在しており、産出地から自然礫あるいはそれに近い状態で搬入し、剥片石器を製作していたことが考えられる。

森院烏山遺跡出土の石器群は弥生時代前期後半に比定される。該期の資料は、これまで松山平野においては数少なく、その様相について不明な部分が多くあった。今回の資料はそれを補い、且つ当平野における弥生石器研究の基準資料となるものである。そこで、若干の考察をおこなうこととまとめたい。まず、当時の生業活動を反映していると考えられる石器組成に着目したい。本遺跡から出土した石器は、狩猟具・収穫具・木工用斧・剥片加工工具・石器製作用具に大別できる。狩猟具と収穫具の存在は、前時代以来伝統的な生業に加え水稻農耕という食料生産のシステムが導入されていたことを示唆する。狩猟具には石鉤・投弾がある。石鉤はすべて打製品であり、これは縄文時代以来の伝統的な石器のひとつである。一方、投弾は当平野における報告例としては初めてである。遺跡の地理的な環境及び出土量、そして重量分布を考え合わせ本資料（第57図 156～162）を投弾と認定した。これらの器種には小形品と大形品が存在しており、これは対象物に対して使い分けがなされたことを推定させるものである。収穫具にはスクレイバー・石庖丁がある。縄文時代以来の伝統的な石器と大陸系磨製石器が共存していることは、水稻農耕という新たな生業を導入するにあたり、石製道具のすべてが前者から後者に置き換わったのではないことを示している。すなわち、食料生産段階に移行してもなお、機能的に適ていれば縄文時代以来の伝統的な石器は消滅することなく製作・使用されたのである。木工用斧には伐採斧・加工斧がある。これは、可耕地を拡張することと密接に関連する器種であり、本遺跡で出土したことは可耕地を求める土地開拓をおこなった当時の人々の積極的な行動がうかがわれる。石器製作用具には、敲石・台石がある。また、石庖丁・加工斧の未製品の存在と考え合わせると本遺跡で大陸系磨製石器を製作していたことが明らかであろう。そして、サヌカイト製剥片の出土から縄文時代以来の伝統的な石器も製作していたことが理解されるのである。

次に石材について検討する。サヌカイトの正確な産出地は明らかではないものの、本石材は、大湊遺跡（縄文時代晩期後半）からは大量に出土しており、サヌカイトの使用は弥生時代からのことではない。むしろ、前時代からの伝統的な石材であることが想定される。緑色片岩は本平野で採取される、在地的な石材である。ここで注目したいのは、スクレイバーに用いられた流紋岩質安山岩と扁平片刃石斧に用いられた白色凝灰岩である。両者は、当平野においてこれまであまり出土例のない石材であり、当地で産出する在地的な石材なのか、他地域で産出したものを搬入したかについては、今後の類似資料の増加を待って再び検討を加える形で課題としておきたい。

（加島）

4. 結 び

本調査地は、第2次世界大戦前後の昭和前半代に造成工事が実施されており、遺跡の多くの部分は消失したことが調査によっても明確となった。調査では、表土を除去すると基盤面となり、遺構の基底部が検出されるにとどまった。よって、深度の浅い遺構については、全てが消失しており、遺跡本来の景観を復元することは不可能であると判断された。

調査により検出された遺構は、弥生時代前期末に比定される遺物を出土した溝（S D 1）1条に限られた。S D 1は、丘陵の中腹で、標高10mの等高線にはば並行して検出されたことより、同丘陵を巡る溝になる可能性が高く、環濠集落の溝と考えられるものである（註1）。また、溝からは、完形品を含む多くの土器と石器が出土している。これ等は、弥生時代前期末の上器編年や石器組成等の研究に対し、良好な資料となり得るものであろう。出土土器では、器種構成や（完形品の出土より）当該期の器形が明らかとなる点で貴重な資料といえる。石器では、出土量は多いとはいひ難いが、未成品や製作過程で生まれる剝片、使用痕が看取される打製刃器が出土していることで、同時期の石器の様相を知る上で貴重な資料といえるだろう。

松山平野内で検出された環濠集落なし、集落内外に存在する弥生時代の溝は、前期末の米住Ⅵ遺跡第1・2環濠、後期の福音小学校構内遺跡 S D 3等が知られるところであり、検出事例は少ないと見える。そして本事例も他と同じく、溝の一部を検出したにすぎず、集落に伴う溝の構造については、資料数や資料内容に量的不足があり、周辺地域の調査に期待するところは大きい。

本遺跡は、稀少かつ良好な分析資料を提示したこと、松山平野の重要な遺跡として評価されうるものと考える。

〔註〕

- (1) 平成5年度、財愛媛県埋蔵文化財調査センターは、本調査地が立地する低丘陵（全面）を調査した。その結果、本調査検出のS D 1が丘陵を回顧することが確認されている。調査担当作田耕一氏の御教示に感謝いたします。

遺物観察表一例（梅木謙一・山下満佐子）

- (1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。
 (2) 各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4)多→「1～4 mmの大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表24 SD1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外蓋) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(13.0) 残高 5.0	口標準に割目。無文。	⑪ココナテ ⑫ハケ(7本/cm)	マツツ	黄褐色 淡黃褐色	石(1～4) 金 ◎		
2	甕	口径(17.1) 残高 6.7	ヘラ沈縞文8条+斜突文。 口縁端に割目。	⑬トハケ(6～7本/cm) ⑭ヘラミガキ	ナテ ヘラミガキ	粗灰褐色 暗灰褐色	石(1～4) 金 ◎	板	25
3	甕	口径(19.8) 残高 7.3	ヘラ沈縞文2条。口縁端に 割目。	ヨコナテ	⑮ヨコナテ ⑯ナテ	赤褐色 赤褐色	石(1～4) 金 ○		
4	甕	口径(18.0) 残高 4.35	口縁端に割目。無文。	ハケ(マツツ)	マツツ	乳白色 乳灰褐色	石(1～4) 金 ◎		
5	甕	口径(20.5) 残高 3.8	口縁端に割目。無文。	ナテ	ナテ	暗褐色 暗褐色	石(1) 金 ◎		
6	甕	残高 3.1	口縁端に割目。無文。	マツツ	ナテ(マツツ)	暗黃茶色 淡黃褐色	石(1～4) 金 ◎		
7	甕	残高 6.1	無文。	⑪ヨコナテ ⑫マツツ(ハケ)	マツツ	暗淡黃褐色 暗淡黃褐色	石(1～4) 金 ○		
8	甕	口径(18.0) 残高 7.3	ヘラ沈縞文4条。口縁端に 割目。	⑬ナテ ⑭ハケ(6本/cm)	マツツ	灰黃茶色 黃褐色	石(1～4) 金 ◎		
9	甕	口径(22.8) 残高 9.0	ヘラ沈縞文6条。口縁端に 割目。	マツツ	マツツ	灰黃色 灰褐色	石(1～4) 金 ○		

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 土	備考	回版
				外 面	内 面				
10	甕	口径 20.8 残高 12.7	ヘラ沈縞文 2 条。口縁部に 削目。	⑪ヨコナテ ⑫ヘラミガキ	ナデ	明赤褐色 明褐色	石・灰(1~2) ◎	黒斑	25
11	甕	口径(21.4) 残高 5.6	ヘラ沈縞文 10 条。口縁部に 削目。	⑬ハケ→ヨコナテ ⑭ハケ	マメツ	灰黄褐色 黄褐色	石・灰(1~3) ◎		
12	甕	口径(19.7) 残高 8.5	沈縞文 10 条。2 条 1 線の工 具による。口縁部に削目。	⑮ヨコナテ ⑯ヘラミガキ(マメツ)	ナデ(マメツ)	灰黄色 暗灰黄色	石・灰(1~4) ◎	黒斑	
13	甕	口径 20.3 残高 23.7 底径 6.8	上切底。ヘラ沈縞文 5 条。 口縁部に削目。	⑰ヨコナテ ⑱ハケ→ヘラミガキ ⑲ハケ→チホ	⑨ナデ ⑩剥離	褐色 淡茶褐色	石・灰(1~3) ◎	煙	25
14	甕	口径(20.4) 残高 9.7	ヘラ沈縞文 6 条。口縁部に 削目。	⑪ナデ ⑫ハケ ⑬ハケ→ヘラミガキ	⑭ヨコヘラミガキ ⑮ナデ	暗褐色 褐色	石・灰(1~5) ◎		
15	甕	口径(17.2) 残高 18.2	ヘラ沈縞文 7 条 + 刻文。 口縁部に削目。	マメツ(ヘラミガキ)	マメツ(ヘラミガキ)	濃赤褐色 淡茶褐色	石・灰(2~4) △		25
16	甕	口径 20.4 残高 12.5	ヘラ沈縞文 7 条 + 刻文。 口縁部に削目。	④⑤ヘラ→ナデ ⑥⑦ヘラミガキ	ヘラミガキ	濃茶褐色 淡茶褐色	石・灰(2~4) ◎		25
17	甕	口径(21.0) 残高 7.9	ヘラ沈縞文 10 条 + 刻文 2 例。	⑧⑨マメツ ⑩⑪ハケ(マメツ)	マメツ	粉灰褐色 乳白褐色	石・灰(1~5) ○		
18	甕	口径 21.6 残高 21.75 底径 6.1	平底。無文。	ヘラミガキ	マメツ(ナデ)	褐色 灰褐色	石・灰(1~5) ○	黒斑	26
19	甕	口径 20.4 残高 23.2 底径 4.9	わずかに上切底。ヘラ沈縞 文 10 条。口縁部に削目。	⑫⑬ナデ ⑭⑮ヘラ・ヨコナテ ⑯⑰ヘラミガキ	剥離	淡赤褐色 淡褐色	石(2~5) △	煙	26
20	甕	口径(22.2) 残高 5.2	口縁部に削目。無文。	⑪ヨコナテ ⑫ハケ(7本/1cm)→ナデ	マメツ	黄褐色 彩色剥離	石・灰(1~5) ◎		
21	甕	口径(21.2) 残高 6.4	ヘラ沈縞文 10 条。口縁部に 削目。	ナデ	ナデ	淡灰褐色 淡灰白色	石(2~3) ○		
22	甕	口径(17.9) 残高 17.4	口縁部に削目。無文。沿壁 は厚い。	ハケ→ヘラミガキ 剥離痕	⑫ヨコナテ, 剥離痕 ⑬ヘラミガキ	褐色 灰黃茶色	石・灰(1~5) ◎		
23	甕	口径(20.9) 残高 7.2	無文。口縁部に削目。	マメツ	ヘラミガキ(マメツ) 剥離痕	黄褐色 茶褐色	石・灰(1~4) ◎		
24	甕	口径(19.6) 残高 4.05	無文。口縁部に削目。	マメツ(ヘラミガキ) 剥離痕	マメツ 剥離痕	暗灰褐色 淡灰褐色	石・灰(1~5) ◎		
25	甕	口径 19.7 残高 12.1	無文。	⑪ナデ ⑫マメツ	ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・灰(1~5) ◎		
26	甕	口径(7.6) 残高 9.5	無文。基盤が厚い。	⑬ヨコナテ ⑭ハケ→ヘラミガキ	⑮ヨコナテ ⑯ヘラミガキ(マメツ)	灰黃茶色 黃褐色	石・灰(1~5) ◎		

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外裏) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
27	甕	口径(28.3) 残高 13.0	ヘラ沈縞文 8 条 + 刻突文。 口縁に削目。	ハケ	マメツ	灰系褐色 淡黄灰色	石・灰(1~5) ④		
28	甕	口径(25.6) 残高 14.4	ヘラ沈縞文 8 条 + 刻突文 2 列。口縁端に削目。	⑪ナデ ⑫シケ(3本/cm) ⑬ヘラミガキ	⑪ヨコナデ ⑫ヨコヘラミガキ ⑬ヘラミガキ	暗赤褐色 淡褐色	石・灰(1) △		26
29	甕	口径 24.3 基高 26.5 底径 7.4	上付窓。ヘラ沈縞文 10 条 + 刻突文 2 列。口縁端に削目。	⑪ナデ ⑫ヘラ(7~8本/cm) ⑬ヘラミガキ ⑭ヨコナデ	⑪ナデ ⑭刻縞	褐色 黑褐色	石(1~4) ④	媒	26
30	甕	口径(24.1) 残高 6.0	ヘラ沈縞文 6 条 + 刻突文 + 沈縞文 5 条以上。口縁端に 削目。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ		乳黃褐色 乳白黃褐色	石・灰(1~4) ④		
31	甕	口径(24.8) 残高 6.0	ヘラ沈縞文 6 条 + 刻突文 + 沈縞文 5 条以上。	⑪ヨコナデ ⑫マメツ	ナデ	灰黄色 灰黃色	石・灰(1~5) △		
32	甕	口径(26.2) 残高 3.4	ヘラ沈縞文 2 条 + 刻突文 + 沈縞文 3 条 + 刻突文 + 沈縞 文 1 条以上。	マメツ	⑪マメツ ⑫ヘラミガキ、暗褐色	暗赤褐色 灰黃褐色	石・灰(1~5) ④		
33	甕	口径(22.4) 残高 9.9	ヘラ沈縞文 6 条以上。口縁 端に削目。	⑪ナデ ⑭刻縞	ナデ	黑色 淡灰褐色	石・灰(1~5) △	媒	
34	甕	口径(29.3) 残高 7.0	ヘラ沈縞文 5 条。口縁端に 削目。	ハケ	⑪ヨコナデ ⑫ヘラミガキ	淡赤褐色 淡黃白色	石(1~2) △	媒	
35	甕	口径(33.2) 残高 8.0	ヘラ沈縞文 10 条 + 刻突文 2 列。口縁端に削目。	⑪ヨコナデ ⑫マメツ	マメツ	黃褐色 乳褐色	石・灰(1~5) ④		
36	甕	口径(21.6) 残高 8.2	ヘラ沈縞文 4 条。	ナデ	⑪ナデ ⑫マメツ	赤褐色 黃褐色	石・灰(1~5) △		
37	甕	口径(16.6) 残高 5.9	ヘラ沈縞文 8 条。	ハケ(7本/cm)	⑪ヨコナデ ⑫ヘラミガキ	黃褐色 淡黃褐色	石・灰(1~4) ④	媒	
38	甕	口径(21.0) 残高 2.8	ヘラ沈縞文 6 条以上。	ナデ	ヨコナデ	灰系褐色 黑褐色	石・灰(1~5) 金 ○		
39	甕	口径(19.0) 残高 4.8	ヘラ沈縞文 6 条。口縁端に 削目。	ナデ(マメツ)	マメツ 指地頭	黑褐色 茶色	石(1~4) 金 ○		
40	甕	口径(17.85) 基高 23.6 底径 6.1	厚い平底。ヘラ沈縞文 5 条 + 刻突文。	マメツ	⑪ヨコナデ ⑫マメツ ⑬ナデ ⑭墨痕	暗赤褐色 暗黃褐色 暗褐色 墨痕	石・灰(1~5) ○	媒	27
41	甕	口径(18.6) 残高 3.1	ヘラ沈縞文 6 条以上。口縁 端に削目。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡黃褐色	石(2~3) 灰(1~3) △		
42	甕	口径(18.8) 残高 5.1	ヘラ沈縞文 6 条。	マメツ	⑪ヨコナデ(マメツ) ⑫ナデ(マメツ)	淡黑褐色 淡黃白色	石・灰(1~5) △		
43	甕	口径(21.8) 残高 7.3	ヘラ沈縞文 5 条。	⑪⑫ハケ(4本/cm) ⑬⑭ハケ→ナデ	マメツ	乳黃色 乳黃色	石・灰(1~5) ④		27

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外觀) 色調 (内面)	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
44	甕	口径 21.2 残高 15.1	丸い臺平な口縁。ヘラ沈腹 文10条。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ(マメツ)	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	黒色 胡茶褐色	石・表(1-2) 金 ◎		27
45	甕	口径(26.8) 残高 3.6	口縁部を欠損する。無文。	マメツ	マメツ	褐色 淡褐色	石・表(1-2) ◎		
46	甕	口径(14.0) 残高 5.0	器壁が厚い。無文。	⑪ハケ→ナテ ⑫ハケ	ヨコヘラミガキ	淡黃褐色 黑色	石・表(1-2) △	備	
47	甕	口径(22.6) 残高 5.7	ヘラ沈腹文10条。口縁部に 刻印。	ハケ(6本/cm)	マメツ	褐色 淡褐色	石・表(1-2) ◎		
48	甕	口径(26.0) 残高 10.9	ヘラ沈腹文1条+刻文。	ハケ(マメツ) マメツ	⑪ヨコナデ(マメツ) ⑫マメツ	黒茶褐色 淡褐色	石・表(1-2) ○	備	
49	甕	口径(29.3) 残高 5.0	ヘラ沈腹文10条。口縁部に 刻印。	マメツ	⑪ヨコナデ(マメツ) ⑫マメツ	黃灰色 乳白色	石・表(1-4) ○		
50	甕	口径(26.6) 残高 8.4	ヘラ沈腹文5条。口縁部に 刻印。	刻印	刻印(工具痕)	淡黃褐色 明赤褐色	石(1-3) ◎		
51	甕	口径(26.3) 残高 8.4	沈腹文8条+山形文+沈腹 文1条+刻印文。工具は2 点一組。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ	ナデ(マメツ)	乳白色 胡茶褐色	石・表(1-2) 金 ◎		27
52	甕	口径 31.9 残高 25.0	ヘラ沈腹文7条。口縁部に 刻印。	⑪ナデ ⑫ハケ(8-9本/cm)→ナデ	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石・表(1-2) ◎		27
53	甕	口径(41.0) 残高 7.0	ヘラ沈腹文6条+刻印文+ 沈腹文3条+刻印文。口縁 部山形文(2条一組)。	ヨコナデ	マメツ(ナデ)	赤褐色 乳白色	石・表(1-4) ◎		28
54	甕	口径(33.6) 残高 7.75	ヘラ沈腹文1条。	マメツ	ヘラミガキ	淡褐色 淡褐色	石・表(1-2) ◎		28
55	甕	残高 4.5	ヘラ沈腹文1条。	ヘラミガキ	⑪ヨコナデ ⑫ヘラミガキ	乳白色 明乳白色	石・表(1-2) ◎		
56	甕	残高 1.9	ヘラ沈腹文1条以上。口縁 部に刻印。	ナデ	ナデ	淡黃褐色 褐色、淡褐色	石・表(1-4) △		
57	甕	残高 3.7	無文。接合部外縁に看取。 折線模	ハケ→ヨコナデ	マメツ	褐色 灰褐色	石・表(1-2) ◎		28
58	甕	口径(19.6) 残高 10.2	刻目凸唇。口縁部に刻目か。	⑪ナデ ⑫ハケ(5-7本/cm)	ハクリ	淡茶褐色 淡褐色	石・表(1-2) △	備	28
59	甕	口径 20.1 残高 9.7	刻目凸唇。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ(11本/cm)	ハクリ	淡黃褐色 淡白色	石・表(1-2) ◎		28

出土遺物観察表

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・筆文	調査		(外観) 色調 (内面)	土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
60	盃	口径(16.3) 残高 2.3	刻目凸唇。ヘラ沈攢文2条。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ	⑪ヨコナデ ⑫ナダ→ヘラミガキ(マツ)	灰茶褐色 灰茶褐色	石(1~2) ◎		
61	甕	口径 19.0 部高 20.0 底径 6.2	平底。沈攢文2条+割突文2列。比總は2条1粗か。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ	⑪ヘラミガキ ⑫マツツ	灰灰褐色 灰茶色	石(1~2) ◎	複	28
62	甕	残高 5.4	凸唇。	マツツ	マツツ	灰茶褐色 茶褐色	石(1~2) ○		28
63	甕	残高 2.45	刻目凸唇。口縁端に刻目。	マツツ	マツツ	暗灰黄色 黑灰色	●		28
64	甕	残高 3.2	有段、段状に刻目。	ナテ ヨコナデ	ナテ	灰茶色 灰灰褐色	石(1~2) ◎		28
65	甕	底径 7.2 残高 7.4	厚い平底。	ヘラミガキ	マツツ	粒茶褐色 灰灰褐色	石(1~2) ◎		
66	甕	底径 5.5 残高 7.4	わずかに上げ底。	マツツ(ヘラミガキ)	マツツ	明茶褐色 灰茶褐色	石(1~2) ◎	黒斑	
67	甕	底径 7.0 残高 7.3	平底。	ハケ	ナテ 横筋痕	乳茶褐色 灰茶色	石(1~2) ○		
68	甕	底径(4.7) 残高 3.6	厚い平底。	マツツ	マツツ	乳灰色 乳白色	石(1~2) ◎		
69	甕	底径(5.8) 残高 6.9	上げ底。	マツツ	マツツ	系褐色 乳茶色	石(1~2) ◎		
70	甕	残高 5.3	上げ底。	マツツ(ヘラミガキ)	マツツ	乳灰茶色 乳茶褐色	石(1~2) ◎		
71	甕	口径 10.5 器高 22.4 底径 7.4	厚みのある平底。幅かい頭部は直立ぎみに立ち上る。	⑪ヨコナデ ⑫マツツ	⑪ヨコナデ ⑫マツツ	該黄褐色 茶褐色	石(1~2) ◎	黒斑	29
72	甕	口径(18.4) 残高 4.6	口縁に刻目。	⑪ヨコナデ ⑫マツツ(ハケ)	マツツ	茶褐色 灰褐色	石(1~2) ○		
73	甕	口径(21.5) 残高 5.4	幅かい口縁部。	マツツ	マツツ	淡乳茶色 該灰褐色	石(1~2) ○		
74	甕	口径(12.2) 残高 5.3	筒状で内縮する腹部。	ナテ	ナテ	淡褐色 淡褐色	石(1~2) ○		
75	甕	口径 15.3 器高 35.4 底径 8.2	上げ底。筒状の腹部。質感が強く強まる。無文。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ→ヘラミガキ ⑬ナテ	⑪マツツ(ヨコヘラミガキ) ⑫ナテ	自茶色 白茶色	石(1~5) 石(1~3) ○	黒斑	29
76	甕	口径(15.5) 残高 5.4	筒状の腹部。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ	ナテ	淡茶色 淡灰茶色	石(1~2) ◎	加腹	29

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法墨(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	釉 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
77	壺	底径 6.7 残高 16.4	厚く、立ち上りのある平底。 無文。	ハクリ	ハクリ	灰系褐色 淡茶褐色	石・黄(1-5) △		29
78	壺	口径(13.8) 残高 6.4	口縁部にヘラ沈痕文+刻目。	マメツ	マメツ	乳白色 乳淡白色	石・黄(1-4) ◎		29
79	壺	口径(15.5) 残高 2.3	口縁部にナデ凹み刻目をもつ。	ハケ(7本/3cm)→ヨコナデ	ヨコヘラミガキ→ナデ	灰色 黄白色	石・黄(1-2) ◎	塗	29
80	壺	口径(21.0) 残高 5.4	腹部に刻文文+ヘラ沈痕文 7本以上。口縁部に刻目。	ヨコナデ ハケ(マメツ)	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・灰(1-6) ◎		30
81	壺	残高 6.0	口縁内面に凸唇。腹部にヘラ沈痕文 2 帯。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石・黄(1-2) ○		30
82	壺	口径(14.4) 残高 2.3	口縁内面に凸唇。	マメツ	マメツ	淡灰黄色 淡灰褐色	石・灰(1-4) ○		
83	壺	口径(24.2) 残高 9.1	口縁内面に刻目凸唇。	マメツ	ヨコヘラミガキ	始灰茶色 淡灰褐色	石・灰(1-5) ◎		30
84	壺	残高 3.0	口縁内面に刻目凸唇。凸唇 上にはナデ凹み。	マメツ	マメツ	黄灰茶色 黄灰色	石・灰(1-4) ○	黒斑	30
85	壺	口径(23.4) 残高 1.2	口縁部に刻目。	ナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・灰(1-2) ◎		
86	壺	口径(31.8) 残高 9.5	口縁内面に刻目凸唇。壠面 に斜格子目文。	④ヨコナデ ⑤ハケ ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ(マメツ)	暗茶褐色 淡灰褐色	石・黄(1-5) △	黒斑	
87	壺	口径(40.0) 残高 2.3	口縁内面に刻目凸唇 3 帯。 壠面に有輪印状文。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 明褐色	石・灰(1) ○		30
88	壺	口径(29.4) 残高 5.9	大きく外反する口縁部。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・灰(1-2) ○		
89	壺	口径(12.2) 残高 3.5	器壁は厚い。焼成前の小凹孔 3ヶ。	マメツ	マメツ	青白色 灰白色	石・灰(2) △		30
90	壺	口径(11.3) 残高 5.2	度口口縁。焼成前の小凹孔 2ヶ。	マメツ	マメツ	明褐色 明褐色	石・灰(1-4) △		30
91	壺	底径 6.5 残高 16.9	厚い平底。中央がやや凹む。 ④マメツ ⑤ヘラミガキ ⑥ヨコヘラミガキ	④マメツ ⑤ヘラミガキ(マメツ) ⑥ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ(マメツ)	淡明褐色 淡褐色	石・黄(1-4) △	黒斑	30
92	壺	残高 4.2	頂部にヘラ沈痕文 3 帯。	ハケ	ナデ	淡黄褐色 暗灰褐色	石・黄(1-2) ◎		
93	壺	残高 9.3	頂部に刻目(押圧+刻突文 2列)凸唇等。	ヘラミガキ(マメツ) ハケ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 赤褐色	石・黄(1-2) △		30

出土遺物観察表

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色別 (内面)	粘 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
94	盃	残高 9.7	肩部にわずかに段あり。	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	明赤褐色 明褐色	石・長(1) 金 ◎		
95	盃	残高 8.0	肩部にヘラ沈縞文 1 条。	ハケ→ヘラミガキ	マメツ	淡褐色 淡紫褐色	石・長(1-2) ◎		
96	盃	残高 5.4	肩部にヘラ沈縞文 4 条。	⑨ハケ→ヨコナデ 君ナデ	シボリ板	褐色 淡褐色	石・長(1-2) 金 ◎	30	
97	盃	残高 6.7	肩部にヘラ沈縞文 7 条。	マメツ	ヨコナデ 工具痕	淡黃白色 淡黃褐色	石・長(1-2) ◎		
98	盃	残高 9.0	肩部にヘラ沈縞文 6 条以上。	ハケ(本/1cm)	ナデ+ヨコヘラミガキ	淡黃褐色 明黃褐色	石・長(1-2) ◎		
99	盃	残高 7.5	刻文突+ヘラ沈縞文 3 条+ 刻文突+沈縞文 1 条以上。	ヘラミガキ	マメツ	赤褐色 淡黃白色	石・長(1-2) ◎		
100	盃	残高 5.5	ヘラ沈縞文 2 条 1 枚。	ヨコヘラミガキ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1-2) ◎	31	
101	盃	残高 2.5	ヘラ沈縞文 3 条 1 枚。	ヘラミガキ	マメツ	淡茶色 淡黄色	石・長(1-2) ◎	31	
102	盃	残高 3.6	貝殻模様による沈縞文 3 条。	ハケ(マメツ)	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1-2) ○	31	
103	盃	残高 3.7	貝殻模様による施文。	ヘラミガキ	ヨコナデ マメツ	黄茶色 黄茶色	石(1~2) ◎	31	
104	盃	残高 5.6	貝殻模様による施文。多重 沈縞+刻文+山形文。	ハクリ	ハクリ	黄褐色 黄褐色	石・長(1-2) ○	31	
105	盃	残高 5.2	斜口(押圧+刻文文 2 列) 凸唇 2 本。	ヨコヘラミガキ ヨコナデ	マメツ	淡黃褐色 淡黑色	石・長(1-2) ◎	30	
106	盃	残高 3.8	ヘラ沈縞文 4 条+刻目(押 圧+刻文文) 凸唇+沈縞文 1 条。	ヘラミガキ→ヨコナデ	ナデ	淡黑褐色 黑色	石・長(1-2) ◎	30	
107	盃	残高 7.3	大型品。唇壁が厚い。	マメツ	マメツ	藍灰茶色 黄褐色	石・長(1-2) ◎		
108	盃	残高 4.2	人型品の口縁部分。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡黄色	石・長(1-2) ○		
109	盃	口径(6.6) 残高 3.1	中型品の口縁部分。ヘラ沈 縞文 1 条以上。	ヨコヘラミガキ	⑩マメツ ⑪ヨコヘラミガキ	淡灰褐色 淡茶褐色	石・長(1-2) 金 ◎	30	
110	盃	口径(30.5) 残高 4.2	中型品の口縁部分。ヘラ沈 縞文 2 条以上。	ヨコナデ	マメツ	乳茶色 乳白色	石・長(1-2) 金 ◎	30	

SD 1 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側 色調 (内面))	胎 土 燒 成	備考	回数
				外 面	内 面				
111	盆	直径(16.8) 残高 10.1	大型品の底盤。厚い平底。	ヘラミガキ 捺痕有	⑩ヘラミガキ ⑪ナナアゲ	灰黄褐色 灰黄茶色	石長(1~2) 金 ◎		
112	壺	直径(9.0) 残高 4.0	中型品の底盤。平底で直立する立ち上り。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
113	壺	直径(10.6) 残高 4.1	中型品の底盤。平底で直立する立ち上り。	マメツ	マメツ	褐茶色 褐灰色	石・長(1~2) 金 ○		
114	壺	直径 10.5 残高 10.2	大型品の底盤。厚い平底。	ヘラミガキ ナナ	ナナ(マメツ)	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 金 ◎		
115	壺	直径(8.6) 残高 8.1	中型品の底盤。やや凹み、薄い底盤。	ヨコヘラミガキ	マメツ	復茶色 乳白色	石・長(1~2) 金 ○		
116	壺	直径 7.5 残高 8.0	中型品の底盤。平底。	⑩マメツ(ヘラミガキ) ⑪ナナ(マメツ)	ヨコヘラミガキ(マメツ)	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ○	想	
117	壺	直径 8.4 残高 9.2	中型品の底盤。厚い平底。	ナナ(ヘラミガキ)	ナナ(ヘラミガキ)	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2) 金 ○		
118	壺	直径(8.6) 残高 4.1	中型品の底盤。厚い円盤状の平底。	マメツ	マメツ	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~2) ◎		31
119	壺	直径 8.4 残高 9.3	中型品の底盤。厚い平底。	マメツ	マメツ	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~2) ○		31
120	壺	直径(6.6) 残高 5.6	小型品の底盤。上げ底。	マメツ(ヘラミガキ)	ヘラミガキ(マメツ)	灰黃褐色 灰黃褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
121	鉢	口径(54.0) 残高 7.1	大型品。ヘラ沈縞文1条。	⑩マメツ ⑪ヘラミガキ	マメツ	明褐色 淡褐色	石・長(1~2) 金 ◎		31
122	鉢	口径(37.9) 残高 4.6	大型品。無文。	⑫ヨコナナテ ⑬マメツ	⑩ヨコヘラミガキ ⑪マメツ	黃褐色 灰黃茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
123	鉢	口径(23.4) 残高 9.1	中型品。無文。	⑪ナナ(マメツ) ⑫マメツ	⑩マメツ ⑪マメツ(ヘラミガキ)	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~2) ◎		31
124	鉢	口径(14.8) 残高 5.3	小型品。底口口縁。	マメツ	⑩マメツ(ヘラミガキ) ⑪ヘラミガキ	黃茶色 灰黃褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	31
125	鉢	口径(16.0) 残高 3.0	直口口縁。端部は面をもつ。	ハケ ヘラミガキ	ハケ ヘラミガキ	灰黑色 暗茶褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
126	鉢	口径(13.2) 残高 7.4	直口口縁。端部は面をもつ。	ハケ ヘラミガキ	ヘラミガキ	乳黄色 乳白色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
127	鉢	残高 3.5	直口口縁。端部は丸みをもつ。	捺痕有 マメツ(ヘラミガキ)	⑩ヨコナナテ ⑪ヘラミガキ	灰褐色 灰黃茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	

出土遺物觀察表

SD 1 出土遺物觀察表 土製品・石製品

(9)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外観) 色調 (内面)	施 工 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
128	鉢	口径(8.9) 残高 1.9	直口鉢。焼成前の小円孔 を2ヶもつ。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	長(1~2) ○		31
129	鉢	口径(13.1) 残高 3.0	直口鉢。焼成前の小円孔 を2ヶもつ。	マメツ	マメツ	淡黃褐色 灰色	石・長(1~2) △		31
130	鉢	底径 3.2 残高 3.5	小型品の底部。平底。	マメツ	工具→ナテ	淡黃白色 淡灰白色	石・長(1) ◎		
131	鉢	底径 6.0 残高 3.9	小製品の底部。平底。	ハケ(マメツ)	ヘラミガキ→ナテ(マメツ)	黄褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎		
132	瓶	底径 6.4 残高 14.0	質の軽用品。焼成後穿孔。	ハケ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色 淡褐色	石(1) ◎		
133	瓶	底径 6.4 残高 8.3	壺の軽用品。焼成後穿孔。	ハケ(マメツ)	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2) ○		32
134	瓶	底径 6.1 残高 3.5	質の軽用品。焼成後穿孔。	マメツ(ハケ→ヘラミガキ)	④マメツ ⑤ヨコナテ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎		
135	蓋	つまみ径 5.3 高さ 12.0 口径 20.1	輪部を一筋くし。わずかに くびれ、内むつまみ部。	ハケ(7本/cm)	ハクリ	淡灰褐色 褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	32
136	蓋	口径(19.2) 残高 2.5	輪部を一筋くし。ゆるやかに 外反する。内面にスス付着。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
137	盖	口径(20.0) 残高 2.7	輪部が厚い。	④ハケ→ヘラミガキ ⑤ヨコナテ	④ヘラミガキ ⑤ヨコナテ	淡黃褐色 乳質茶色	圓		32
138	蓋	つまみ径 5.0 残高 6.7	大きく凹むつまみ部。	ヘラミガキ	ナテ	暗灰茶色 淡灰褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
139	蓋	つまみ径 4.2 残高 3.0	小さく、厚いつまみ部。頂 部は平底。	ハケ→ナテ	ハケ→ナテ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
140	ミニチュア	蓋径(2.2) 高さ 4.8 口径(5.8)	蓋形上部のミニチュア品か。	ナテ 指輪痕	ナテ 指輪痕	黄褐色 暗褐色	密 ○	黒斑	32
141	ミニチュア	底径 1.0 残高 1.1	丸い底部。小片。	ナテ(マメツ)	指輪痕	淡灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		32
142	ミニチュア	底径(2.9) 残高 2.6	平底。小片。やや角がある。	ナテ(マメツ)	マメツ	淡褐色、灰褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		32
143	ミニチュア	底径(4.0) 残高 4.0	くびれの上げ窓。	ハケ 指輪痕	ナテ	灰褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		32
144	灰	底径(5.8) 残高 3.6	質して薄い底部。	マメツ	マメツ	乳質灰褐色 乳質灰褐色	石・長(1~2) ◎		32
145	土師	孔径(0.4) 厚さ 2.0 重さ	三分の1の残存。焼成前の 孔。	ナテ		淡褐色	石・長(1~2) ◎		32

SD 1 出土遺物観察表 石製品

10

番号	器種	遺存状態	石材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
146	石鉈	片側欠損	サヌカイト	2.1	(1.8)	0.2	(0.7)	基部のえぐり長0.46cmを測る。 両面に剝離面が残る。	33
147	石鉈	先端部欠損	サヌカイト	(1.8)	3.1	(0.3)	(2.1)	基部のえぐり長0.50cmを測る。 両面に剝離面が残る。	33
148	スクレイバー	一部欠損	サヌカイト	(3.5)	2.9	0.7	(6.9)	両面に剝離面が残る	33
149	スクレイバー	完形	流紋岩質安山岩	7.5	6.1	1.1	66.5	両面に剝離面が大きくなり、かつ 刀部付近にコーン・グロスが付着。	34
150	スクレイバー	1/2欠損	流紋岩質安山岩	(7.2)	(7.7)	1.8	(106.4)	a面に自然面が残る。	33
151	石磨丁	1/2欠損	緑色片岩	(6.2)	(3.3)	0.6	(18.2)	刃部欠損しており、刃部形状は不明。	33
152	石磨丁	-部欠損	紅褐色片岩	(10.0)	4.3	0.4	(31.4)	磨打技術の未製品。	33
153	大型蛤刀石斧	2/3欠損	緑色片岩	(9.7)	(3.7)	(1.1)	(61.9)	基部に一部敲打痕認められる。	34
154	扁平片刀石斧	1/3欠損	白色巖灰岩	(4.5)	3.3	0.9	(22.2)		34
155	扁平片刀石斧	-部欠損	(赤鉄石英)片岩	7.2	(4.9)	0.6	(30.1)	刃部のみ研磨痕認められる。	34
156	投錘	完形	安山岩系	3.4	2.6	2.1	24.6		35
157	投錘	完形	安山岩系	3.4	2.5	2.2	24.9		35
158	投錘	完形	安山岩系	3.4	2.6	2.5	29.8		35
159	投錘	完形	砂岩	4.0	2.6	2.5	36.2	器面の風化著しく進行。	35
160	板斧	完形	安山岩系	3.8	3.2	2.6	45.4		35
161	投錘	完形	安山岩系	6.4	5.6	4.3	223.6		35
162	投錘	完形	安山岩系	7.5	4.7	4.4	208.7		35
163	敲石	完形	安山岩系	8.5	2.7	2.0	69.6	下端面に使用痕認められる。	35
164	敲石	完形	安山岩系	12.8	5.9	4.0	530.0	両端面に使用痕認められる。	35
165	敲石	2/3欠損	輝石安山岩	(12.0)	(7.9)	(5.0)	(425.0)	器面は受熱により赤化、黒化して いる。	35
166	古石	大きく欠損	不明	(10.3)	(8.5)	5.3	(140.0)		36
167	古石	2/3欠損	角閃安山岩	(12.0)	(16.2)	5.2	(1570.0)		36
168	古石	大きく欠損	黒雲母安山岩	(17.5)	18.6	4.3	(2200.0)		36

第5章 自然科学分析

1. 試料

試料は、北斎院地内遺跡2次調査地の墓1・2から出土した遺体付近の土壌（埋土）およびその周辺から採取された。試料採取箇所を第31図に示す。

2. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量、ガラスピーズ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300w・42KHz・10分間以上）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をもとめ対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ属はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である（杉山・藤原、1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属は0.22である（杉山、1987）。

3. 結果および考察

〔試料1〕 墓1から出土した遺体付近の土壌（埋土）およびその周辺の土壌について分析を行った（表25～27）。その結果、すべての試料からイネの植物珪酸体が検出された。このうち、遺体付近の土壌（No.1～No.5）では平均14,400個/gとかなり高い値であり、周辺の土壌（No.6～No.10）の平均値の9,000個/gを大きく上回っている。このことから、遺体の埋葬に伴ってなんらかの形で稻穀が置かれていた（敷かれていた）可能性が考えられる。

なお、イネの稭殻（穂の表皮細胞）やオオムギ族（ムギ類、穂の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出されたが、密度が低いことや比較試料との差異が明確に認められないことか

ら、遺体の埋葬に伴うものかどうかは不明である

その他の分類群では、ネザサ節型やウシクサ族（スキ属など）、メダケ節型などが比較的少量検出され、またシイ属やコナラ属（アカガシ亜属？）などの樹木起源の植物珪酸体も部分的に少量見られた。これらのことから、当時の遺跡周辺はネザサ節やメダケ節、スキ属などが生育するイネ科植生であり、シイ属やアカガシ亜属などの照葉樹もある程度見られたものと推定される。

〔試料2〕 墓2の遺体付近の土壤（埋土）及びその周辺の土壤について分析を行った（表28～30）。その結果、すべての試料からイネの植物珪酸体が検出された。このうち、遺体の頭部付近の試料（No.2、4）では密度が平均11,300個／gと高い値であり、その他の試料の平均値の6,800個／gを大きく上回っている。このことから、遺体の埋葬に伴って頭部付近などになんらかの形で稻穀が置かれていた（敷かれていた）可能性が考えられる。

なお、イネの稲穀（穎の表皮細胞）やオオムギ族（ムギ類、穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出されたが、密度が低いことや比較試料との差異が明瞭に認められないことから、遺体の埋葬に伴うかどうかは不明である。

その他の分類群では、ネザサ節型やウシクサ族（スキ属など）などが少量検出され、またシイ属やコナラ属（アカガシ亜属？）などの樹木起源の植物珪酸体も部分的に少量見られた。これらのことから、当時の遺跡周辺はネザサ節やスキ属などが生育するイネ科植生であり、シイ属やアカガシ亜属などの照葉樹もある程度見られたものと推定される。

〔参考文献〕

- 杉山 真二・藤原 宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オバール分析、赤山一古環境編一、川口市遺跡調査会報告第10集
- 杉山 真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オバール分析の現状と問題点、植生史研究、第2号
- 杉山 真二（1987）タケノコ植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告第31号
- 藤原 宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）・数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学9
- 藤原 宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（3）一福岡・板付遺跡（良田式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa L.*）生産総量の推定一、考古学と自然科学12

●表25 墓1の植物珪酸体分析結果①

(単位: ×100個/g)

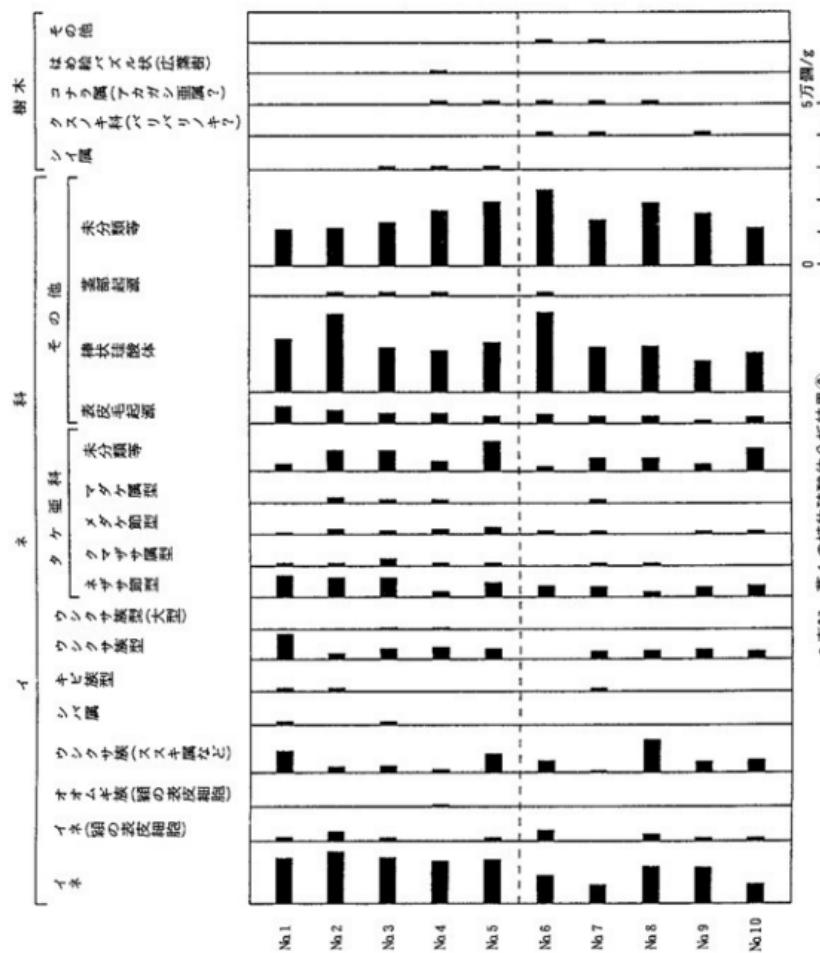
分類群	北斎院地内道路2次調査、墓1									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科										
イネ	144	159	146	127	142	93	66	112	119	63
イネ穀殻(穎の表皮細胞)?	7	22	7		7	23		14	7	7
オオムギ族(穎の表皮細胞)?					7	---				
ウシクサ族(ススキ族など)	69	14	21	7	54	31	7	98	30	42
シバ属	7		7							
キビ族型	7	7				7				
ウシクサ族型	89	14	28	45	27		20	28	30	21
タウシクサ族型(大型)			7	7						
タケ亜科										
ネザサ節型	69	65	63	15	41	31	27	14	22	28
クマザサ属型	7	7	21	7	7		7	7		
メダケ節型	7	14	7	15	20	8	13		15	14
マダケ属型			14	7	7		7			
未分類等	21	65	63	30	95	16	40	42	15	77
その他のイネ科										
表皮毛起源	55	43	35	37	20	23	13	21	7	21
棒状珪酸体	165	245	139	127	156	249	133	146	97	119
茎部起源		7	7	7		8				
未分類等	110	115	132	172	203	241	139	188	163	112
樹木起源										
シイ属			7	7	7					
バリバリノキ?						8	7		7	
コナラ属(アカガシ亜属)?				7	7	8	7	7		
はめ縫パズル状(広葉樹)					7					
その他						8	7			
植物珪酸体総数	756	793	695	635	785	747	497	676	513	505

●表26 主な分類群の植物体重の推定値

(単位: kg/m²・cm)

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科										
イネ	4.24	4.67	4.29	3.73	4.18	2.74	1.95	3.28	3.50	1.84
ウシクサ族(ススキ属など)	0.85	0.18	0.26	0.09	0.67	0.39	0.08	1.21	0.37	0.52
タケ亜科										
ネザサ節	0.33	0.31	0.30	0.07	0.19	0.15	0.13	0.07	0.11	0.13
クマザサ属	0.05	0.05	0.16	0.06	0.05		0.05	0.05		

※表25の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各分類群の換算係数をかけて算出。



●表2) 基1の植物珪酸体分析結果(2)

●表28 墓2の植物珪酸体分析結果①

(単位: ×100個/g)

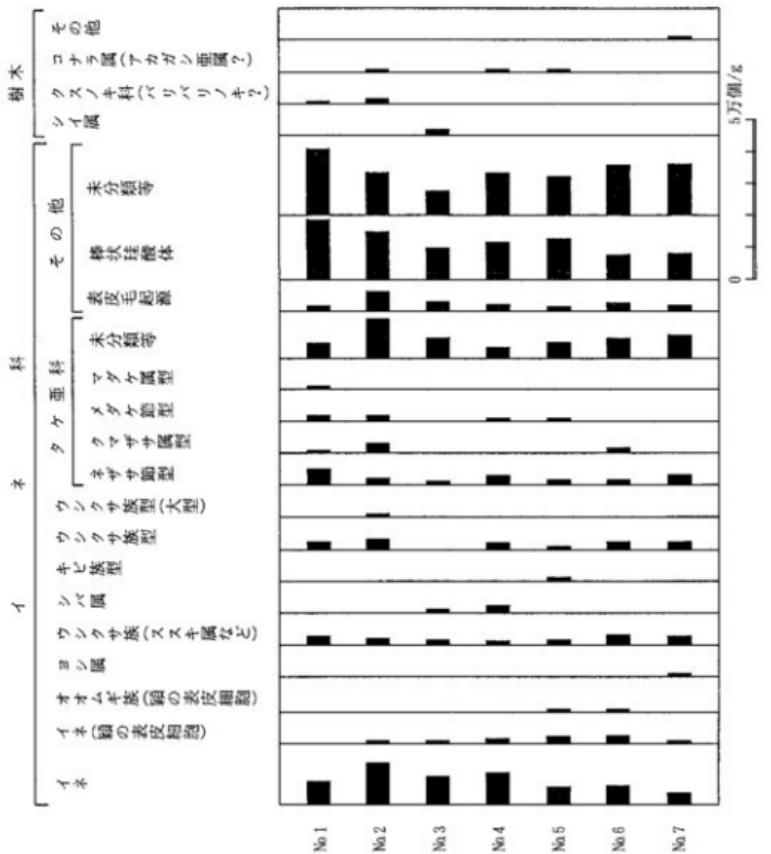
分類群	1	2	3	4	5	6	7
イネ科							
イネ	77	128	95	99	58	64	45
イネ穀類(穎の表皮細胞)		8	7	12	22	19	6
オオムギ族(穎の表皮細胞)					7	6	
ヨシ属							6
ウシクサ族(ススキ属など)	28	23	15	6	15	38	19
シバ属			7	17			
キビ族型						7	
ウシクサ族型	28	38		17	7	26	26
ウシクサ族型(大型)		8					
タケ亜科							
ネザサ節型	56	23	7	29	15	13	38
クマザサ属型	7	30				13	
メダケ節型	14	15		6	7		
マダケ属型	7						
未分類等	49	128	66	35	51	64	77
その他のイネ科							
表皮毛起源	14	53	29	23	15	26	19
棒状珪酸体	189	150	102	116	124	77	83
未分類等	210	143	80	145	124	166	166
樹木起源							
シイ属				15			
クスノキ科(バリバリノキ?)	7	15					
コナラ属(アカガシ亜属?)		8		6	7		
その他							6
(海綿骨針)	7						
植物珪酸体総数	687	767	423	512	461	512	491

●表29 主な分類群の植物体重の推定値

(単位: kg/m²・cm)

分類群	1	2	3	4	5	6	7
イネ科							
イネ	2.27	3.76	2.79	2.91	1.72	1.88	1.31
ヨシ属							0.40
ウシクサ族(ススキ属など)	0.35	0.28	0.18	0.07	0.18	0.48	0.24
タケ亜科							
ネザサ節	0.27	0.11	0.04	0.14	0.07	0.06	0.18
クマザサ属	0.05	0.23					0.10

※表28の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出。

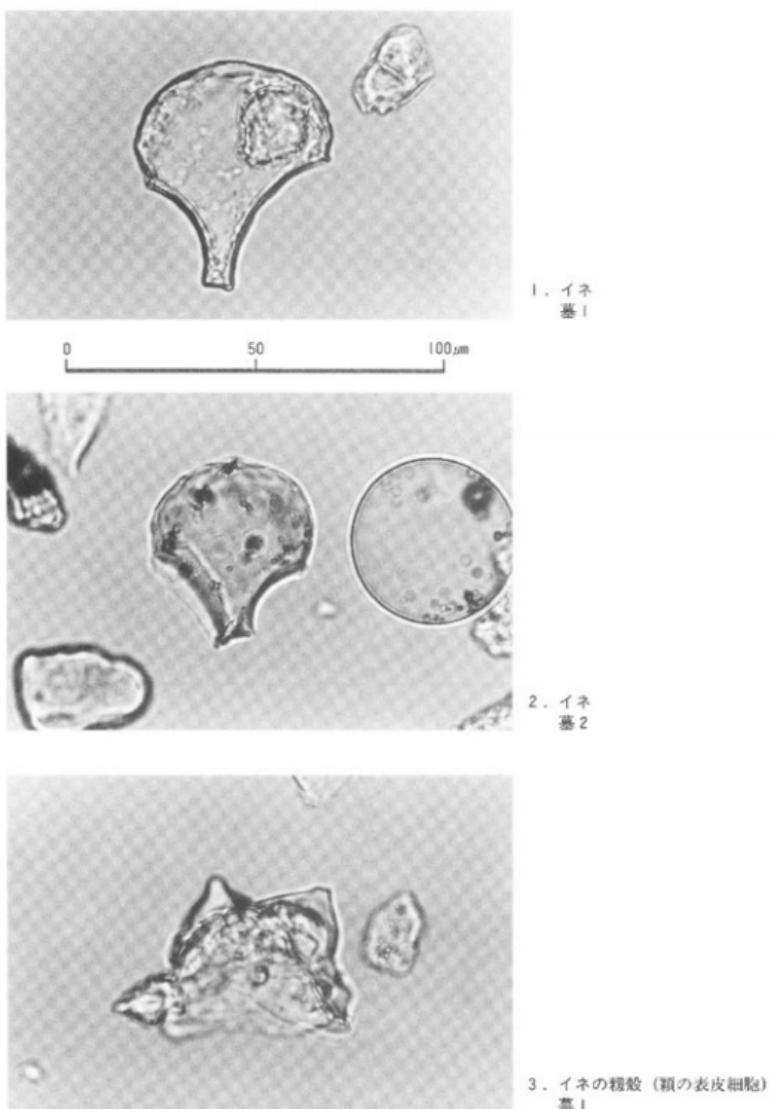


●表30 務2の植物核酸体分析結果②

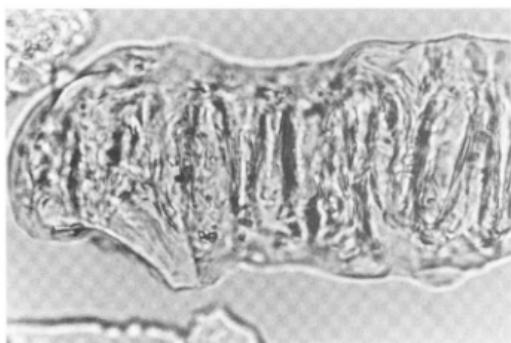
●表31 植物珪酸体の顯微鏡写真一覧

(倍率はすべて400倍)

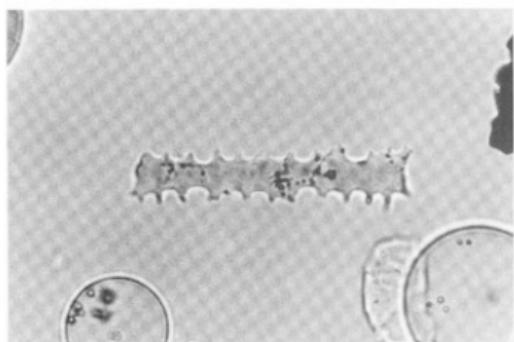
No	分類群	地点	試験番号
1	イネ	墓1	9
2	イネ	墓2	2
3	イネの稜穀(穂の表皮細胞)	墓1	6
4	イネの稜穀(穂の表皮細胞)	墓2	6
5	オオムギ族(穂の表皮細胞) ?	墓1	4
6	ウシクサ族(ススキ属など)	墓1	5
7	キビ族型	墓1	1
8	ネザサ節型	墓1	5
9	ネザサ節型	墓1	4
10	クマザサ属型	墓1	1
11	メダケ節型	墓1	5
12	マダケ属型	墓1	4
13	表皮毛起源	墓1	4
14	棒状珪酸体	墓1	9
15	シイ属	墓2	3
16	クスノキ科(バリバリノキ?)	墓1	7
17	はめ縫パズル状(広葉樹)	墓1	4
18	植物組織片	墓2	2



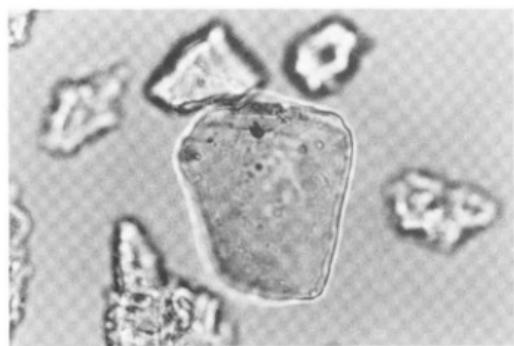
第58図 プラント・オパールの顕微鏡写真 (I) (400倍)



4. イネの穂穀 (穎の表皮細胞)
茎 2



5. オオムギ族 (穎の表皮細胞) ?
茎 1



6. ウシクサ族 (ススキ属など)
茎 1

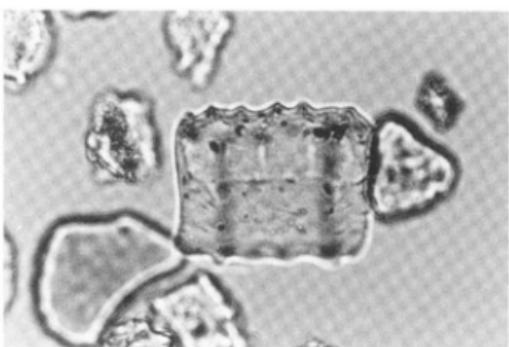
第59図 プラント・オバールの顕微鏡写真 (2) (400倍)



7. キビ族型
墓 I

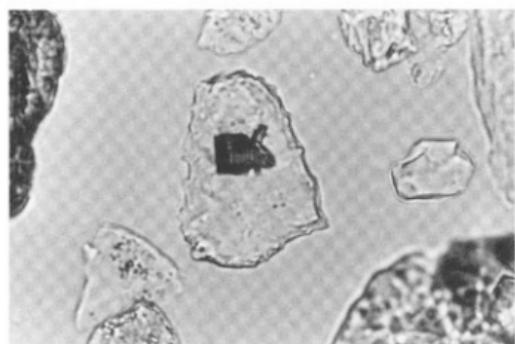


8. ネザサ節型
墓 I



9. ネザサ節型
墓 I

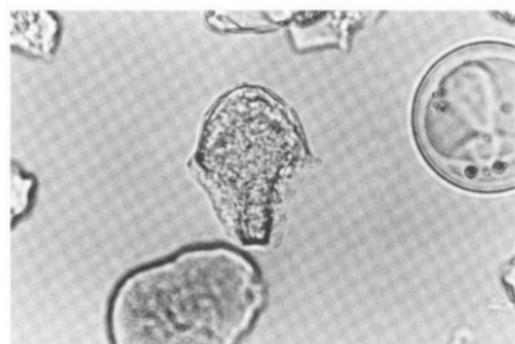
第60図 プラント・オバール顕微鏡写真 (3) (400倍)



10. クマザサ属型
基 I

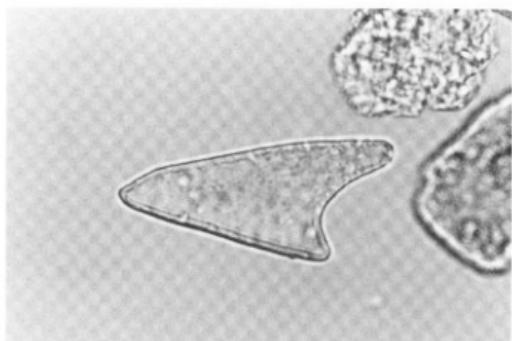


11. メダケ節型
基 I

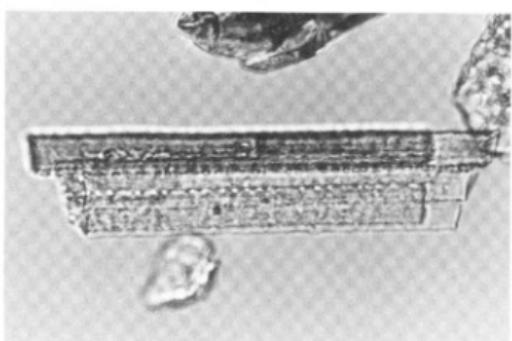


12. マダケ属型
基 I

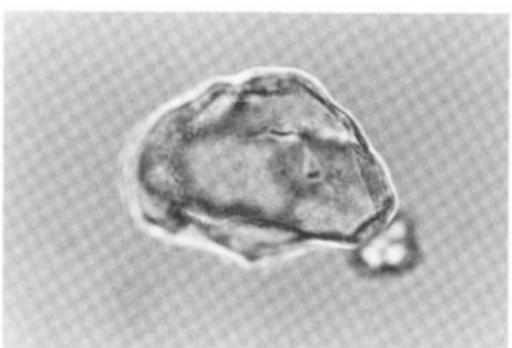
第61図 プラント・オパール顕微鏡写真(4) (400倍)



13. 表皮毛起源
基 1



14. 棒状根體
基 1

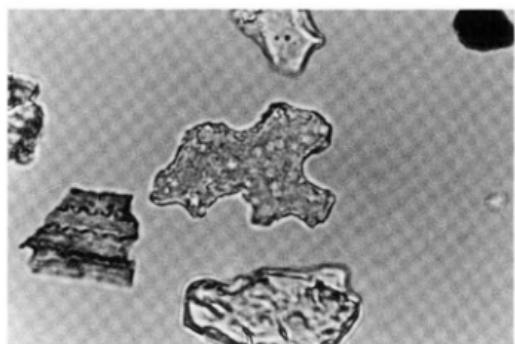


15. シイ属
基 2

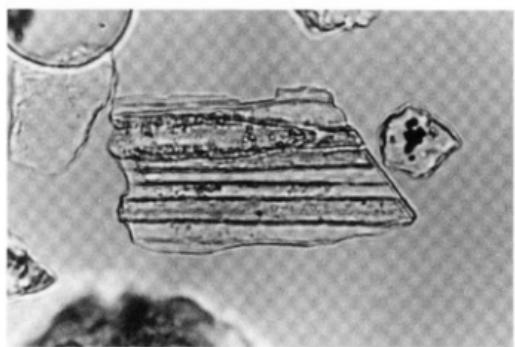
第62図 プラント・オバール顕微鏡写真 (5) (400倍)



16. クスノキ科 (バリバリノキ?)
基 1



17. はめ絵パズル状 (広葉樹)
基 1



18. 植物組織片
基 2

第63図 プラント・オバール顕微鏡写真 (6) (400倍)

第6章 北斎院地内遺跡の中世集落

今回の北斎院地内遺跡1次調査及び2次調査（以下、地内1次及び地内2次と称す）では、中近世の溝・掘立柱建物・井戸・土壙（土壙墓・木棺墓を含む）などの集落関連遺構を多数検出した。本章では、地内1次及び地内2次の検出遺構の検討を行うものとする。

1. 集落の変遷

地内1次及び地内2次における土地利用の期間は、出土遺物から15世紀後半～16世紀前半の約百年間と想定される。遺構は、遺構内出土遺物及び遺構の切り合いから大きく4段階に分類される。なお、遺構の切り合いと時期区分は、地内2次におけるSD2→墓群→SD1という切り合い関係を基本に設定する。

1) I段階

I段階の遺構で基準になるのは、地内1次及び地内2次のSD2である。

SD2は地内1次の東方、また地内2次の西方に続くことが確認されている。出土資料は少量であるが、土師質土器、備前焼等が出土している（第66図）。川幅の広がり具合と川底の高低差から東方から西方へ流れる自然流路ではないかと考えられる。

2) II段階

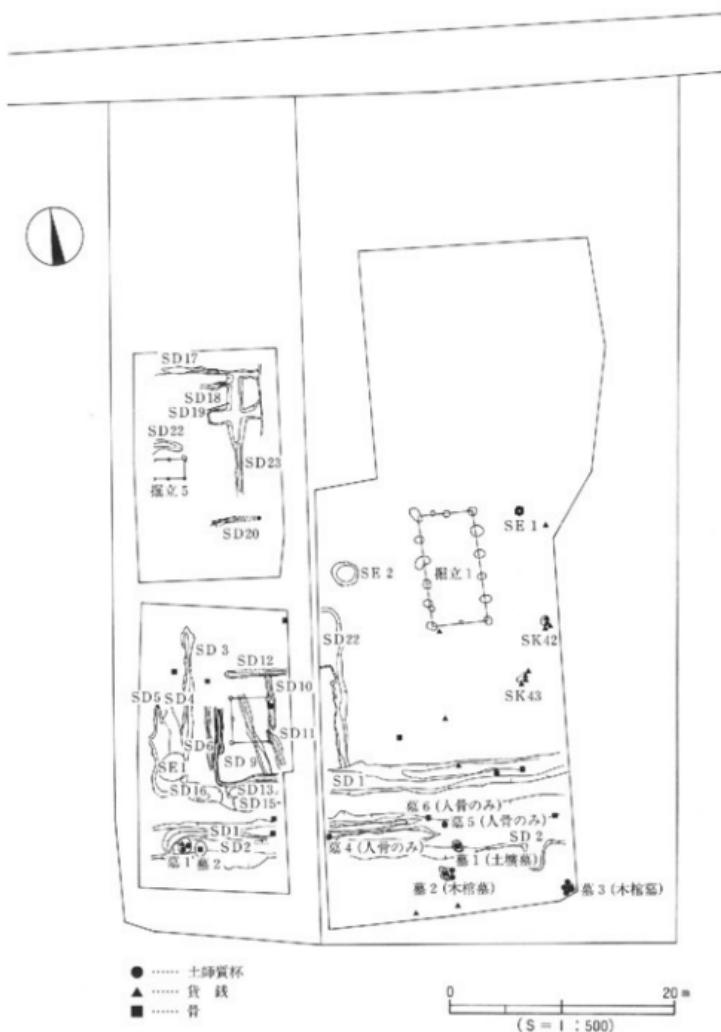
II段階の遺構で基準になるのは、地内2次における土壙墓の墓1と墓2である。

共に頭位は北、体の向きは西で、屈葬であった。墓1からは強いナデ整形の土師質の环1点と古銭1点、人骨1体が検出された。また墓2からは、人骨が検出された。共伴遺物はない。この二つの土壙墓は、土壙墓の規模、被葬者の頭位及び体位がほぼ同様であることから、同時期のものであると考えられる。

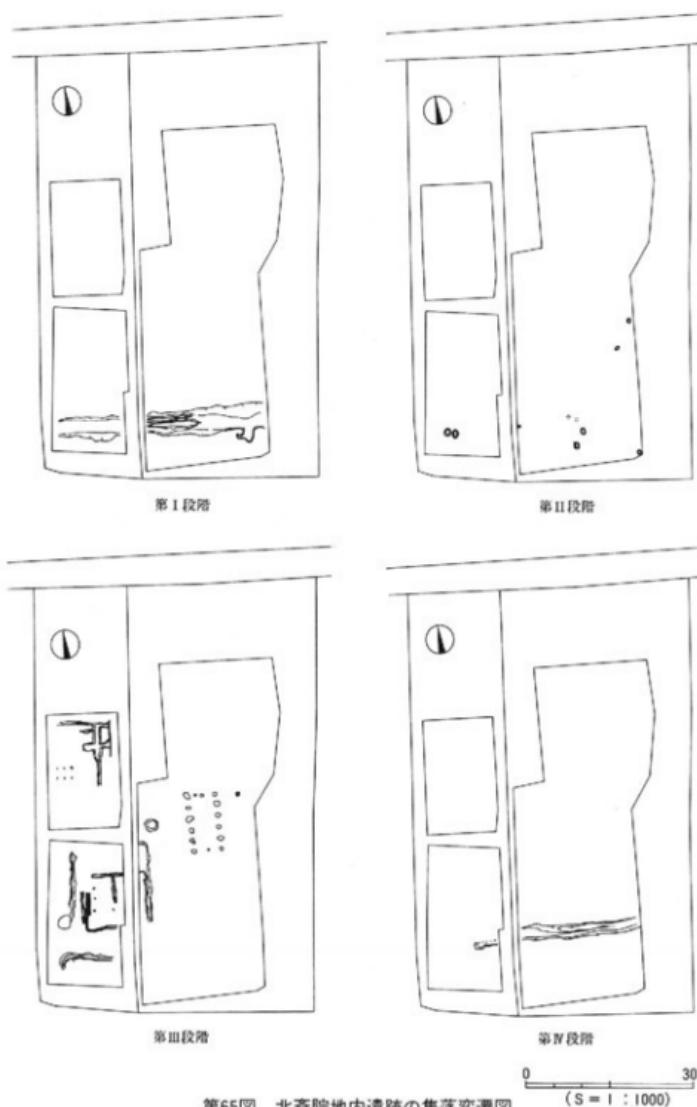
II段階に位置付けた地内2次の中近世墓には3つの共通点が提示できる。第一に被葬者の頭位と体の向き及び埋葬方法、第二に土壙墓内出土の土師質の环、第三に土壙墓内出土の古銭（六道銭）である。

第一：被葬者の頭位と体位及び埋葬方法についてであるが、地内1次における墓1～3は同形態であり、墓群の位置も地内2次と同様で調査区南側での検出であり、共通点を多くもつ。但し地内2次の墓群が土壙墓であるのに対して、地内1次の墓2・3は木棺墓であり異なる点もある。

第二：土壙墓内出土の土師質の环であるが、第66図からも分かるように土壙墓出土の土師質环と木棺墓出土のそれとは、若干の違いが見られる。地内1次の墓3出土土師質杯は、底部から縁部にかけての立ち上がりが、「く」字状になるタイプである。また、地内2次の墓1出土土師質杯は、底部端の立ち上がりがやや丸くなるタイプである。このことは、墓の時期差、または被葬者の身分差等を考えている。



第64図 北斎院地内遺跡の中世集落



第65図 北斎院地内遺跡の集落変遷図

第三：土壙墓内出土の古銭（六道銭）であるが、明確に土壙墓内出土の古銭としては地内2次の墓1に限られる。ただし、地内1次のSK42とSK43からは4枚ずつ計8枚の古銭が出土していることより、これ等は墓の可能性があるものである（資料的には、出土品は古銭に限られるが、発掘調査当時、数枚の土師質の坏が伏せられた状態で検出され、その後から古銭が出土した。なお、整理作業時の不手際によりSK42・43出土の古銭が不明確である（表12参照）。

この他、土壙等の掘り込みは確認されていないが、散在的に人骨が見られた。この人骨は、人為的なものか、洪水等により流されたものかは不明であった。

3) III段階

III段階の遺構で基準になるのは、地内2次におけるSD1である。

このSD1はJ字状の平面形を呈し、一部に石列が検出された。

III段階に位置付けされる遺構は、地内2次のSD1である。溝の内部には石列をもつてゐる。また埋土より、恒常に流水があったと考えることは困難である。これらのことより、SD1は一時的な使用法、或いは季節的使用法等が考えられる人為的遺構であると考える。このことよりやや短絡的ではあるが周囲に生活域が存在したものと推測した。

III段階に位置付けられる遺構としては数棟の掘立柱建物を復元できた。建物は地内1次の1号掘立柱建物（5×2間）を除くと、他は1×1間、1×2間の小規模の建物である。柱穴の規模も30cm前後のものばかりであった。規模と柱穴から考えると、多くは簡易な構造の建物であったと考えられる。また、地内2次における1号掘立柱建物とSD7は、その位置関係から同一時期のものと考えられる。また、東西に走る数条の小溝（SD3・SD12・SD22など）も生活域を区画するものとしてIII段階に位置付けた。

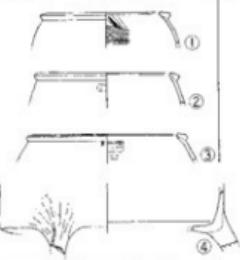
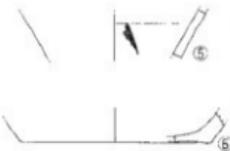
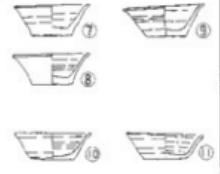
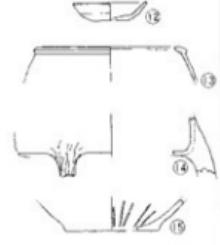
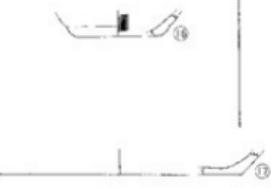
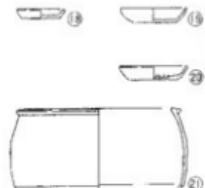
4) IV段階

IV段階であろうと思われる遺構は、地内1次のSD1である。さらに、このSD1に継続するであろうと思われる地内2次のSD13があげられる。

これらの溝は、東西方向に走ることよりIII段階よりも後出の幹線水路であろうと思われる。

2.まとめ

地内1次及び地内2次の調査地は、低湿地の砂層上に立地していた。このため各々の遺構の残りは悪く、不充分な検出状況であった。しかし、今回の調査により松山平野においてやや手薄感のある15世紀後半から16世紀前半の資料を補充できたことは、調査の意義は大きいといえよう。また松山平野において比較的の調査事例が少ない斎院地区において、中近世集落が確認されたことも大きな成果である。復元された数棟の建物の利用法は、規模の大きさから居住というよりも、むしろ部分時間的利用を考えた方がよいのではないかと思う。『一遍聖絵』に代表される中世に描かれた絵巻物の市場や武家屋敷内に建てられた簡易な建築物を想定できる。

	上飾質土器	備前焼	貿易陶磁器
第I段階 (SD2)			
第II段階 (基群)			
第III段階 (地内二次 SD1)			
第IV段階 (地内一次 SD1)			

0  10cm
(S = 1 : 8)

第66図 北斎院地内遺跡の中世土器

松山平野の中近世集落は、鷹子遺跡・樽味遺跡I（宮本一夫 1989）、樽味遺跡II（1993田崎博之）、石井幼稚園遺跡（1987 栗田茂敏）、古照遺跡7・8次（1994 栗田正芳）等があげられる。また中世城郭遺跡としては現在調査整理中の道後湯築城址（御愛媛県埋蔵文化財センター）があげられる。一方中近世の土塙墓の検出例は、古照遺跡8次調査（栗田正芳 1993 b）、福音小学校構内遺跡等があげられる。樽味遺跡Iにおいては、集落を区画するものと推定されるL字状の溝が検出されている。さらに樽味遺跡IIにおいては、小規模の掘立柱建物址群を取り囲む、区画の溝が検出されている。

県外における中世集落の代表例には、広島県の草戸千軒町遺跡があげられる。瀬戸内海を隔て愛媛県と近い位置にあり、中世集落を考える上での良好な資料となる遺跡である。また土塙墓の検出例は、大分県の笠松遺跡など各地で多く見られる。

今後の調査における課題は、第一に土地利用の状態をさらに明確化することである。今回の調査により遺跡が東西へ広がる様相が明らかになった。第二に中近世を研究するにあたって民族学、文献史学など各方面からのアプローチが重要であるということである（この点においては今後さらなる追究を行いたいと考えている）。

最後に、筆者の勉強不足と触れるべき先学の業績に触れ得なかったことをお詫びする。そして貴重な御教示を頂いた広島県草戸千軒町遺跡研究所岩本正二氏、鈴木康之氏、福島政文氏、御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター栗田正芳氏、御協力頂いた方々に記して感謝申し上げます。

〔参考資料〕

- 宮本一夫 1989 「鷹子・樽味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 田崎博之 1993 「樽味遺跡II 樽味遺跡2次調査報告」愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 鈴木康之 1993 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告I」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 岡田敏彦 1993 「松坂古墳遺跡」御愛媛県埋蔵文化財センター
- 栗田正芳 1993 a 「古照遺跡—第6次調査—」御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 栗田正芳 1993 b 「古照遺跡—7・8・9次調査地—」『松山市埋蔵文化財調査年報V』
- 上田真 1991 「南江戸町目遺跡」松山市教育委員会
- 栗田茂敏 1987 「石井幼稚園遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市教育委員会
- 岡本桂典 1992 「中世の市場風景—絵巻物にみる市場—」季刊考古学39号 旗山閣出版
- 水藤真 1986 「井戸の現地調査と石造建物調査」『国立歴史民族博物館研究報告9集』国立歴史民族博物館
- 小林昭彦 1993 「笠松遺跡」「一般国道10号線 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」大分県教育委員会

第7章 調査の成果と課題

本刊では、松山平野の西部にあたる北斎院町所在の北斎院地内遺跡1・2次、斎院鳥山遺跡について調査報告を行った。

北斎院町は、平野北西部にある三津湾にそそぐ宮前川により形成された沖積低地である。宮前川流域には、中流域に古墳遺跡、下流域には宮前川遺跡等があり、平野を代表する古墳時代の集落地帯として著名である。

斎院鳥山遺跡は、宮前川別府遺跡の中前期半資料の前段階に時間的位置付けがなされるものである。宮前川別府遺跡出土品（報告書掲載分）では、体部の球形化や施文具に構描文が施されている。本資料には、未だ3条以上を一組とする所謂「構描文」は使用されず、2条一組の原体が少數みられるにすぎない。このことは、第Ⅰ様式へラ描き沈線文から、第Ⅱ様式構描文への移行が平野のなかで無理なく行われたことを示すものである。これは、施文具に限らず山形文から波状文への移行や、加飾部位及び加飾量の増加等にも現れており、土器様式の変化過程が示される例として重要な資料といえるだろう。同時に、宮前川下流域の集落經營の継続性と環境（立地）変化を示唆する資料といえる。今後は、両者の属性による比較分析が課題となるところである。

北斎院地内遺跡1・2次調査では、15～16世紀の集落構造とその変遷が想定された。当地では、建物・井戸・溝・墓により集落が構成され、宮前川の氾濫に影響されながらも同地域に集落を継続的に經營したことが明らかとなった。建物・井戸は、出土遺物に恵まれないため、同時性を明確に提示するものではないが、今後の周辺域の調査によってその配置（組み合せ）は明らかになることと思われる。墓については、頭位、配列、構造、副葬品等が考古学的方法により明らかにされ、土壤分析では頭部付近になんらかの形で稻藁が置かれていた可能性があることを提示するにいたった。くわえて、土壤分析では、周辺の環境についても推定可能な資料が得られ、中～近世の景観復元の道をひらいた。

今回の調査では松山平野における中～近世の一般的な集落構造や景観を復元する資料が得られたものといえる。今後の中～近世の集落調査及び研究の一助となる遺跡であるといえる。

一方、自然科学的分析は、考古学では得られない目に見えない資料を提示してくれている。植生が明らかとなることで、生活や景観がより具体的に復元可能となることを、今回の調査で知りえたことは大きな成果といえる。

北斎院町一帯には、弥生・古墳・中世・近世の集落が存在し、今回の調査ではその一端が明らかとなったといえる。また、集落、特に中世集落の全体像を知れる地域であることが調査により確実となった。今後の調査課題は、中～近世における構造物の配置を明らかにすることが第一にあげられよう。

写 真 図 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ ニコンニューFM2 他
レンズ ズームニッコール28~85mm 他
フィルム プラスXパン・EPP
ネオンパンSS・カラーネガ

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ／ビュ--45G
レンズ ジンマーS240mmF5.6 他
ストロボ コメット／CA-322灯・CB2400 2灯（パンク使用）
スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

（白黒に限る。）

使用機材：

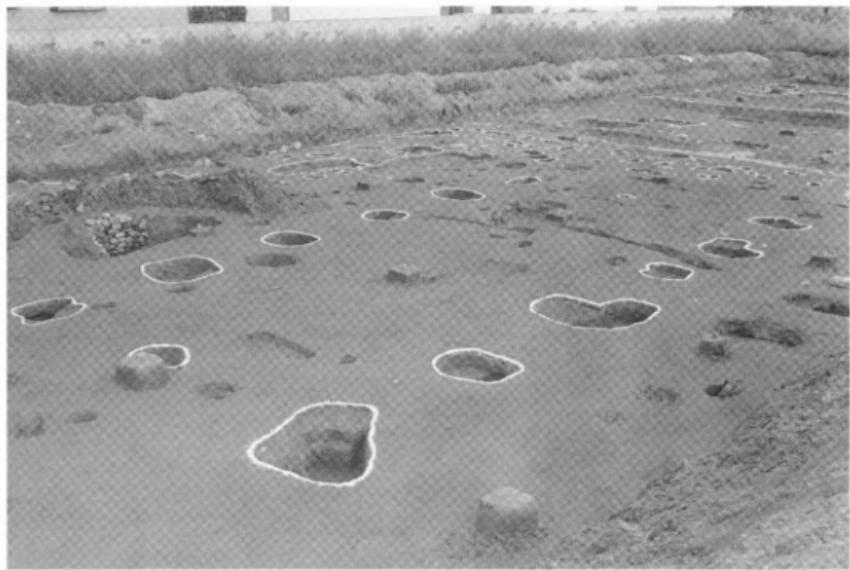
引伸機 ラッキー450MD
ラッキー90MS
レンズ エル・ニッコール135mmF5.6A
エル・ニッコール50mmF2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIRC

4. 製版 150 線

印刷 オフセット印刷
用紙 マットカラー110kg



1 造構検出状況〔東区〕(北より)



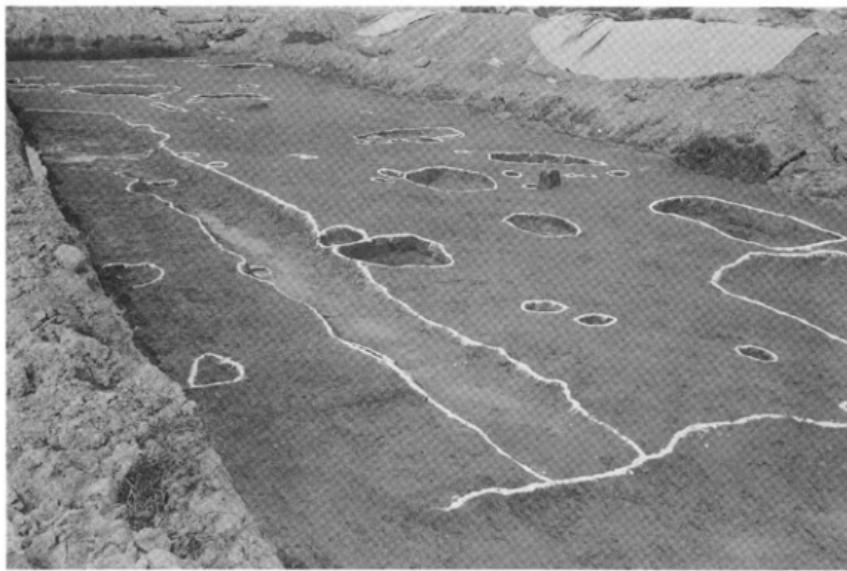
2 1号掘立柱建物跡(北西より)

北斎院地内遺跡 1次調査地

図版二



1 遺構検出状況①〔西区〕(南より)



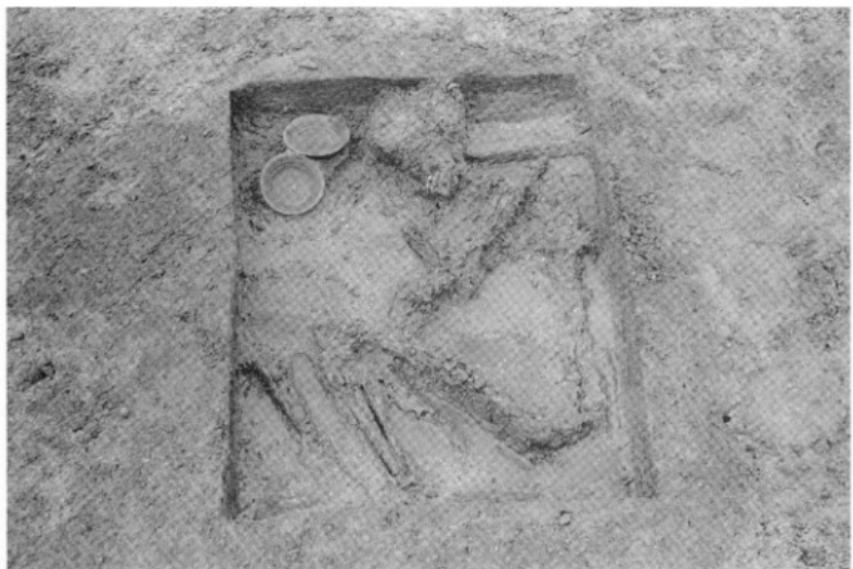
2 遺構検出状況②〔西区〕(南西より)

北斎院地内遺跡 1 次調査地

図版三



1 SD 1・2 (西より)



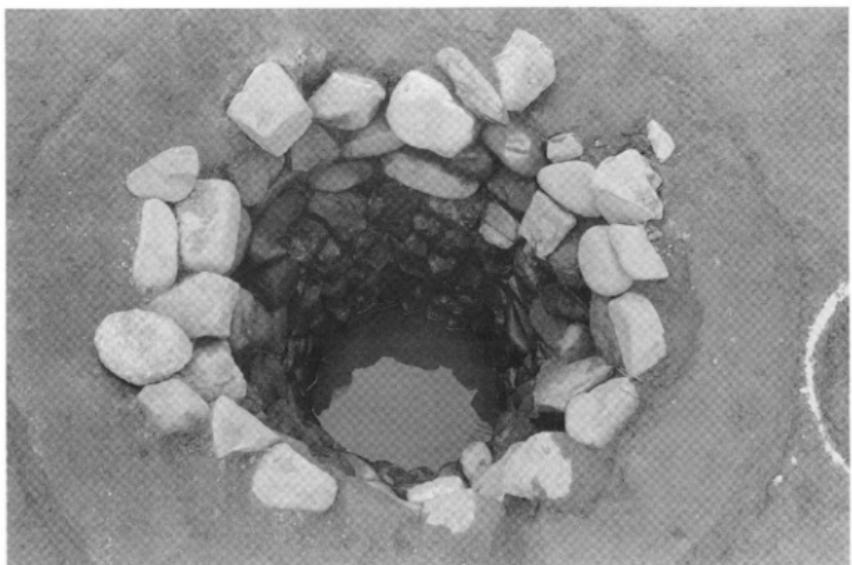
2 3号墓① (南より)



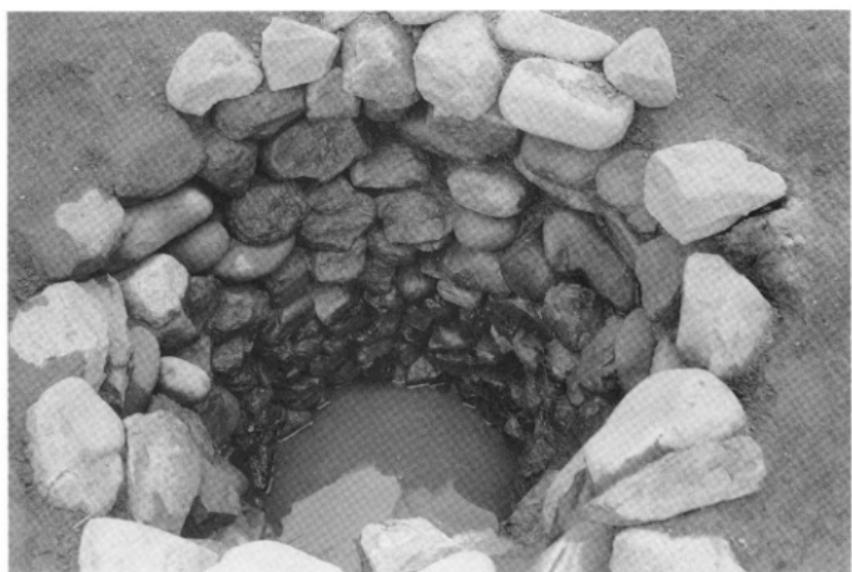
1 3号墓②(東より)



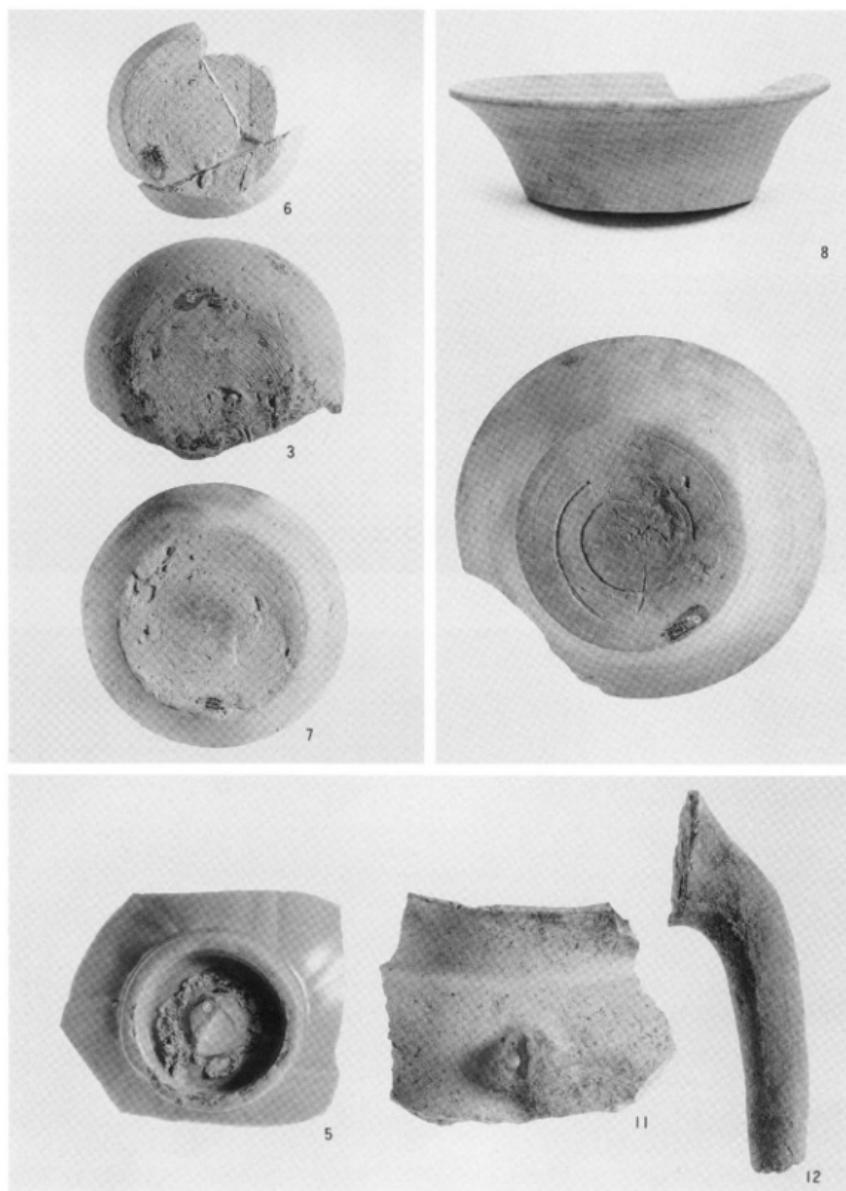
2 1号墓(南西より)



1 1号井戸（南より）



2 1号井戸（南より）



1 SD1出土遺物 (3・5), SD2出土遺物 (6・7・8), SK1出土遺物 (11・12)



14



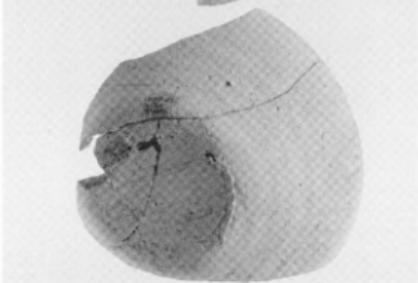
21



15



23



17



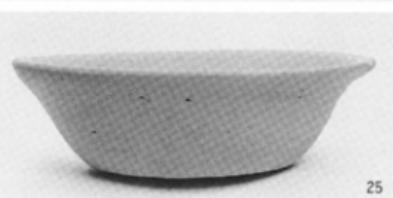
22



18



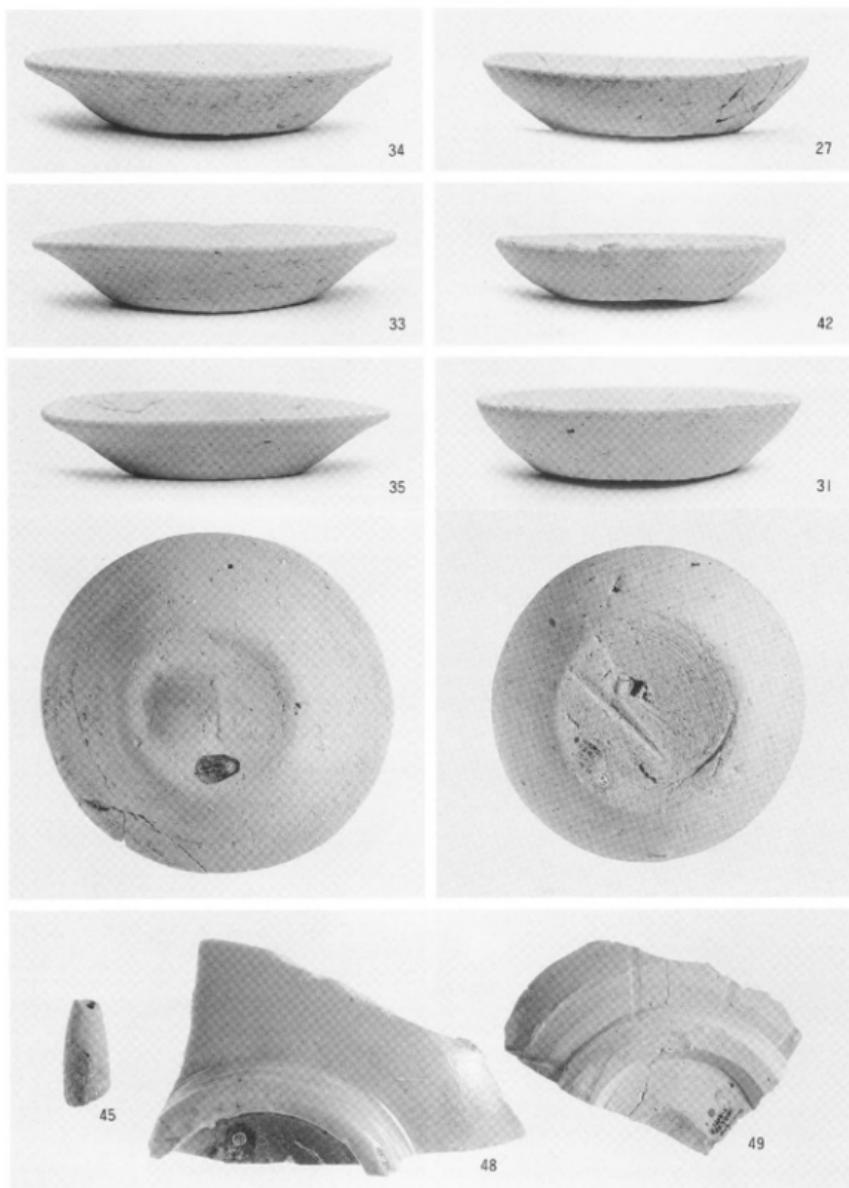
24



25

1 SP 97 出土遺物 (14), SP 251 出土遺物 (15・17), SP 290 出土遺物 (18)
墓 2 出土遺物 (24・25), 墓 3 出土遺物 (21～23)

図版八



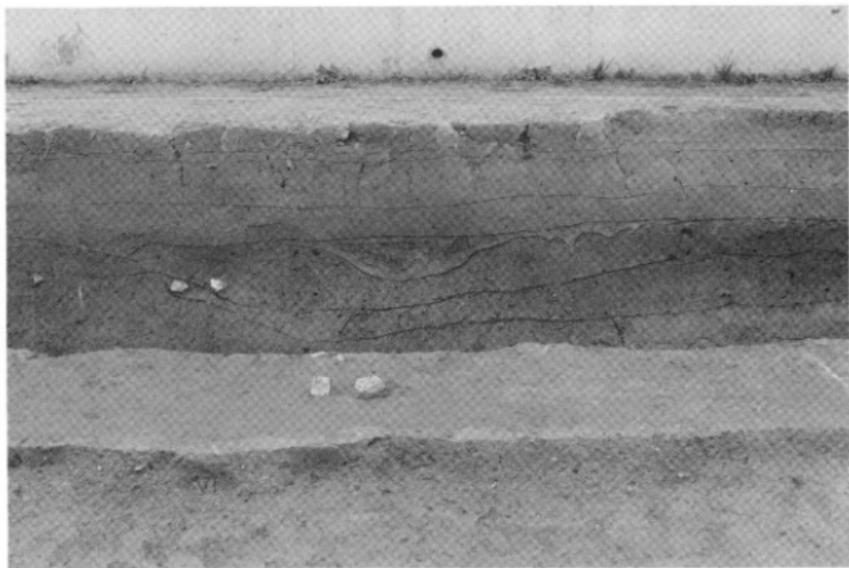
1 包含層出土遺物



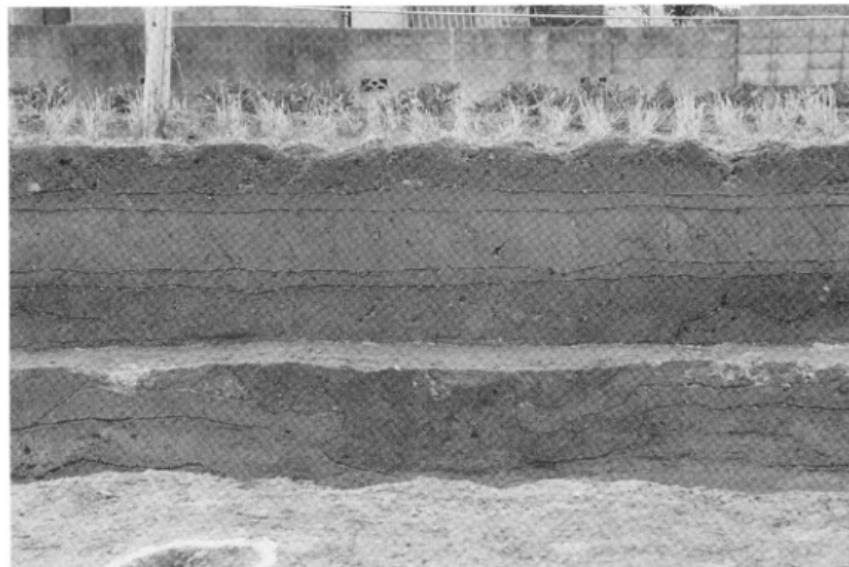
1 南区遺構検出状況①（北より）



2 南区遺構確認状況②（北より）

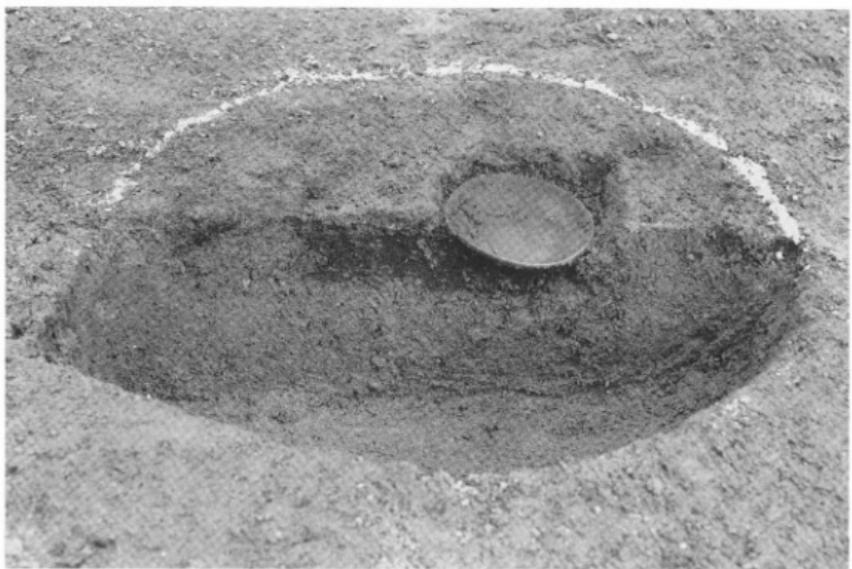


1 東壁土層（西より）

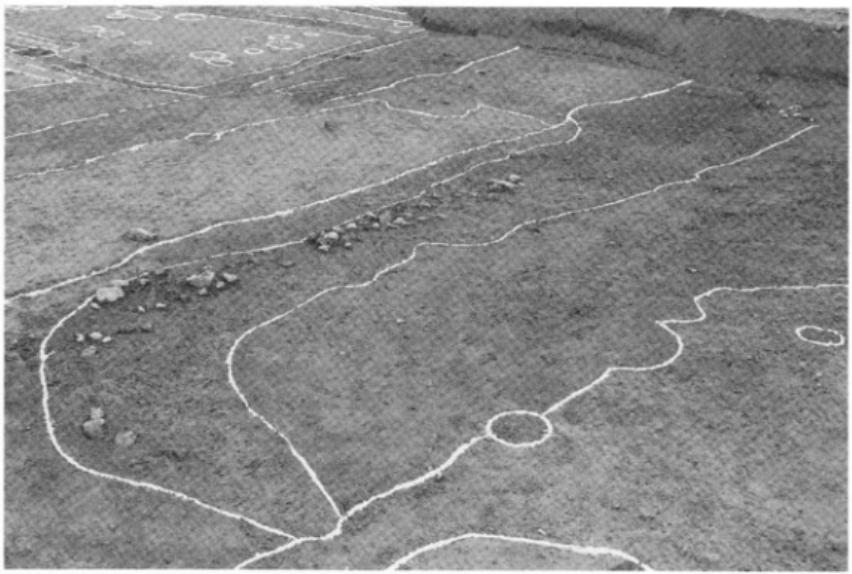


2 西壁土層（東より）

北斎院地内遺跡 2 次調査地



1 SP279遺物出土状況（南より）



2 SD 1・SD2 検出状況（南西より）



1 土塚墓 1 検出状況（南東より）



2 土塚墓 2 検出状況（南東より）

北斎院地内道路 2 次調査地



1 上 墓 1・2 検出状況近景（南より）



1 上 墓 1・2 検出状況遠景（南東より）

北斎院地内道路 2 次調査地

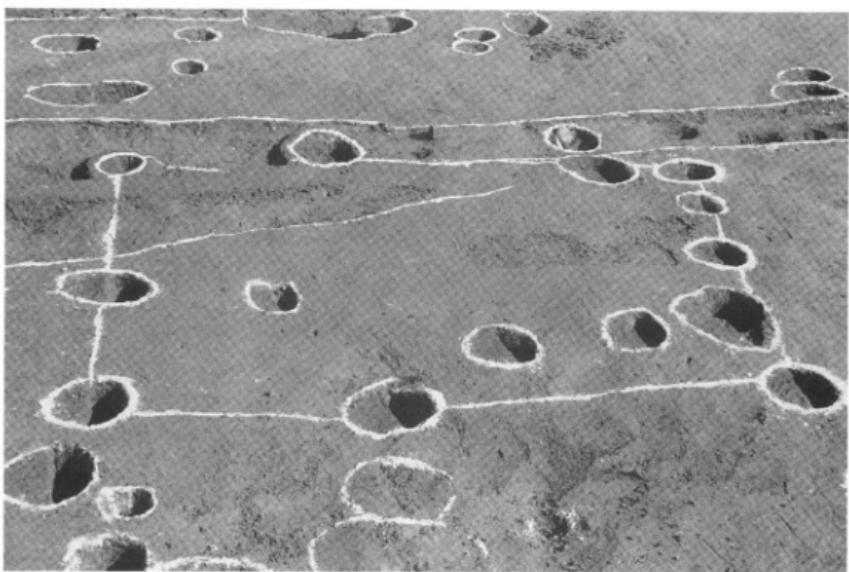


1 北区造構検出状況（北より）

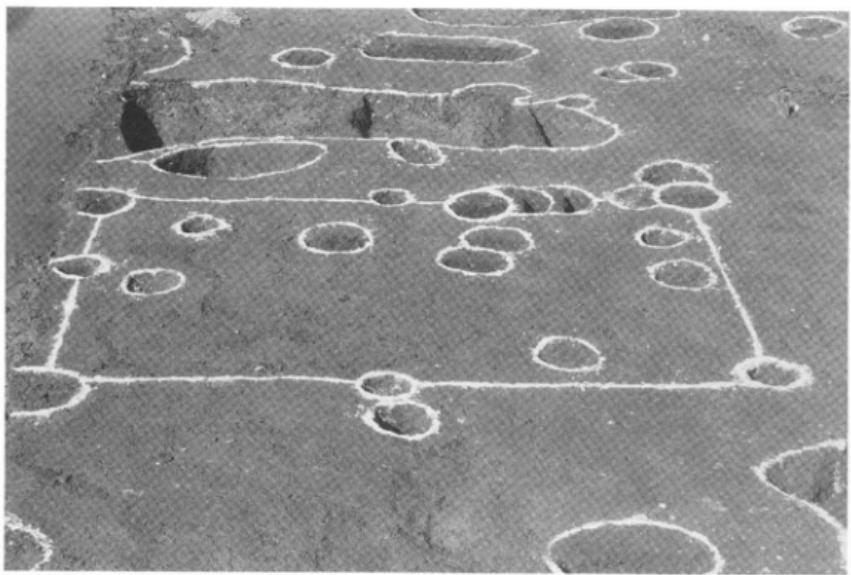


2 北区完掘状況（北より）

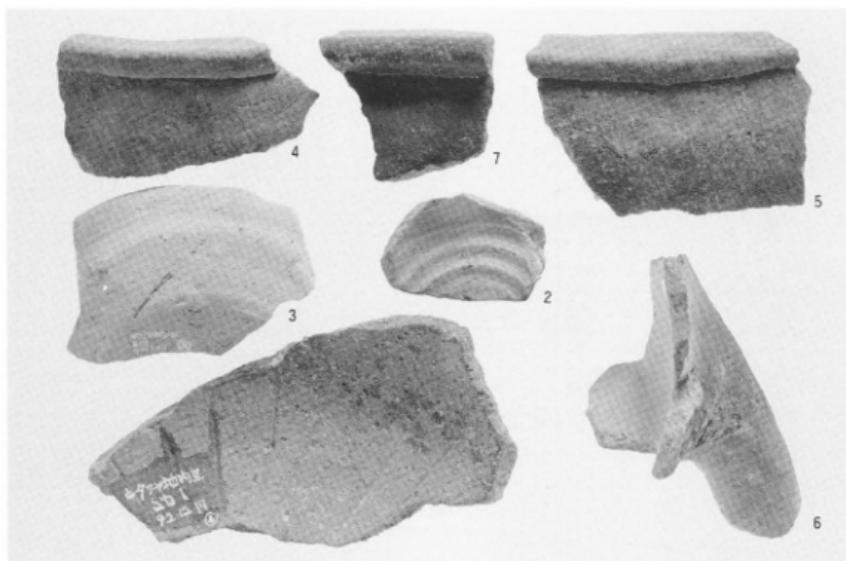
北斎院地内遺跡 2次調査地



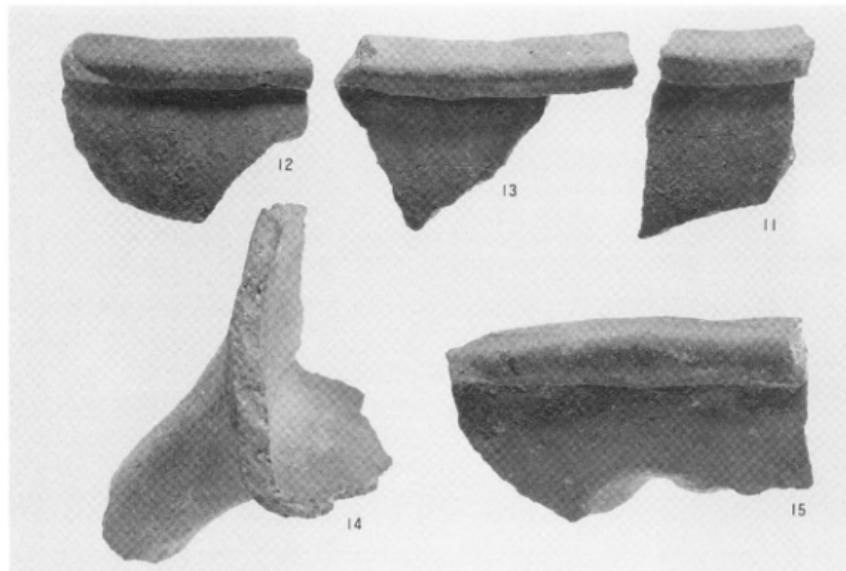
1 1号掘立柱建物址（西より）



2 5号掘立建物址（南より）



1 SD 1 出土遺物



2 SD 2 出土遺物

北斎院地内遺跡 2次調査地



19



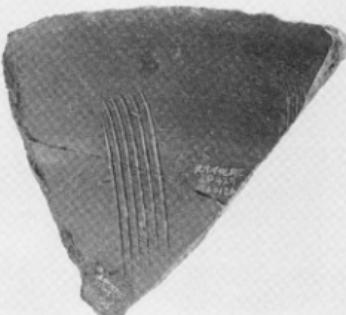
20



26



23



1 SP 279出土遺物 (19), SP 400出土遺物 (20), SP 427出土遺物 (23), SI 1 出土遺物 (26)



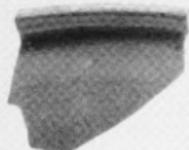
24



25



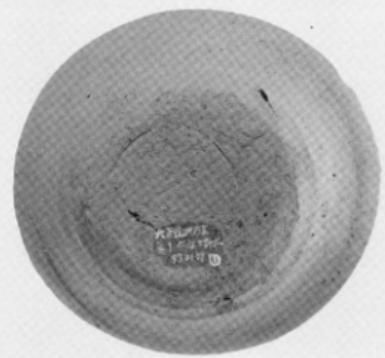
29



27

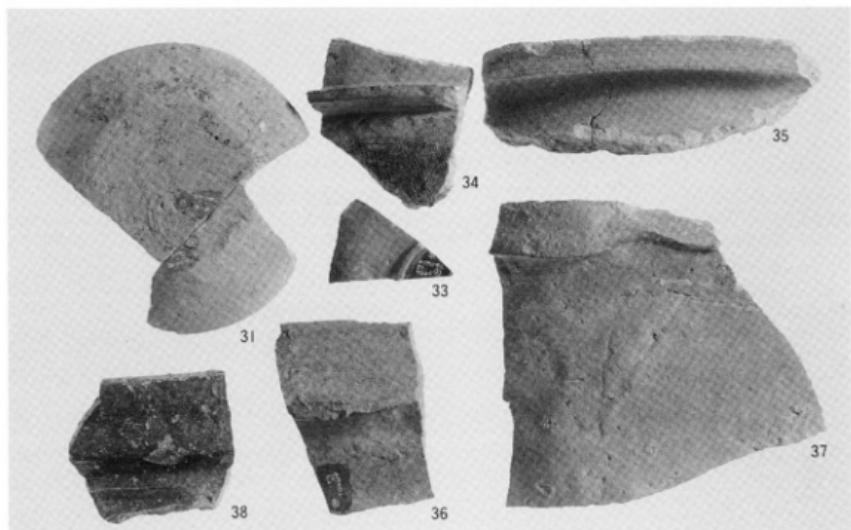


28

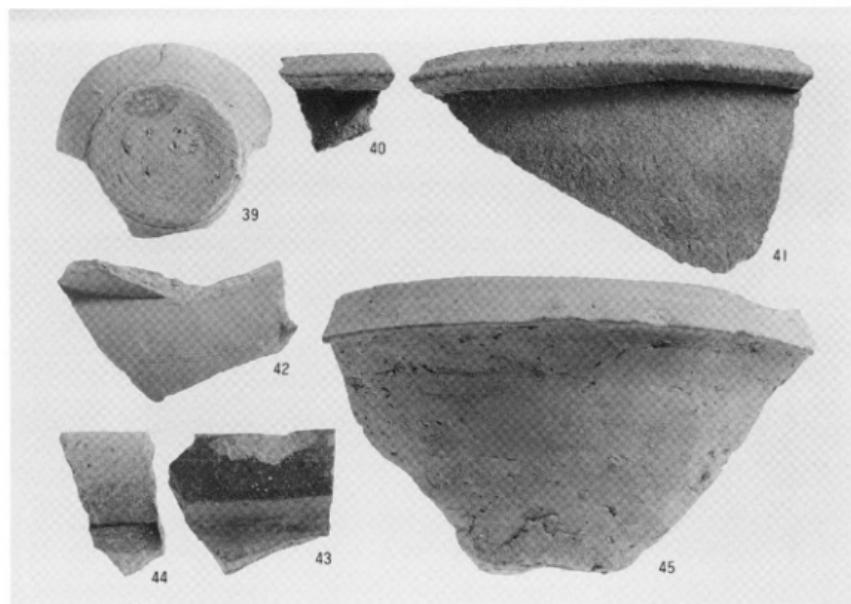


1 SD13出土遺物 (24・25), SX 1出土遺物 (27・28), 墓1出土遺物 (29)

北齋院地内遺跡 2 次調査地



1 包含層出土遺物①



2 包含層出土遺物②

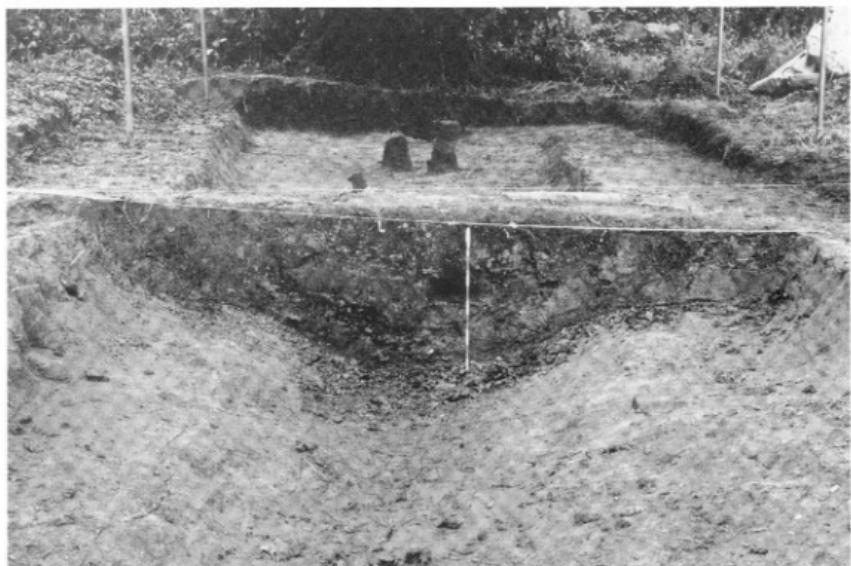
図版二〇



1 SD 1 (西より)



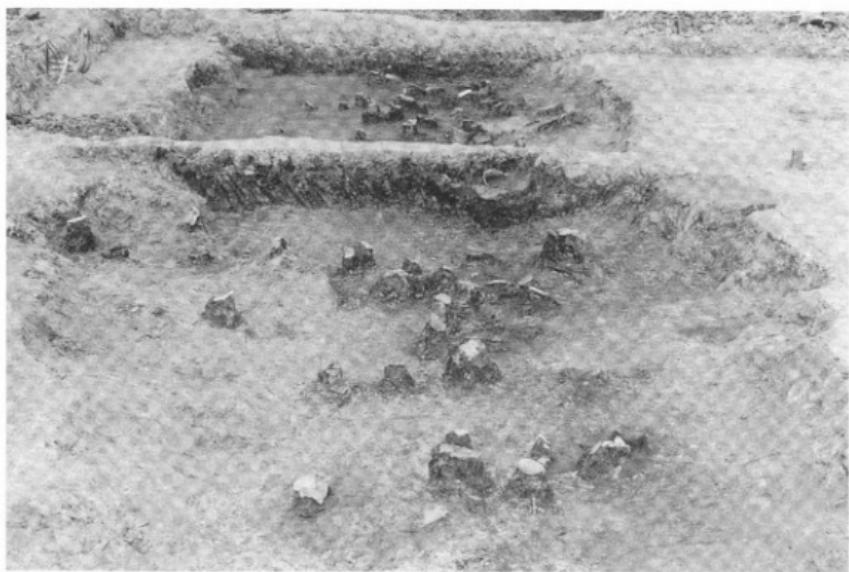
2 SD 1 (南西より)



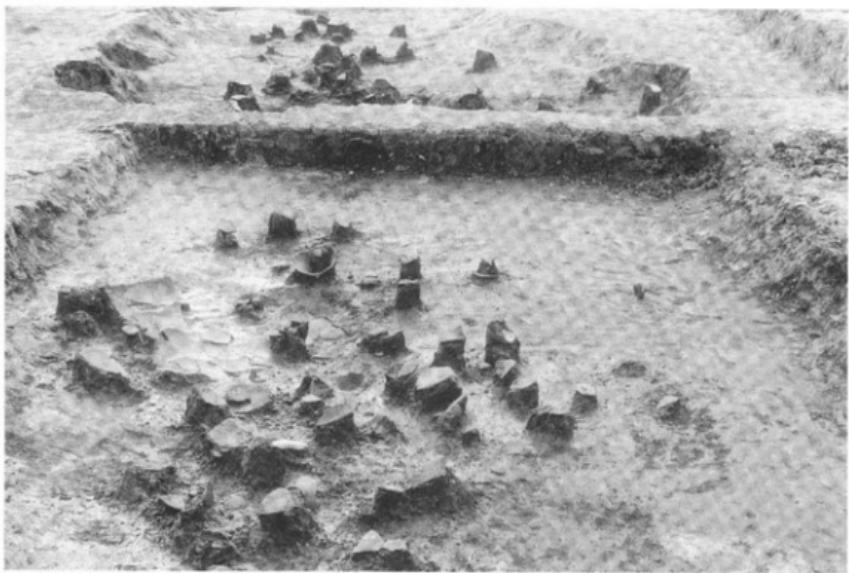
1 SD 1 断面土層①（西より）



2 SD 1 断面土層②（西より）



1 SD 1 遺物出土状況遠景①（西より）



2 SD 1 遺物出土状況遠景②（西より）



1 SD 1 遺物出土状況近景①（西より）



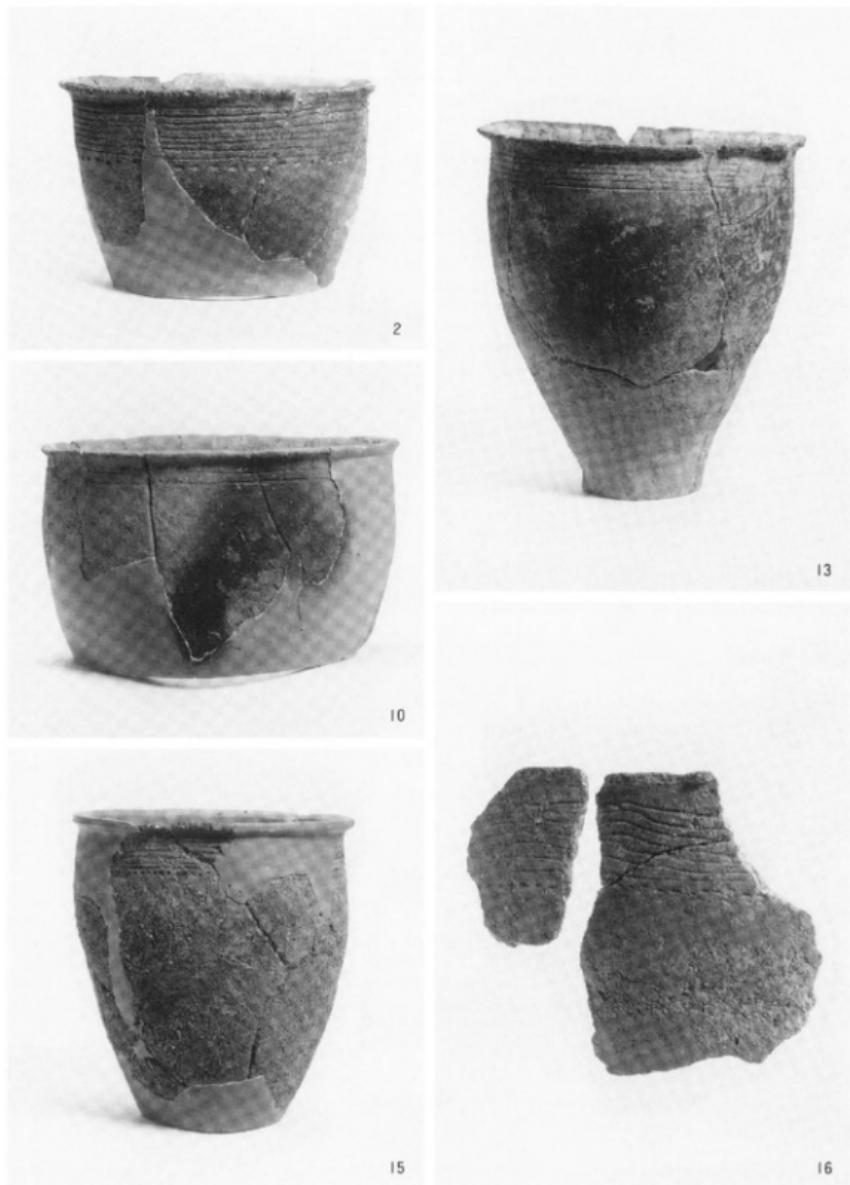
2 SD 1 遺物出土状況近景②（東より）



1 SD 1 遺物出土状況近景③（東より）



2 SD 1 遺物出土状況近景④（南西より）



1 SD 1 出土遺物①



18



28



19



29

1 SD 1 出土遺物②



43



40



51



52

1 SD 1 出土遺物③



44



53



54



57



61



59



58



62

63

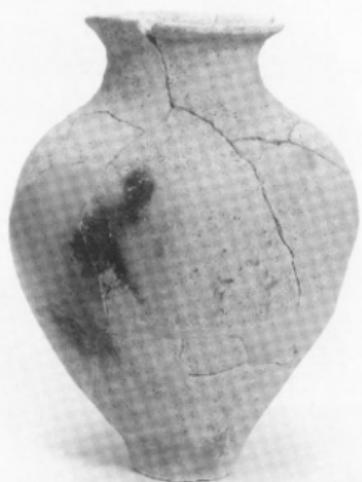
64



71



77



75



76

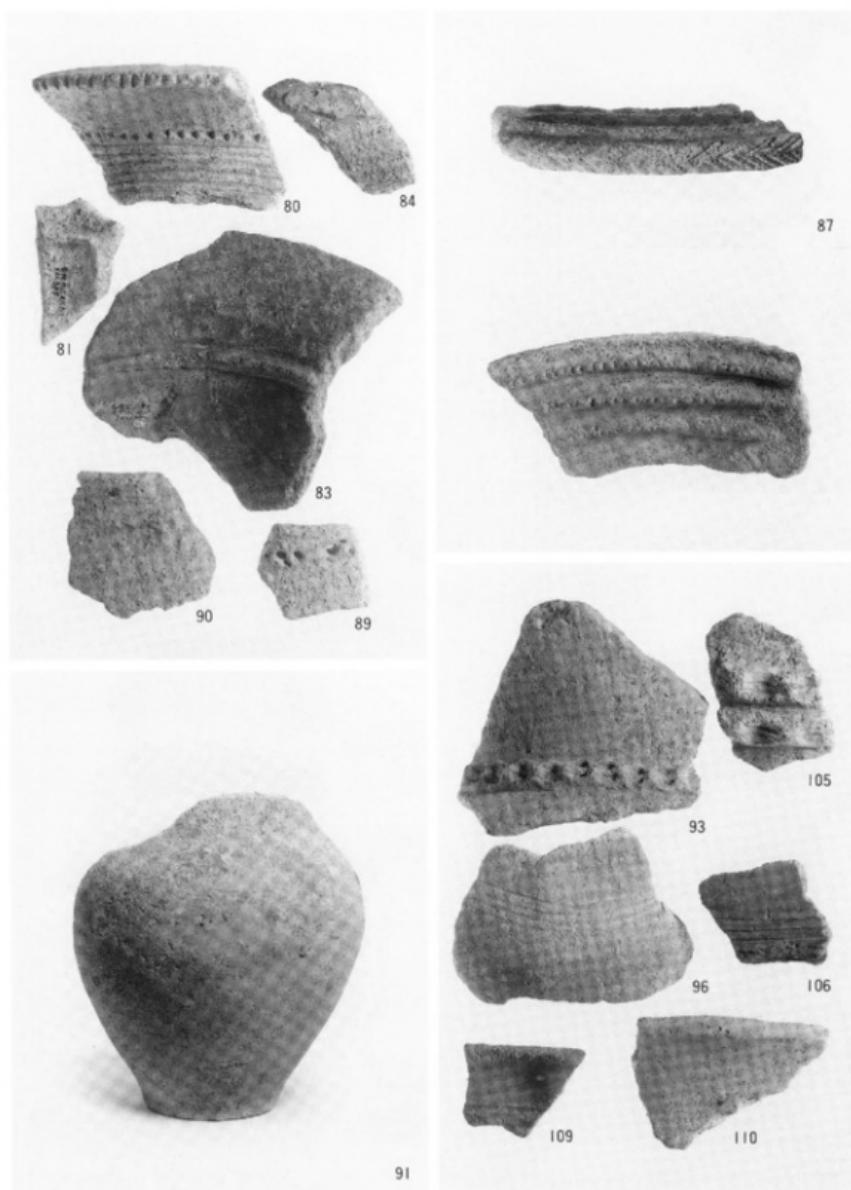


78

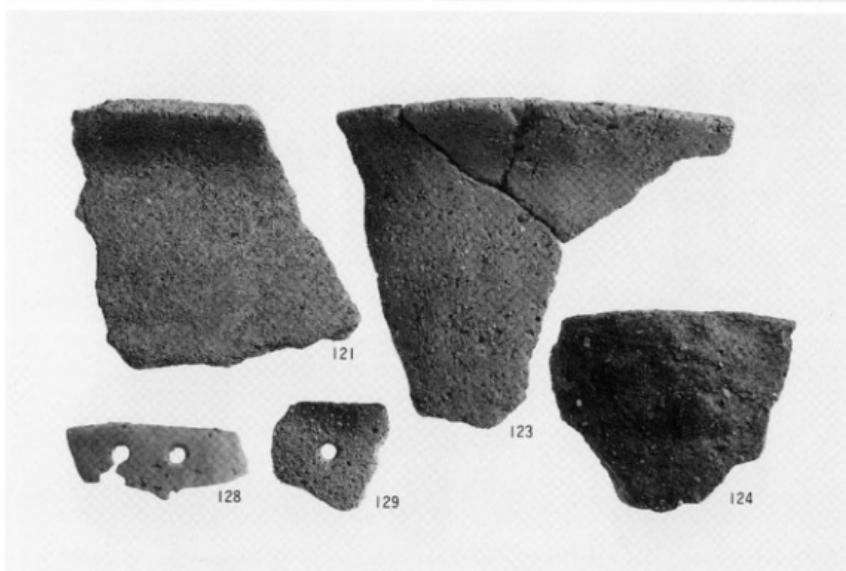
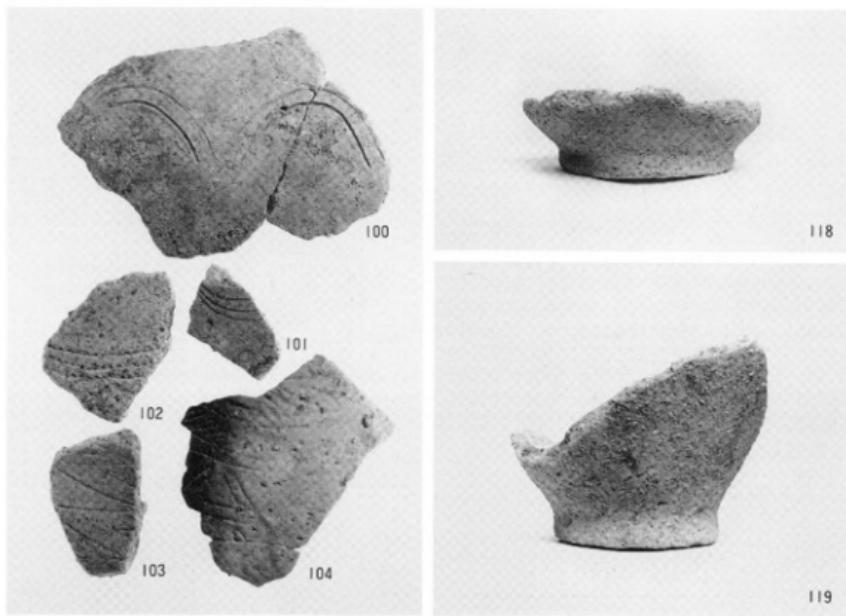


79

1 SD 1 出土遺物⑤



1 SD 1 出土遺物⑥



1 SD 1 出土遺物⑦



133



135



137



141



142



144



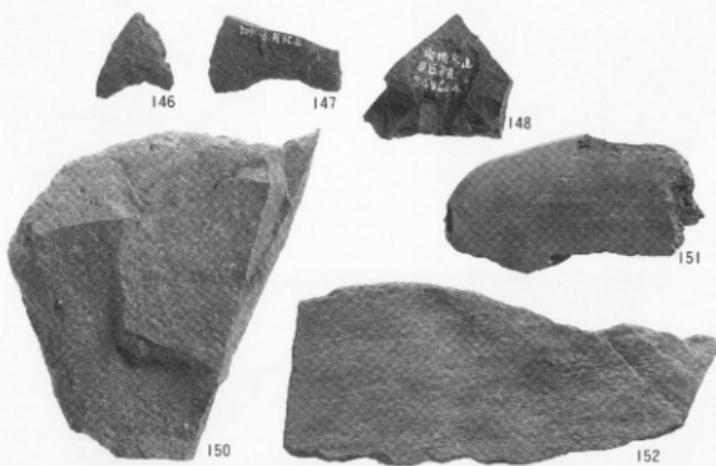
140



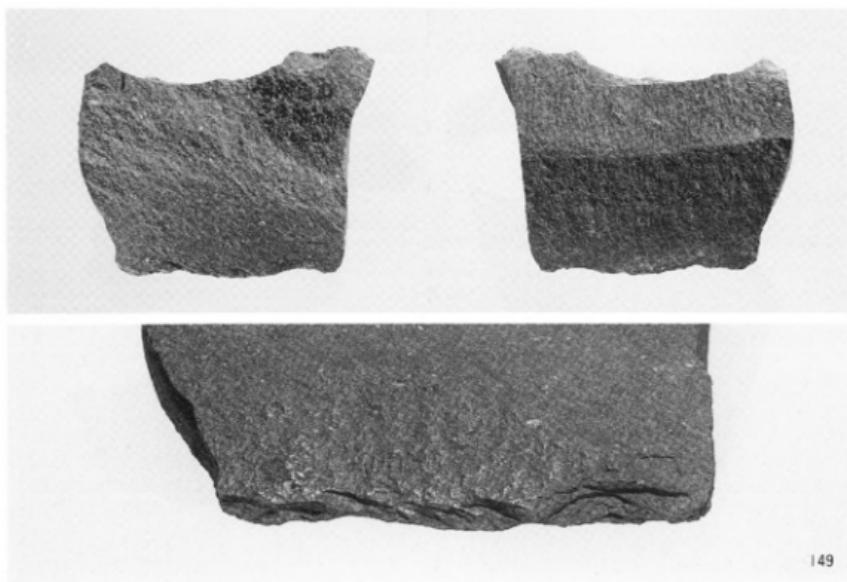
145



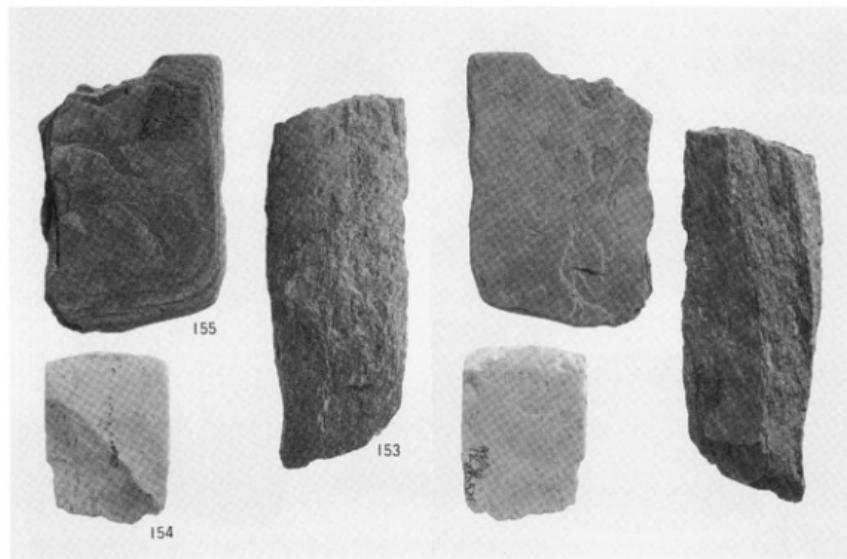
1 SD 1 出土遺物⑧



1 SD 1 出土遺物⑨



149

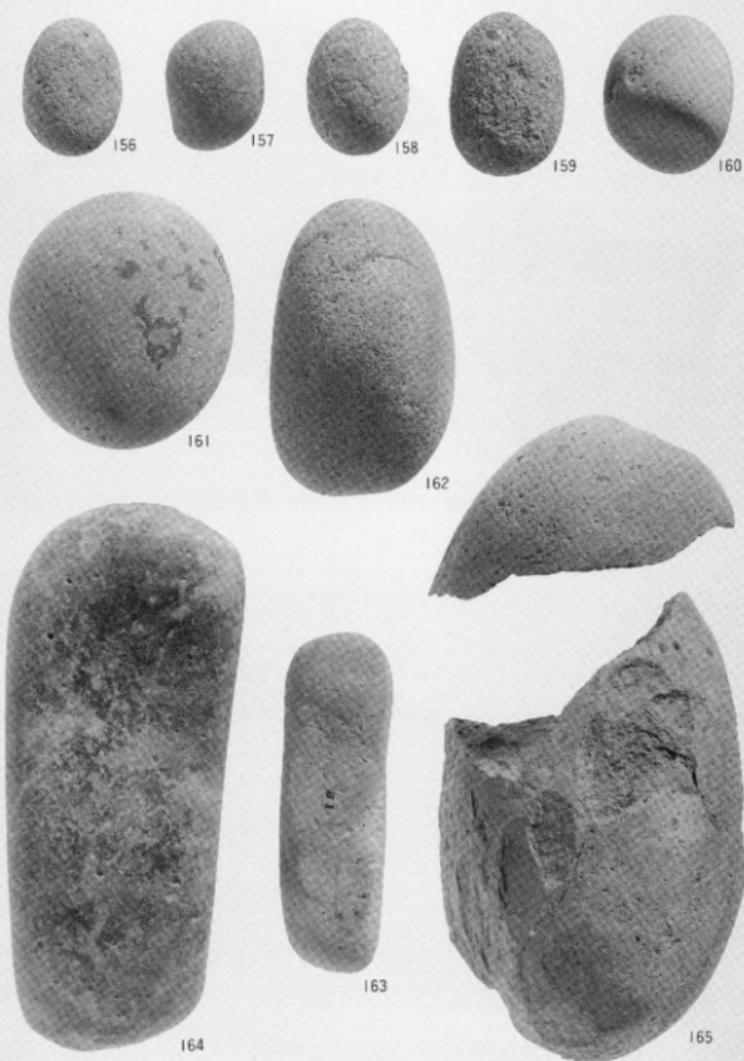


155

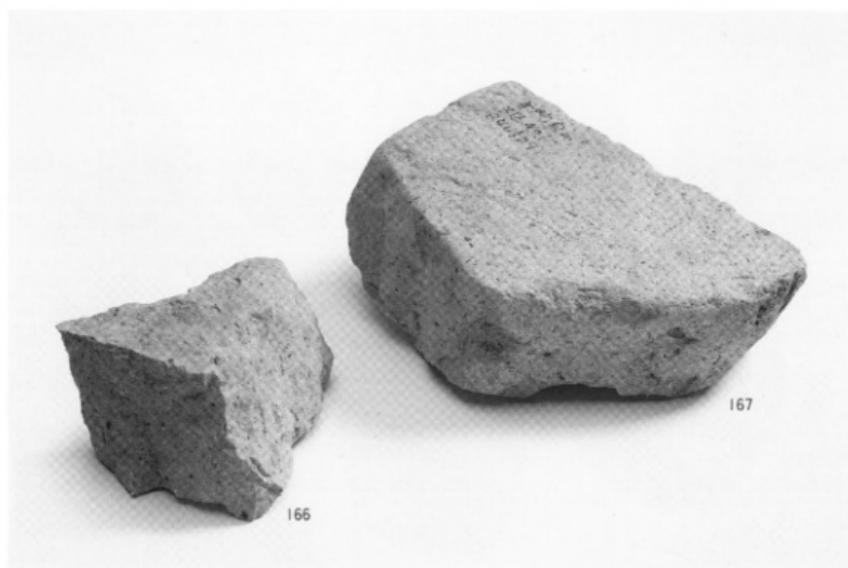
153

154

1 SD 1 出土遺物⑩



1 SD 1 出土遺物①



1 SD 1 出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	さやのいせき
書名	斎院の遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	梅木謙一・武正良浩・加島次郎
編集機関	財団法人 松山市牛窓学習振興財団 墓蔵文化財センター
所在地	〒791 愛媛県松山市南斎院町乙67-6 Tel 0899-23-6363
発行年月日	西暦 1994年 8月 1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北斎院地内 1次調査地	愛媛県松山市 北斎院町	38201		33°49'54"	132°44'00"	19880803～ 19881031	1,258	宅地開発
北斎院地内 2次調査地	愛媛県松山市 北斎院町	38201		33°49'54"	132°43'59"	19921116～ 19930208	1,149	宅地開発
斎院鳥山	愛媛県松山市 北斎院町	38201		33°50'11"	132°43'30"	19840515～ 19840604	1,803	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北斎院地内 1次調査地	集落 墓	中・近世	墓、掘立柱建物 土塙、溝、井戸、柱穴	土師器、陶磁器、 貨幣			16世紀の墓群	
北斎院地内 2次調査地	集落 墓	中・近世	墓、掘立柱建物 土塙、柱穴、井戸	土師器、陶磁器、 貨幣			16世紀の墓群	
斎院鳥山	集落	弥生	溝	弥生土器、石器			弥生時代前期末の 環濠	

松山市文化財調査報告書 第42集

斎院の遺跡

平成6年8月1日 発行

編集 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7-2

TEL (0899) 48-6605

発行 財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (0899) 23-6363

印刷 原印刷株式会社

〒791 松山市山越4丁目8-15

TEL (0899) 24-8823
